平成19年度　教員養成学部フレンドシップ事業報告書
授業科目名「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大YOU遊世間（ワールド）」の教師教育学研究　第14集

—地域貢献の「体験」に観る「臨床の知」の「省察」—

14th Annual Report on Shinshu University Project "You-you World" in practice (2007)
Pedagogical Research for Teachers

Reflections on "Experience-based Teacher Education"
through students' experience with community involvement in teacher training

2008年（平成20年）3月
信州大学教育学部

はじめに

信州大学教育学部長　**岩永恭雄**

平成 19 年度フレンドシップ事業が、昨年４月の発足式以来、多くの参加者による様々なイベントが実施されて、１年間の活動を終えるにあたり、その報告書『信大 YOU 遊世間（ワールド）』の教師教育学研究』（第 14 集）が刊行される運びになりました。

今年度第 14 期目を迎える本フレンドシップ事業では、全体目標を「共鳴」～共に感じ共に学ぶ　響き合いの輪～に設定し、９つのプラザ「XY サタデースクール」、「湯谷小子どもランド」、「信大茂菅ふるさと農場」、「にこにこクラブ」、「青木村えがおクラブ」、「麻績村 dE 遊ぼう」、「信州すざか農業小学校豊丘校」、「わらの会」、「虹の会」が長野県下各地で開催され、地域の人たちと教育学部学生との共同作業によって、実りある成果を挙げることができました。各プラザでの活動内容の詳細は、この報告書に記載されていますので、将来にわたって、この事業を継続してくれる学生諸君には、この報告書はおおいに参考になるものです。

大学卒業後は、学校教員になることを目指して勉学に励んでいる教育学部学生にとっては、こうした地域の大人や子供たちとの共同作業を通じた交流経験が、学校現場で教員として活動する際の宝物になることは言うまでもありません。本事業の趣旨に賛同されて、上記の各プラザで御協力いただいた地域住民の方々には、厚く感謝いたします。

学校教員が持つべき資質は、実践的指導力と学問的素養で、どちらかに偏ってはいけません。双方がバランス良く備わっていることが教員の必須条件でありましょう。後者を養う場は大学ですが、前者は学校で児童・生徒と接していく過程で、また地域住民との交流を重ねていく過程で養われます。このフレンドシップ事業に参加することによって得られたものには、ボランティアの精神、共同作業の進め方、環境問題に対する知識等多くのものがあったと思います。どれもが学校現場での活動に役立つもので、フレンドシップ事業での経験が十分生かされることを期待するものです。

本フレンドシップ事業の継続には、今後参加する学生諸君による新しいアイデアが提案されることも重要で、ただ同種の活動を続けていけばよいというものではありません。学問的知識・素養に基づいた活動計画を立てて、実行してもらいたいものです。それこそが信州大学教育学部が掲げる『臨床の知』の精神を実現することになります。今後の実りある活動を期待いたします。

もくじ

はじめに　岩永恭雄　信州大学教育学部長……1
もくじ／凡　例
共鳴しあうYOU遊の魅力　春原圭佑　第14期「信大YOU遊世間」運営委員長……5
社会力の視点からみた「信大YOU遊世間」の意義　土井　進　信州大学教育学部教授……6
YOU遊との出会い　三崎　隆　信州大学教育学部准教授……8
「信大YOU遊世間」の果実の一側面 ～「臨床の知」の会得と深化～
関川光彦　長野県農業大学校講師……9

1．信大茂菅ふるさと農場（8年目）……11
◇実践から得た「臨床の知」
八代目「信大茂菅ふるさと農場」　洞出直美・上田雄介……14
◇地域協力者からの評価
「信大茂菅ふるさと農場」の実体験に学ぶ　林部信造　農業……18

2．XYサタデースクール（6年目）……19
◇実践から得た「臨床の知」
子どもたちとともに学ぶ場　落合静香・石井絵理子……21
活動に見る地域とのつながり　滝沢典子……28
◇地域協力者からの評価
XYサタデースクールの活動について
唐木忠重　NPO法人XYサタデースクールネットワーク常務理事・事務局長……30
「信大YOU遊世間」と連携して
小濱政興　NPO法人XYサタデースクール・JAグリーン長野校校長……30

3．湯谷小子どもランド（6年目）……32
◇実践から得た「臨床の知」
湯谷小子どもランドのメインイベント！！―湯谷キャンプで学んだこと―
田村将太・齋藤有希・布山奈津美・野口洋憲……33
◇地域の保護者からの評価
子どもたちの成長をともに感じる時、かけがえのない瞬間の連続
中谷隆秀　湯谷小学校子どもランド　保護者代表……38

4．にこにこクラブ（6年目）……40
◇実践から得た「臨床の知」
出会い＋笑顔＋つながり＝大きな成長
「にこにこクラブ」の活動を通し、子どもたちと関わる中で学んだこと
青木みなみ・上田綾乃・落合静香……41
◇保護者からの評価
笑顔で接して頂いて感謝しています　西澤真由美　保護者代表……47

5．青木村えがおクラブ（3年目）……48
◇実践から得た「臨床の知」
地域の人たちによる地域づくり　加藤博美・土田恵久・須貝和之・石井絵理子・青木智博……49
◇青木村教育委員会からの評価
「青木村えがおクラブ」の青木村での活動の意義
上原博信　青木村教育委員会事務局……54

6．麻績村 dE 遊ぼう（3年目）……56
◇実践から得た「臨床の知」
みんなの笑顔と「わ」の生まれる場所　旗持貴優・小池真弓・平野　結……57
◇連携団体からの評価
今年咲いた花が実をつけてくれるように
石田恵子　麻績村、G-kid's わくわくクラブ代表……62
おみ図書館に定着した YOU 遊世間の活動―心待ちの子どもたち―
橋渡久美子　麻績小学校司書……63

7．わらの会（2年目）……64
◇実践から得た「臨床の知」
音楽を通し他を認める子どもの姿を見つめて　大家恵梨子……65
◇連携団体からの評価
音楽療法を用いた「わらの会」での実践　島田友美子・西沢　泉　長野音楽療法研究会……69

8．信州すざか農業小学校豊丘校（2年目）……71
◇実践から得た「臨床の知」
子どもとの活動を通しての内面理解～実際に経験したからこそ見えてくるもの～
藤岡泰裕・細田有希・山崎友美……73
◇地域社会からの評価
農業を体験して、食べ物に感謝する気持ちを養う
羽生田郁雄　信州すざか農業小学校豊丘校校長……78

9．第6回 YOU 遊フェスティバル……80
○講座内容……83
1．宝を見つけるのは君だ　2．オリジナルボートを作ろう
3．レッツ プレイ ハンドベル　4．ピタゴラそうちをつくっちゃおう
5．みんなで楽しくソーラン節をおどろう　6．ぼく・わたしはケーキやさん
7．かえってきた！！ ペーパーガン・シューティング　8．野外クッキング♪♪
9．きょうは、ぼく・わたしが HERO なりきり隊　10．おやこでおやき
11．うどん名人になろう！！　12．みんな集まれ　わんぱく運動会
13．第2弾　ロケット

○講演会内容
「学生時代に培うべき教師の専門性」　講師　牛山栄世先生　信濃教育会教育研究所副所長
報告者　肥留間淳也・宮川はるな……89
◇実践から得た「臨床の知」
「YOU 遊フェスティバル」を学生がやる意義とは　常盤千明・大髙真理……93

「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介……100
編集委員会規程……101
おわりに……102
編集後記……102

凡　例

執筆者が信大生の場合、適宜、専攻名と学年を略記した。以下に「例」と「略称」を示す。

例：「実３」＝教育実践科学専攻３年　「言２」＝言語教育専攻２年

専攻名とその略称

実：教育実践科学専攻	言：言語教育専攻	社：社会科学教育専攻	理：理数科学教育専攻
芸：芸術教育専攻	保：保健体育専攻	生：生活科学教育専攻	障：障害児教育専攻
地：地域スポーツ専攻	野：野外教育専攻	心：心理臨床専攻	院：大学院生

共鳴しあうYOU遊の魅力

第14期「信大YOU遊世間」運営委員長
春原圭佑（教育実践科学専攻3年）

1．第14期のはじまり

平成19年4月15日に信州大学にて発足式が行われ、第14期「信大YOU世間」がスタートしました。14期の目標は「共鳴～共に感じ 共に学ぶ 響き合いの輪～」とリーダー全員が話し合って決めました。これは「信大YOU遊世間」という活動の中で、地域、学生、子どもがお互いの姿から学び合える場にしたいという願いからこのような目標になりました。

学生と子ども、学生と地域、そして子供同士、学生同士などその学びのベクトルは様々ですが、「YOU遊」という活動は子どもの学びのみに終わらない、不思議な魅力をもった団体だと思っています。そのよさを十分に出した一年にしたい、そんな願いをもちながら、第14期の「信大YOU遊世間」がスタートしました。

2．「YOU遊」と社会力

今年は新しい試みとして門脇厚司先生の提唱する「社会力」という概念に関して、ディスカッション形式の授業を行いました。社会力とは社会を作っていく意思や力であり、人との相互行為によってそれは育つと門脇先生はおっしゃっています。学生の一部はその社会力の概念を根幹において教育行政を行っている青木村の実践を体験したりと、今年は活動を実践だけでなく、理論からもアプローチし、より一層の充実をはかりました。「YOU遊」という活動では、活動を企画する際の、様々な人とのふれあいがありそれによって学生の社会力が鍛えられる場であると私は思っています。

3．一年間の活動を終えて

一年の活動を終えて、なかなか二年生の参加人数が増えなかった事など、反省点はありますが、なにより無事に運営できた事が一番よかったと思っています。それができたのも、大切なお子様を私たちのような学生に任せてくださった保護者の皆様、そして暖かく学生の成長を見守ってくださった地域協力者の方々、なにより私たち学生のために力を尽くしてくださった土井先生のご協力のおかげであります。心より感謝しております。また一年間プラザを引っ張ってきたプラザ長、副プラザ長の頑張りには頭が下がります。みんな本当にお疲れ様でした。また「YOU遊」に関わってくれたすべての人に心より感謝したいです。いろんな人に支えられてこのような活動が出来ているのだと感じる事ができたのも私には大きな学びです。ありがとうございました。

この一年間で多くの学生の涙と、子どもたちの笑顔に出会えました。お互いの姿を見ながら、自分を振り返り、私たちはちょっとずつ成長しているのだと思います。私はそんな姿こそ「共鳴」であり「YOU遊」の魅力なんだと思っています。いろんな人にこの「YOU遊」の魅力が伝わって欲しい。私たちの任期はこれで終わりますが、来期の「信大YOU遊世間」の更なる飛躍を心より願っております。

社会力の視点からみた「信大 YOU 遊世間」の意義

土井　進（信州大学教育学部教授教育科学講座）

1．第 14 期「信大YOU遊世間（ワールド）」の目標と組織

第 14 期は、目標として『共鳴』～共に感じ 共に学ぶ 響き合いの輪～を掲げ、以下のような運営組織のもとで 1 年間にわたって活動が展開された。

運営委員長　　春原　圭佑（教育実践科学専攻３年）
副運営委員長　須貝　和之（社会科学教育専攻３年）
副運営委員長　石井絵理子（社会科学教育専攻３年）

(◎プラザ長　○副プラザ長)

プラザ名		連携団体・協力者	役員	専攻・学年
信大茂菅ふるさと農場		JA ながの、茂菅地区農家	◎洞出　直美 ○上田　雄介	教育実践科学専攻３年 理数科学教育専攻３年
XY サタデースクール	ながの校(低学年)	JA 長野中央会	◎落合　静香	社会科学教育専攻３年
	ながの校(高学年)	NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク	○石井絵理子	社会科学教育専攻３年
	グリーン長野校	長野西高校・清泉女学院大学	◎滝沢　典子	障害児教育専攻３年
湯谷小子どもランド		長野市立湯谷小学校保護者	◎田村　将太 ○野口　洋憲 ○布山奈津美 ○齋藤　有希	教育実践科学専攻３年 社会科学教育専攻３年 言語教育専攻３年 言語教育専攻３年
にこにこクラブ		長野県長野養護学校保護者	◎青木みなみ ○上田　綾乃 ○落合　静香	障害児教育専攻３年 教育実践科学専攻３年 社会科学教育専攻３年
虹の会		城下小学校軽度発達障害児親の会	◎堂前　直人	障害児教育専攻３年
信州すざか農業小学校豊丘校		須坂市教育委員会	◎藤岡　泰裕 ○細田　有希 ○山崎　友美	教育実践科学専攻３年 生活科学教育専攻３年 生活科学教育専攻３年
わらの会		長野県長野養護学校保護者	◎大家恵梨子	社会科学教育専攻３年
青木村えがおクラブ		青木村教育委員会 青木村地球クラブ	◎加藤　博美 ○石井絵理子 ○青木　智博 ○土田　恵久 ○須貝　和之	教育実践科学専攻３年 社会科学教育専攻３年 教育実践科学専攻３年 社会科学教育専攻３年 社会科学教育専攻３年
麻續村 dE 遊ぼう		麻續村教育委員会 おみ図書館	◎旗持　貴優 ○平野　　結 ○小池　真弓	理数科学教育専攻３年 障害児教育専攻３年 生活科学教育専攻３年
第６回 YOU 遊フェスティバル			◎常盤　千明 ○大高　真理	教育実践科学専攻３年 教育実践科学専攻３年

今期の活動が無事、大成功で終了することが出来たのは、一重に学生の皆さんの真剣さと情熱の賜であると思う。また、それを支えて下さった地域社会の皆様の温かいご理解とご協力のお陰である。ここに衷心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。今年で 14 年目を迎えた「信大 YOU 遊世間」は、参加学生の人数においても参加児童の人数においてもこれまでにない大規模なものとなった。

「信大 YOU 遊世間」の活動は、月曜日の昼休みに開催される運営委員会（正副運営委員長

３名と 11 の正副プラザ長、計 25 名で構成）において、水曜日の昼休みに開催される全体会（参加者 58 名）に向けての打ち合わせを行う。全体会は通年で 27 回開催され、各プラザから活動計画が発表され、参加学生を募るというやり方で推進されてきた。

「信大 YOU 遊世間」は「社会体験実習」という授業科目の一部分となっており、授業においては門脇厚司著『子どもの社会力』を教科書として、社会力の視点から「信大 YOU 遊世間」の意義について考察した。次に４名の学生の考察を紹介する。

２．学生自身の社会力育成の場

「YOU 遊世間」では企画から運営・実行の中に子どもたちや学生の相互行為が多く見られる。門脇先生の著書にもあるように、人の社会力を育てるには他者との相互行為が極めて重要である。相互行為と社会力は密接につながっているのだ。したがって、「YOU 遊世間」の活動は社会力を育む場といえると考える。参加する子どもに相互行為の場を提供しよう、社会力をつけさせようと考え企画し、運営・実行する学生も無意識のうちに相互行為を行い、社会力を身につける過程を踏んでいるのだ。「YOU 遊世間」は、子どもたちにとっても学生にとっても、その活動に参加する地域の方々にとっても貴重な相互行為の場であり社会力を身につけるための場であるのだ。」（小西舞）

「私たちは「YOU 遊」を子どもたちのためになる場にしたいと願いながら活動しているが、実は子どものためを思って活動していることが、結局は自分の社会性や社会力を育てる場となっている。つまり、「信大 YOU 遊世間」の意義は、子どもの社会力をつけさせようと学生スタッフが頑張ることで、子どもにも社会力がつき、学生にも社会力がつくという意義があると私は考える。」（五味沙織）

「私は「YOU 遊フェスティバル」実行委員会という社会をつくり、その社会を運営し、今までにない「YOU 遊フェスティバル」をつくるために、実行委員会のメンバーと企画している。実行委員会のメンバーのことも考え運営しようとしたり、参加してくれる全ての人それぞれの気持ちを考えながら企画したりすることは、簡単なことではなく、悩む毎日である。しかし、その相手の気持ちや相手の状況・立場を考え、相手を知るということは、門脇先生が述べている「社会力」の基盤となっている能力であると私は思う。このように私たちは「YOU 遊世間」を運営していく中で、社会力を培うために必要な力を身につけていると言うことに気づく、ゆえに、この「YOU 遊世間」は、社会力を培うために必要なものであるということになる。」（常盤千明）

「私は社会力の観点で「YOU 遊」を見たときに、学生こそ一番社会力がつくのだと考えている。そもそも「YOU 遊」に参加している人たちというのは何かしら意思がある人たちである。そもそもそれ自体が社会力なのではないだろうか。そんな人たちが集まって、一つのものをつくりあげるために協力することが余儀なくされる。そこに相互行為がかならず発生する。この相互行為は必要感があるものであるため、自然に人との交流が深まっていく。そんなことを通して、社会力を持った人間同士が相互行為を繰り返すのである。私は社会力のある人間でしか、人の社会力は育てられないのだと考えている。その点で、学生間で行われる相互行為が非常に重要であり、社会力の向上につがっていると言える。」（春原圭佑）

「信大 YOU 遊世間」の実践には学生同士の切磋琢磨が漲っており、深い友情が育まれている。この良き伝統を踏まえ更なる発展へと精進してゆきたいと思う。

YOU 遊との出会い

三崎　隆（信州大学教育学部准教授）

私は本年度（平成 19 年４月）に信州大学教育学部に赴任しましたが、本学部の「YOU 遊」の取組は全国的に知られている著名な教育活動の一つですので、学生の皆さんが自発的にかつ積極的に子どもたちとの関わりをもって自らを高めていこうとする教育実践の素晴らしさには注目していました。

私が、毎週水曜日のお昼休みに参加している学生の皆さんが集まって、それぞれの活動の報告や今後の予定などを報告し合っている「YOU 遊」の全体会と呼ばれる会合に参加し始めたのは 10 月からでしたが、参加してみて驚いたことがたくさんあります。

参加してみて驚くことは、何より、参加している学生の皆さんが生き生きと活動している様子が報告されることです。「生き生き」という表現を使う根拠となる判断材料が幾つかあります。

一つは、「YOU 遊」の活動が 10 を超える数のグループによって行われている上に、それぞれの活動報告が講義室の黒板一面に書かれていることです。

二つ目は、報告する学生の皆さんはすべて自信に満ちあふれている報告をします。はっきりとした声で、聞いているこちらをしっかり見つめて、語句に迷いはありません。おそらく、報告者のグループの活動に参加すれば、計画的に導いていってくれるであろうという予感があります。

三つ目は、考え方が実にポジティブで、自分たちの活動を如何にしたらよりよくできるであろうかという考え方に立っています。だからこそ、共感する学生の皆さんを増やしていくのではないかと思います。もちろん、私も共感します。

四つ目は、学生の皆さんが実に楽しそうに活動の報告をしている点です。大学側にさせられているという雰囲気は微塵も感じられません。何より素晴らしいことですし、「YOU 遊」が継続している大きな要因の一つであろうと思われます。

五つ目は、純粋にボランティアで活動している学生の皆さんがとても多いことです。次から次へと会場に入ってくる学生の皆さんがいることに驚くとともに頼もしさを感じました。志の高い皆さんなればこそ、あれだけの活動が企画、運営できるのであろうと思います。学生の皆さんから学ぶことの多い収穫のある「YOU 遊」の全体会です。

初めて見て聞いての「YOU 遊」なので、これが当たり前の状況になるであろうと思いながら、いつも参加して学生の皆さんの凄さに驚いています。学生の皆さんからたくさんの勇気と元気をもらってきているのがとても有り難いことです。来年度以降、どのような展開になるか分かりませんが、当方は本年度のこの凄い状況を判断基準にして評価していくことになるものと考えます。きっと来年度は「もっともっと」と言っている自分がいることでしょう。

「信大 YOU 遊世間」の果実の一側面
～「臨床の知」の会得と深化～

関川光彦（長野県農業大学校講師）

1．「信大YOU遊世間」のねらいのよさ

平成19年度の全体目標は、「共鳴」一共に感じ共に学ぶ響き合いの輪一である。これは生徒と教師との理想的な関係の1つである。この目標に向けて努力していることは尊い。また、平成 18 年度の目標は、大樹一土は地域、幹は学生、枝は子ども、実は学び一であった。いずれも地域社会に出て直接、人々と交流して自己の力量を高めようとするもので、学生時代にこれを体験することは極めて重要であり、かつ価値が高い。学生の皆さんが「信大 YOU 遊世間」の活動を通して大きな成果を上げられることを期待したい。

2．教師の使命

学校の教師の最重要任務の1つは知情意を大切にし、「教科でのよい授業」を創造し実現することである。それには子どもの「関心・意欲・態度・知識・理解・思考力・判断力・技能・表現」などを大切にし、子どもに分かりやすい授業を展開し、学習意欲を増進して基礎学力を定着することである。また、子どもが自己実現を図ることが出来るように、潜在的なものを引き出し陶冶することである。子どもが基礎学力を基盤にして生きる力を会得していけるようにすることが、教師の専門的な職務であり使命である。教師はこのような専門性を着実に体得すべきである。教師は生活者であるとともに一種の求道者でもある。教師には「教える者、相談を受ける者として子どもが将来に夢と希望と勇気を湧出すべく共に悩み同行二人としての営み」の使命があり実現への行動が不可欠である。

学校の教師には子どもを愛し誠実であることが求められる。子どもと共に過ごす時間を可能な限り多くすることを第一義にすべきである。学校という集団生活の場において、教師は生身の子どもと多様な形での人格対人格の触れ合いを通して、子どもの人間的な面の成長を促す。子どもは教師を信じている。教師にはこの信頼に足る良質な人間性の中身を陶冶することが必要で、不断の修養が不可欠である。

社会の多様化・親の働き方の状況変化・価値観の多様化・複雑な人間関係の進行・家庭教育の脆弱化傾向等が進行している。教育環境（行政事務・地域や保護者・同僚関係など）も複雑多岐になってきている。そのため教師には世間の風当たりが強い。しかし、多くの教師は子どもの成長を信じ、誠実に努力を継続している。教師には寛容性・誠実さ・使命感・努力が望まれるし協働が欠かせない。自己鍛錬と共に仲間との一層の協力・協働が必要である。

3．教員養成における「臨床の知」の会得

教員養成にあたっては真の教育力・教師力を持った人材を養成することが求められている。それには次の4つの事項が不可欠と考えられる。

①専門科目で深い知を学び、優れた教材づくりの土台を培う。

②教養科目で知見を広め人間や社会への理解と洞察力をつける。

③教職科目で教職への志向性を高め、使命感と責任感を心に深く自覚するとともに、指導法の技術の基礎を修める。

④臨床経験科目では早い段階から家庭・学校・地域社会等と交流し現場や子どもたちと接触し、それにより実践的指導力の基礎を会得し、「臨床の知」を修得する。かつ複雑化した教育環境・教育現場に対応できる素養を培う。

イメージ的に見るならば、上記の教育力・教師力を頂点とし、①②③④を底面の４つの頂点とする４角錐の形が考えられる。①から④は相互に関係し相互作用をなして優れた本物の教師の養成に機能すると思われる。

特に、「YOU 遊世間」の活動は④の側面を重視して行われている。学生時代に地域貢献の体験を通して、子どもや家庭や社会と関わって生きた人間関係を学び、これを「臨床の知」にまで高める学習と訓練をすることは、良い教師になる絶好の機会である。もちろん教育等に係わる古今東西の名著を熟読することは良い教師になるためには必須である。

４．学生の「省察」に観る「臨床の知」の会得

「信大 YOU 遊世間」における実態を見ると充分とはいえないがかなりその成果を伺うことができる。平成 18 年度の「信大 YOU 遊世間」の成果の一部を考察する。学生は現場での子どもや地域の人々との触れ合いから、体を通して多くの学びを修得していることが伺える。書籍や座学からでは得られない生きたものを血肉にし、実践的指導力の礎の修得になっている。現場での体験で事実を学び掌握し身体化している。「臨床の知」の深化と会得が散見できる。

以下は報告書での生の言葉と表現の一部を抜粋したものである。

「環境を上手く活用すること」「企画と準備を確りやること、企画する時は子どもの事を常に頭に置くこと」「意見の違う人と話をすることが大切だ」「大勢で協力することが重要」「企画運営には参加者のことを考えてやる、危機管理の発想が大切」「子どもと一緒にやることが必要」「協力することで心が温まる」「子どもとの会話が大切」「基本を確認しておくこと」「子どもとともに学ぶこと」「学力に関係なく子どもに良いところがある」「一人一人にきめ細かい対応が必要だ。安心感と楽しさが必要」「子どもと同じ目線にたつこと、仲間との協力が不可欠だ」「こんな時こんな風にすればよいということが分かり、子どもから学ぶことが多い」「言葉より体で体得すること」「子どもと良く向き合うと個性が良く分かる」「目的をしっかり持っていること」「時間にけじめをつけること」「子どもの姿を思い出しつつ教材を作ること」「子どもの長所を見つけて指導する」「安全の視点が重要」「時間をかけることが大切」「ごまかしは許されない」「発達段階を踏まえた指導が重要」「子どもが活動しやすい環境を作り伸ばす努力が必要」「他者の立場を大切にする」「挑戦と経験が重要」「健常者と身障者を分けてはいけない」「勇気と情熱が不可欠」「自信・刺激・根気・感謝・仲間つくりが必要」「単純に子どもと遊ぶことが大切」「一緒に汗を流すこと」「目的意識を持ち身近なものを扱う」「自己防衛的な自分を反省する」「自分の足りないものを発見する」「自分の意見だけではいけないやる気・自主性・一生懸命・感謝・楽しさ・仲間・協力が大切である」「汗を流すことで理解が深まる」「子どもは暖かさと触れ合うことで成長する」「子どもは劇的な変化をし成長をする」「誠実で熱心にやると子どもはよい反応をする」。

信大茂菅ふるさと農場（８年目）

農 場 長　洞出直美（教育実践科学専攻３年）
副農場長　上田雄介（理数科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

洞出　直美（実３）	上田　雄介（理３）	平林　照世（言４）	永塚　達也（障４）
丸山　　悟（地４）	青木　智博（実３）	五味　紗織（実３）	春原　圭佑（実３）
常盤　千明（実３）	藤岡　泰裕（実３）	田村　弘樹（言３）	齋藤　有希（言３）
布山奈津美（言３）	落合　静香（社３）	土田　恵久（社３）	野口　洋憲（社３）
大家恵梨子（社３）	石山　裕貴（理３）	鈴木　寛之（理３）	肥留間淳也（理３）
船元　輝人（理３）	岩田　智之（数３）	西野　太一（数３）	村松　佑樹（数３）
鈴木　亮子（生３）	細田　有希（生３）	山崎　友美（生３）	内山　拓哉（保３）
赤羽　雄仁（地３）	金井万理子（地３）	北野　剛史（地３）	伊藤　香澄（実２）
小西　　舞（実２）	永谷　嘉浩（実２）	宮川はるな（言２）	笠井　裕太（理２）
原　　耕平（理２）	大本　有紀（理２）	福永　友実（理２）	髙池　亮輔（保２）
髙橋　真依（県１）		神林　彩井（ＯＧ）	末松　辰規（ＯＢ）

○参加者数

子ども 31 名（19 家族）　地域協力者５名　学生 41 名　卒業生２名

○連携団体

地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻　大内　清
JA ながの：北沢政美　塚田清正

○プラザの概要

（１）信大茂菅ふるさと農場の場所と歴史

信大茂菅ふるさと農場は、教育学部のキャンパスから自転車で 15 分ほどの場所にあり、今期８年目を迎えるプラザである。山と川に囲まれ、市内とは全く異なった景色が広がる農場は、もともとは休耕田であり、８年前に人力により農場としてよみがえった場所である。その後７年間代々学生に受け継がれ、継続されてきた。たくさんの歴史と思いのこもった農場の継続を願い、８期目がスタートされたのである。

（２）今期の活動目的と内容

参加者の募集は３月から行い、昨年度参加していた子どもたち、新聞社、幼稚園や児童館に募集要項を出し、結果 31 名の子どもたちが集まった。その後も就学前の弟や妹、学校の友だちや保護者の方の地域のつながりなどから参加者の輪がひろがり、下は１歳から上は中学１年生までの子どもたちと共に今期は始まった。

今期はそういった参加者と共に「人・生き物・植物が共に支えあって生きているということを、世代を超えた仲間と活動をする中から、虫や作物とふれる中から感じとり、仲間や自然に感謝する心を育てる」ことを目的とした。そして、地域の方、子どもたち、学生、保護者の方という、世代を超えた参加者が農作業という一つのことを共に行うことでこの目的の達成をめざした。作物は国際協力田でもち米とうるち米を、畑でトウモロコシ・ジャガイモ・サツマイモ・落花生・コンニャクイモを育てた。車で送迎してきてくださった保護者の方とも活動できる場面が多々あり、地域の農家先生、保護者の方、子どもたち、学生スタッフと、農場ではみ

んなが同じ立場で一から学び、一から農作業を行い、楽しむことができたように思う。

（3）今期の新たな試み

今期は、作物だけでなく生き物にもふれることを新たな目的とし、国際協力田にドジョウとカブトエビを放流し観察した。お店ですぐ買えてしまう生き物だが、学生スタッフで須坂や飯綱、松代まで探しに行き、自然にいたドジョウやカブトエビを捕まえて子どもたちに提示した。放流前はみんなが近くで観察できるよう、それぞれペットボトルに小分けにし、またドジョウとカブトエビについてクイズを通して学習した。そして放流後も、サギなどの鳥に食べられてしまわないように地域の方の協力の下、糸をはりドジョウたちを守った。さらに、初めて育てることとなったコンニャクイモでは自分たちでコンニャクを作ってみようと、収穫祭の時に手作りコンニャクに挑戦した。また、８月の活動では長野市 PTA 連合会と連携して、茂菅の活動に参加してくれている子どもたちだけでなく 40 名の他からの参加者と共に夏野菜を収穫して食べ、田んぼの草取りを行った。保護者の方を含め 100 名を超える人が、農場で共に活動し、収穫の喜びを感じとれた活動であった。

（4）各活動内容

月１回の活動は、２週間前ごろに各家庭に次回の活動案内と、活動報告やふり返りの「もすげしんぶん」と題した通信を郵送するところから始まる。活動の流れは、農家の方、JA の方、スタッフと共に企画し準備した。４月から始まった第１回から第８回までの活動において、参加者の出欠は欠席される方のみ電話や FAX、Ｅメールにより連絡してもらうようにし、参加人数や活動内容に応じて班構成を行った。当日の活動は午前中の３時間程度である。はじめに今期のスタッフで考えた「もすげ体操」（かけ声を「１・２・モス・モス」「２・２・モス・モス」「３・２・モス・モス」「４・２・モスゲ」とし、体の温まる動きと、活動にあった動き、例えばイモを抜く格好などを取り入れたもの）を行った。次に、簡単な作業内容やそれに伴う豆知識をクイズなどにして説明した。次に作業にうつり、終わりに思い出絵日記を書いてもらった。植え付けから、草取り、かかしを作るなどの世話、収穫までを経験し、農場で収穫した作物をその場で食べる際には、保護者の方に火の様子を見ていただくなどの協力も得て、活動することができた。第１回のジャガイモ植えは新たに広げた畑に植え付けをし、包丁で種芋を切るところからみんなで作業。第２回は多くの作物の植え付けがあったが、第１回ではできなかったパネルを使った説明などを行うなど、小さい子どもたちにも分かりやすい説明を心がけるように改善されていった。さらに、田植えでは子どもたちだけでなく保護者の方、スタッフみんなが裸足になって田んぼに入り、ロープにつけられた印にひとつずつ苗を植えていった。また、保護者の方からの要望などを取り入れ、植え付けと収穫だけでなく世話をする段階の経験をと、草取り、かかし作りを企画。いらなくなったＴシャツなどを持ち寄ってもらい、３人で一体のかかしを作り農場の新しい仲間ができた。そして、長野市 PTA 連合会と連携して行った活動では、子どもを二つのグループに分け、一グループがトウモロコシ、ジャガイモを農場でその場で茹でてみんなで食べ、自分で収穫した作物は各自家に持ち帰った。また、もう一方のグループでは田んぼの草取りをしながら虫を捕ったり見たりする活動を行った。これらの活動はどれも天候に恵まれたのだが、稲刈りとはぜかけは雨という最悪な天候であった。それにも関わらず、カッパを着て作業に参加してくれるという保護者の方の協力を多くいただき、運営することができた。地域の方、JA の方、学生スタッフと、みんなが雨の中で作業にあたったが、雨にも負けない子どもたちの姿から力をもらった活動であった。そして脱穀の際に

は、JA の方の協力により唐箕や足踏み脱穀機、千歯こきを貸していただき、昔ながらの方法で脱穀を行った。最後の収穫祭の時には、第１回から第８回までの思い出絵日記をまとめ、その際に今期の参加者に用意したフェルトで作った名札もつけて返却。今期を学生スタッフで作った映像とともにふり返り活動を終えた。ただ、落花生の収穫だけが遅れてしまい、学生スタッフが農場で待機する中、子どもたちに来てもらい収穫となったのだが、落花生の収穫日と設定した土曜日には今まで参加できなかった兄弟のお兄さん、お姉さんも来てくれたり、収穫だけでなく、農場で思い切り自由に走り回ったりすることができ、第１回から第８回の中ではできないことが、最後にできたように思った。

（５）学生スタッフについて

学生スタッフの募集は４月から行い、「茂菅組」と名付けたメンバーの他にも、活動の２週間前頃から随時参加スタッフを募集した。活動としては当日の参加だけでなく、事前の準備や、活動後にふり返りをし、次回の活動へその反省を活かすなどがあり、活動日以外にも農場の管理など多くのスタッフの協力により、農場が維持されていった。

こうした信大茂菅ふるさと農場の第１回から第８回までの活動は子どもたちの参加だけでなく、地域の方、保護者の方の協力、さらには活動をサポートする学生スタッフの協力なしでは行うことのできない活動であった。そして、年齢や学校を越えた関わりは、農作業という一つの活動があってこそできた関わりになった。

（６）一年間の活動

４月７日　（土）	※畑おこし
４月14日　（土）	じゃがいも植え
５月10日　（木）	※マルチはり
５月11日　（金）	※マルチはり・トウモロコシ、落花生の種の水付け
５月12日　（土）	落花生・サツマイモ・コンニャクイモ・トウモロコシ おばけかぼちゃ植え
６月７日　（木）	※畦塗り
６月８日　（金）	※代掻き
６月９日　（土）	どろんこヌルヌル！　エンジョイ田植え！！
７月７日～26日	※田んぼの水入れポンプ
７月21日　（土）	かかし作り
７月22日　（日）	※田んぼの網かけ
８月４日　（土）	もすげの野菜はも～すげ～／草取りしながら虫探し
９月26日　（土）	※田んぼの網はずし
９月30日　（日）	稲刈り・はぜかけ
10月20日　（土）	脱穀・サツマイモほり
11月17日　（土）	収穫祭
12月15日　（土）	落花生収穫
１月30日　（水）	※茂菅米のマリ共和国への発送式（JA ながのにて）

※ は、農家の方、学生スタッフのみで行った活動の準備である。

◇実践から得た「臨床の知」

八代目「信大茂菅ふるさと農場」

洞出直美（教育実践科学専攻３年）

１.「末広がり」の年

「末広がり」とは「次第に末の方のひろがってゆくこと。また、次第に栄えてゆくこと」と広辞苑では書かれている。私たち学生スタッフは、休耕田を農場によみがえらせた７年前の当初から、10 年の継続を目標としている「信大茂菅ふるさと農場」の８年目を担うこととなった。８年目は末広がりにあたるめでたい年ともいわれている。今、そんな８年目の活動をふり返り、いかなる末広がりをみせたのかみていきたいと思う。

２. 今期の発足にあたって

「YOU 遊世間」では、前年度の活動を受け継ぐか受け継がないかは学生スタッフにかかっている。「茂菅ふるさと農場」も代々受け継がれ７年目を経ていたが、農場長に立候補する人が次に出ない限り活動の継続はないのである。その中で、農業や活動の企画など全くの初心者農場長と副農場長２名により、８年目に入っていったのである。よって不安ははかりしれないものであった。けれど私の中には、この活動の立ち上げは継続を意識したのではなく、自分自身の新しい挑戦と、新しい仲間たちと農作業を通して学んでいくことを意識したのであった。そして地域の方には「みんな失敗をするし、成功させようと思うから不安になる。とにかく楽しんでやればいいんだ」（林部信造）という言葉をいただき、不安をプラスに変えていけるようになったのである。そして「一緒にやっていこう」という力強い仲間のスタッフの存在があり、活動していくことができた。もちろん、「茂菅ふるさと農場」の７年という歴史と、継続の意識は片隅に存在した。けれど、自分たちのやり方を全面的に認めてくださる地域の方、JA の方、先生の存在に後押しされ私たちは私たちのやり方で一からスタートできたのである。こうして昨年の２月から一年を通して自分たちでやりたい作業や作物を考え、３月に地域の方、JA ながのの方、土井先生との打ち合わせにより年間活動計画ができあがり、子どもたちの募集を始めた。末広がりである年を意識し始めたこともあり、昨年よりも参加者数を増やしたい気持ち、年齢に幅をもたせたいという気持ちが現れ、地域の幼稚園や児童館の協力を得てポスターと資料の設置を行い、新聞への広告も行った。そして途中からの参加も含め、最終的には 31 名の子どもたちが集まったのである。家庭数にすると 19 家族で、兄弟そろって参加してくれる家庭が多くみられた。またそういったところから、当初幼稚園・保育園から募集していた制限をなくし、さらに小さい弟、妹も一緒に参加できるようにし、下は１歳の子どもから参加してくれることとなった。こうした兄弟は、参加人数や活動内容によって班を編成し班ごと作業することをしていたが、土をいじるところから、虫を見るところから始まり、スタッフと共に行った。農場では、「必ずこの作業をしなければいけない」ということを押しつけてはおらず、虫が出てきて興味関心がその虫にあるのなら、スタッフと共に観察する。スタッフのお兄さん、お姉さんと遊びたい意識があるのなら広い農場で遊ぶ。そういったことを自然と行える環境にしていった。よって元気な子どもの中にはすぐどろんこになったり、水にぬれてしまったりすることから毎回着替えを持って来てくれる家庭があったり、カエルを追いかける子どもは何匹もカエルを捕まえてはスタッフの服のポケットに入れるということをしたりする様子が見られた。こうしたことができたのも、参加スタッフの人数が毎回 10 人を超してくれたおか

げである。参加スタッフの個々の対応は異なるけれど、それぞれに対応してくれたことで子どもたちも自由に遊ぶことができたのではないかと感じる。保護者の方からも「子どもが楽しそうに笑って話しができるのも、明るく接してくれるスタッフさんがいてくれるから」、「いつもにこにこして迎えてくださって、親は子どもの送り迎えだけでしたが嬉しかったです」（ともに保護者へのアンケートより引用）という声をかけていただいている。さらには、この活動に申し込んだ理由を「学生スタッフという若い方が企画してくださるので、参加しやすいと感じたから」（保護者へのアンケートより引用）と言ってくださる方もいた。このことからも、スタッフの存在の大切さと、子どもとのつながりが貴重なものであったことが感じられる。

３．参加者の交流ついて

そんなスタッフからは「子どもの人数がそれほど多くなく、深く関われた」（小西舞）という声があった。小さい子どもにはマンツーマンでついてもらうことが多かったが、これが他の活動にはない良さだったのかもしれない。しかし、子どもたちとスタッフの関わりが深くなる一方で、田植えの活動では班で泥の中に入ることを意識したのだが、各自が作業を進めることになってしまい、「子ども同士で話せる場面や、関われる機会があってもいいのでは」（大本有紀）という反省があった。最後の保護者の方へのアンケートの中でも、「子どもたちの交流を期待する」という声があった。年齢の幅が広いことから、班の編成は同じ学年でまとめたり、いろんな学年を合わせてみたりと試行錯誤してみたが、どれがいいとは決められなかった。同じ学年にすることで話しやすい環境が生まれたり、違う学年にすることで上の学年の子どもが下の子どもをサポートするという場面があったりと、どちらにもいい点がある。しかし、どのような班編成であっても、アイスブレイクなど、ふれあう別の時間が必要だったのかもしれない。また、農作業をうまく利用して交流がはかれるような促しができれば良かったのかもしれない。午前中の３時間では「もすげ体操」を含め、最後に書く思い出絵日記の時間まであっという間であった。ここでふれあうことができれば、さらに子どもたちのつながりが広がったのではないかと反省する。

けれど、その中で６年目の参加者である子ども２名の関係は、どちらかが活動を欠席すると「〇〇は今日どうしたの？」とスタッフに聞くなど、活動の年数や農作業を一緒にするという活動の中から、違う学校であっても次第にその結びつきを強くしていたことを感じさせられた。また違う学年でも前年度も一緒に参加してくれていた子ども同士を同じ班にすると「やった！」といって仲良く活動する様子も見られた。こうした子どもとスタッフのつながり、子ども同士のつながりは末広がりの面からみても、個々に広げられた関係があったという事実は良かったのではないかと感じる。それぞれが出会うことのなかったところに住んでいる参加者ではあったが、この農場での活動を通して広がった関係を持つことができた。ここに、いろんな人との出会いのある活動が存在したことに気づくことができる。

さらに人とのつながりだけでなく、今期は新しい試みで生き物とのふれあいを行った。カブトエビとドジョウの放流は、子どもたちだけでなく保護者の方からの関心も多くいただき、放流する前にも後にも、じっとその様子を見つめる姿が印象的であった。放流後には、このカブトエビとドジョウはどこで捕ってきたのかと、捕ってきた場所の地図を書いてほしいという子どもも現れ、買わずに探して捕まえてきて良かったと、学生スタッフに思わせた場面であった。私は、こうした生き物とのつながりも、もちろん農作物とのつながりも、この農場が提供してくれたことであり、個々に広がっていくものとなったのではないかと感じる。また、トウモロ

コシの収穫では昨年度になくハクビシンにより荒らされてしまった。そのことによりハクビシンという生き物の存在、作物ができるまでの苦労を共に感じることができたのではないだろうか。また、もう一つの今期の新しい試みであるコンニャクイモの栽培では、普段口にするコンニャクがイモであったという発見、食べることができるまでに３年はかかるという発見。すり下ろす時にはゴム手袋をしなければ手が荒れてしまうという多くの発見を共にした。保護者の方も経験されたことのない調理であり、もしかすると子どもたち以上に関心を持っていてもらったかもしれない。時間内に調理できなかったコンニャクを家で調理してみたいという保護者の方の存在から、そのように感じた。こうした学校や地域だけでは広がらなかった関係や知識、経験はこの農場でしか味わうことのできない、特別なものなのだと感じる。

４．学生スタッフへの感謝

そして、このような活動になくてはならない存在であった参加スタッフの募集は、私たちの身近なところから行った。同じ学科、友達と声をかけていき、まず受け入れる側のスタッフが楽しまなければ来てくれたスタッフ、子どもたちも楽しくないだろう、と楽しむことを全面に押し、自ら楽しんで募集を行い活動していった。準備の段階では毎日が高校の文化祭前のような気分で、朝方までフェルトで子どもたちの名札を一つずつ作ったり、イラストを描いたりしていた。しかし、前週、前日に準備をする遅さに、「もっと前から事前準備ができれば焦らなくて良かったのでは」（高池亮輔）という反省がある。他に「もっとスタッフを使えば良かったのでは」（西野太一）という声もあり、自分たちでなんとかしてしまおうという思いがあったことを気づかせてくれた。こういった声のある中、私個人として本当に良かったと思うところは、朝方までの作業などに何一つ文句も言わず、楽しんで準備してくれた仲間に巡り会えたことである。そんな仲間達のおかげで、私自身が楽しんで準備できていたことに気づき、とても感謝した。たまたま会った仲間に声をかけ、参加してもらったことで毎回の活動にきてくれた仲間もいる。次の日授業があるにもかかわらず朝方まで準備をしてくれた仲間。当日、参加スタッフを車で送迎してくれる仲間。初め私は、こういった仲間にこちらから声をかけたことから、「手伝ってくれている」という意識を持っていた。けれど「手伝いというつもりで参加していない。毎回楽しませてもらっている」（岩田智之）という声を、雨の中という今までにないつらい活動の中から出してくれた仲間の存在から、自分の楽しさのために少なくとも来てくれているということを感じることができるようになった。今期はじめに思っていた、「手伝いではなく楽しみたいから茂菅に行く」という意識を持ったスタッフと巡り会えたことも、本当に幸せなことであった。この活動を通して「子どもは本当にかわいい。小学生以下の教師になるつもりはないけれど、この交流はいい。この経験を大切にしたい」（西野太一）、「保護者の方も一緒にいてくれて、ひとつのものを作り上げる喜びを感じられた」（永塚達也）などという声があった。そして参加してくれたスタッフの多くから聞こえた声は「楽しかった」、「誘ってくれてありがとう」という声であった。農作業を今までしたことのないスタッフも多くいた。そうした作業を共に行うことで、専攻を越え、学年を越えて農作業の大変さ、楽しさを味わえたのだと思う。ここで広がった、ここでつながった仲間は私にとっても居場所を与えてくれる一番の仲間となった。他の人から見れば「どうしてここまでするのか」、「そこまで凝らなくてもいいのでは」といった苦労も、苦労と感じずにできてきたのは、楽しみにしてくれている子どもたちがいたから。そして、共に活動してくれる、共に苦労と感じずに楽しんでくれる仲間がいたからであることを強く感じる。

５．「信大茂菅ふるさと農場」を支える歴史と協力

また、こうしたことを感じることができたのも、こうした活動ができたことも、全ては「信大茂菅ふるさと農場」を立ち上げてくださった、継続してくださった代々の先輩、地域の方、そして土井先生の存在がとても大きいことを忘れてはならないと思う。そして、集まってくれた子どもたちと保護者の方々を。そのことを忘れてしまうと、「自分たちがしたことなのだ」として高慢になってしまうが、協力があってこそできることだということを常に思うことで、子どもが一人でも多く来てくれることにも、学生スタッフが早起きをして来てくれることにも、どんなことにも感謝できるのではないかと思う。土井先生や林部さんに認めてもらえなければ、今期８年目の活動はなかった。農業を教えてくださる方がいなければ、初心者の学生スタッフで活動することはできなかった。そして子どもたちが集まらなければ企画があっても活動できなかったし、保護者の方の協力がなければ農場に子どもたちが来ることも難しかっただろう。そういったことを考えると、全てがつながってこの活動が成っていたことを感じ、当たり前にできることではないことを思う。感謝すべきところが多くあるのである。それにも関わらず、保護者の方からお土産や差し入れをいただいたり、学生スタッフからも「ありがとう」の声が多かったりすることは、本当にありがたいことであり、幸せなことであった。

６．人をつなぐ「信大茂菅ふるさと農場」

何かを共にすることで、こうして子どもたち同士が、子どもたちと学生スタッフが、また地域の農家の方、保護者の方がつながることを経験した。この何かが、ここでは農作業であり、代々学生が企画、立案し実践し、責任をもって運営してきた流れがあるからこそできたことだと思う。これが農作業ではなく教科の勉強やスポーツだったら、年齢を越えて活動できないだろうし、力の差が大きく出てしまう。小さい子どもは小さい子どもなりの力で作業できる農作業だからこそ多くのつながりが持てたのではないだろうか。この農場には「土づくり」は「人づくり」という土井先生の言葉がある。私は、私なりにその言葉を、「信大茂菅ふるさと農場」のこの活動でこうしてつながり合い、つながることの喜びやそこで生じる楽しさ、感じる人の温かさが「土づくり」である農作業を通して、個々に与えられるのではないか、と今期を通じて実感することができた。

今期の始まりでは、人数を増やすことが末広がりにつながると感じていた。目に見えて広がったことが分かるからである。けれどそうではなかった。人数が増えてもそこに楽しさや、人とのつながりがなければ意味がないことを知った。また人がつながるからこそ、そこに温かさや楽しさが生まれることを知った。自然に左右される農作業という難しい活動ではあったけれど、個々に自分の力を出して参加できるこの農場の良さを再確認することができた。そういった意味で、私の中では末広がりな、去年から参加している人の中では去年にない意識が広がった、今年から参加の人の中では活動することの楽しさが広がった、また参加した多くの仲間と、多くの子どもたち、地域の方とつながることのできた１年であったように思う。ここに８年目の色があるのではないだろうか。「打ち込める大切なものを見つけることができた。茂菅がなければ今の自分はない」（石山裕貴）、「もっとやりたい」、「茂菅のあったかい雰囲気が好きだった」、（鈴木涼子）、「笑顔があふれていた」（伊藤香澄）、「思い切り子どもたちと楽しんだ」（落合静香）、「明るくて楽しかった」（布山奈津美）。こういった声がスタッフの中から聞こえたことが、それを強く感じさせてくれる。また「親子共々楽しませてもらいました」、「来年もぜひよろしくお願いします」という保護者の方からの声の存在も本当に嬉しいことで

ある。

7．最後に

ここにこうして８年目を終えることができ、農作業を通して年齢も住む場所も違ういろんな人とつながりあえたことを、本当にありがたく思う。「信大茂菅ふるさと農場」には、人をつなげることのできる力があるのだと感じる。だからこそ、代々受け継がれ８年という歴史ができたのではないだろうか。末広がりのこの８年目に、７年という今までの積み重ねと共に広がった知識、経験、仲間はこれからもそれぞれの中で深く残り、さらに広がっていくだろう。大きな感謝と、よい出会い、貴重な出会いを与えてくれた活動であり、農場であったと強く感じる。そして、奈良県出身の私に第２のふるさとを、そして、「長野のお父さん、お母さん」という居場所を与えてくれた農場であった。

◇地域協力者からの評価

「信大茂菅ふるさと農場」の実体験に学ぶ

農業　**林部信造**

「信大茂菅ふるさと農場」も開設以来、８年目を迎えました。本年も農場長をはじめ、スタッフの皆さん、農場に関わった方々の協力により、無事に初期の目的が達成されました。また、集大成として「YOU 遊フェスティバル」が 12 月８日・９日、志を共にする県内外の大勢の大学生の皆さんと共に盛大に開催され、多くの感動を与えてくれました。私も家内と共に参加させていただき光栄に存じ、感謝すると共に心から御礼申し上げます。

この「信大茂菅ふるさと農場」は学生の皆さんが自ら企画、立案し、自ら実践し、運営、管理する実体験道場です。

日頃、接触することの少ない自然との関わり、土との出会い、作物をつくる、育てる喜び、個性豊かな子どもたちとの接し方、教え方、お父さん、お母さん方に対する会話等、将来、教育者としての夢をかなえてくれる教材が数多く存在しています。毎年、この農場に関わる学生の皆さんは農業に対する体験を求め、意欲に満ちた人たちだから夢があり、新しいものに挑戦する勇気と気概を持ち、自ら求めた夢の達成のためには努力を惜しみません。人は夢が叶えられた時、初めて良い思い出として心に残り大きく成長していくものです。

また、国際協力田としては、飢餓に苦しむアフリカのマリ共和国に JA の協力を得て、「信大茂菅ふるさと農場」で収穫されたお米を支援米として贈りその目的を果たしました。

課外活動を通じて「信大茂菅ふるさと農場」に参加された人たちは１年が終わって、初めて自分が果たした役割と達成感を味わい、そして、かけがえのない多くの仲間に出会った喜び、一人では出来ない多くのことを学び、何事にも一生懸命努力をすれば必ず誰かが「共鳴」し、協力してくれることを知り実りの多い年であったと思います。

来年も、後輩の皆さんに一人でも多くの参加者を呼びかけ、『臨床の知』の基本理念に基づく土井先生の「土づくり」による「人づくり」をいつまでも継承されることを願っています。

私も学生の皆さんの若いエネルギーをいただきながら「信大茂菅ふるさと農場」や、りんご作り、米作りに働く楽しさを味わい、健康に努めて参りたいと思います。

スタッフの皆さん大変ご苦労さまでした。

XY サタデースクール（6年目）

ながの校　プラザ長　落合　静香（社会科学教育専攻３年）
副プラザ長　石井絵理子（社会科学教育専攻３年）
グリーン長野校　プラザ長　滝沢　典子（障害児教育専攻３年）

○学生スタッフ名

＜ながの校＞

落合　静香（社３）	石井絵理子（社３）	丸山　晃男（実４）	堀端　優也（実４）
丸田　青冴（理４）	加藤　雄大（数４）	永塚　達也（障４）	小平　奈央（障４）
畑　さやか（野４）	青木　智博（実３）	上田　綾乃（実３）	福岡　恵美（実３）
布山奈津美（言３）	土田　恵久（社３）	大家恵梨子（社３）	納　愛果（社３）
斎藤みなみ（芸３）	井出　竜也（地３）	小西　舞（実２）	小林良太郎（数２）
竹内　裕（数２）	宮下奈保子（生２）	中川　茜（生２）	吉田ちひろ（生２）
桃澤　佑子（芸２）	高池　亮介（保２）	植山　周香（心２）	清水　恵（清４）
北原由美子（清４）	持田有希子（清３）	平林　美沙（清２）	福澤　愛海（清２）
北澤　百絵（清２）	冨井　希帆（清２）	細川紗央里（清１）	関　麻里子（清１）
木村　早帆（清１）	岩崎英里子（清短）	浅川久美子（清短）	荒井　麻理（清短）
宇都宮ゆみ（清短）	柳澤　玲奈（清短）	本郷　恵（清短）	伊藤　舞（清短）
小川　圭介（工学部）	町田　愛美（千葉大）	納村美奈子（専門）	北村　治子（専門）

＜グリーン長野校＞

滝沢　典子（障３）	浅井美由紀（実４）	酒井　奈々（数３）	吉木　理絵（言３）
青木　綾子（数２）			

○参加者数

校　名	NPO	JA	信大	清泉	清泉短	その他	子ども
ながの校	６名	４名	26名	10名	７名	４名	19名
グリーン長野校	３名	２名	５名	―	―	―	10名

○連携団体

NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク　JA ながの　JA グリーン長野
清泉女学院大学　清泉女学院短期大学

○プラザの概要

XY サタデースクールとは

子どもたちが大人になるにさいして必要なことは、「確かな学力」と「豊かな経験」を積んでいくことです。この「確かな学力」が子どもの人生の座標軸のＸ軸だとすれば、「豊かな経験」はＹ軸に相当するといえます。この座標軸の中で、「自ら学び考える」人間が育ちます。

「XY サタデースクール」の「XY」には、「確かな学力」と「豊かな経験」の相互関係を大切にして、子どもの成長を支えたいという願いが込められています。「豊かな経験」は、わたしたち人間になくてはならない「食」に関係していますので、JA 長野中央会と連携した農業体験を行うことから、また、「確かな学力」は退職なさった先生や現役の先生の指導、信州大学や清泉女学院大学・同短期大学の学生のみんなで作り上げた学習から、それぞれ得

られます。

XY サタデースクールは今年で６年目の活動です。今年度は県内２か所（ながの校、グリーン長野校：篠ノ井）で年間 21 回（月２回、土曜日の午前中）開かれました。農作業と学習（国語、算数、英会話）は毎月各１回ずつ行われます。地域の小学校に通う子どもたちが参加しています。通常は各校ごとに農作業や学習が計画されますが、今年度は両校とも、国語の学習で「雨ニモマケズ」を、英会話の学習で英訳版「雨ニモマケズ」を１年間通して扱いました。２月の閉校式の後、長野で両校の子どもたち全員でその発表会を行いました。また、今年度も、10 月に２校の子どもたちや障害を持つ方々との交流を目的とした第３回「バリアフリーキャンプ in 白馬・岩岳」が一泊二日で行われました。参加人数も多く、大規模なキャンプになりました。子どもたちは友達とさらに友情を深めたり、他校の友達を作ったり、新しい経験をする良い機会になったと思います。みんなで楽しむことができ、本当に充実した２日間でした。

今年度も XY サタデースクールはのびのびと活動することができました！

○一年間の活動

＜ながの校＞活動時間　9：00～12：00

活動日	活動内容		学生	子ども
4月14日	開校式	開校式、レク、名札作り、自己紹介、英会話	16名	16名
4月21日	農作業	バター作り　in 黒姫	13名	12名
5月12日	農作業	ジャガイモ植え、ジャガイモクイズ、リンゴの花摘み	12名	15名
5月26日	基礎学習	算数、英会話、 国語「雨ニモマケズ」宮沢賢治について	11名	9名
6月9日	農作業	田植え　田植えを行うまでの作業について	13名	13名
6月23日	基礎学習	算数、英会話 国語「漢字たし算、漢字パズル、言葉遊び」	9名	16名
7月7日	農作業	畑の草刈り、看板作り、草とりの意味	10名	14名
7月21日	農作業	ジャガイモの収穫、試食、「いただきます」「ごちそうさま」「食べること」の意味について	12名	17名
8月11日	自由学習	農作業体験の絵、夏休みの宿題	7名	9名
9月8日	基礎学習	算数、英会話、 国語「雨ニモマケズの暗唱用カードを作成」	6名	15名
9月22日	農作業	稲刈り　お米についてのクイズ	8名	8名
10月13日	基礎学習	算数、英会話 国語「バリアフリーとは？　手話、絵で自己紹介」	10名	13名
10月27日	バリアフリーキャンプ　in 白馬岩岳		23名	24名
11月10日	農作業	リンゴの収穫、餅つき、試食	10名	14名
11月24日	基礎学習	算数、英会話、 国語「雨ニモマケズを覚えて絵を完成させよう」	8名	11名
12月8日	農作業	リース作り　リース・クリスマスについてのクイズ	7名	14名
12月22日	基礎学習	算数、英会話、 国語「クリスマスプレゼント争奪戦（漢字クイズ、雨ニモマケズの並び替えと暗唱競争）」	8名	15名

1月12日	基礎学習	算数、英会話 国語「雨ニモマケズを工夫して読もう」	9名	16名
1月26日	農作業	豆腐づくり、じゃがいも餅作り（おから入り）	10名	15名
2月9日	農作業	いちご狩り		
2月23日	閉校式	閉校式、雨ニモマケズの発表練習		

＜グリーン長野校＞

活動日	活動内容	
4月14日	開校式	開校式、名札作り、算数、英会話
4月28日	農作業	アスパラ収穫体験
5月12日	農作業	ももの摘果・野菜定植
5月26日	基礎学習	算数、英会話、国語
6月9日	基礎学習	算数、英会話、国語
6月23日	農作業	ももの袋かけ・野菜管理
7月14日	基礎学習	算数、英会話、国語
8月4日	農作業	ももの収穫・バーベキュー大会
8月11日	自由学習	夏休みの宿題
9月8日	農作業	果樹管理
9月29日	基礎学習	算数、英会話、国語
10月13日	農作業	稲刈り・ライスセンター見学
10月27日	バリアフリーキャンプ　in 白馬岩岳	
11月10日	基礎学習	算数、英会話、国語
11月24日	農作業	農産物即売体験
12月8日	基礎学習	算数、英会話、国語
12月22日	農作業	わら細工　in 大岡
1月12日	基礎学習	算数、英会話、国語
1月26日	農作業	料理体験（大豆加工）
2月9日	農作業	そば打ち
2月23日	閉校式	閉校式、算数、英会話、国語

◇実践から得た「臨床の知」

子どもたちとともに学ぶ場

ながの校　**落合静香**（社会科学教育専攻3年）

4月からの活動もあっという間に過ぎていきました。活動当初、学校も学年も異なる子どもたちが集まる場であるからこそ、農作業や学習を通して、協力しあい、感動を共有し合える場であってほしいという願いを持って臨みました。そのため、農作業の班分けは、同じ学年の子どもたちで班が一緒にならないように、学年のバランスを考えて一つの班としました。また、国語でも学年に合わせた学習内容を用意するだけでなく、教えあい、助け合いながら取り組めるものを提供するように心がけました。これらの1年を通した取り組みから、わたしたち学生はどんなことを子どもたちから、学生同士から、また地域の方々から学んだのでしょうか。活動に参加してくれた学生の声を参考に3つの面でまとめました。

1．基礎学習

1．1　活動の始まりと今年度の課題

XY サタデースクールの基礎学習は、算数、英会話、国語をそれぞれ 45 分ずつおこなっています。学生スタッフは主に国語と低学年の算数を担当しています。今年度の国語は、1年間を通して一つのことに継続して取り組み、その成果を発表することを目標に、昨年度松本ハイランド校が取り組んでいた、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の暗唱に取り組むことになりました。国語の時間だけでなく、基礎学習のときは毎回、朝のあいさつのあとに全員で声を合わせて朗読しました。

5月の基礎学習では導入として、宮沢賢治の生い立ち、「雨ニモマケズ」を書いた頃の宮沢賢治の様子など、子どもたちに質問を投げかけながら写真や絵を使って説明していきました。言葉だけで終わってしまわないように、子どもたちにわかりやすく、理解しやすいように、絵や写真を使うなど視覚物を準備しました。子どもたちの中には、教室に入らず廊下にでたままの子もいれば、席についていることができず、歩き回り、子どもたちの前にたって説明しているスタッフの話を中断させてしまう子も何人かいました。5、6月の基礎学習の際のスタッフ振り返りシートには、「途中であきてしまって、1回興味がなくなってしまうとなかなかもう1回やり始めてくれなかった」（細川紗央里）、「集中してできている子と、できていない子の差が激しかったです」（岩崎英里子）、「○○さんが説明しているときに動きまわったり、問題を先に見ようとしたりしているのが気になりました」（柳澤玲奈）、「○○と○○はぜんぜん教室に入りたがらないので少しは入る機会をつくるべきなのかなと思うけど……」（地域の方）、「動いてくれなかったり、席についてくれなかったり……どうしたらよいかわからないです」（福澤愛海）と言った声が多く、子どもたちへの対応の仕方をどうするべきか参加スタッフ一人ひとりが悩んでいました。また、そんな子どもたちが興味を示し、集中力を持続させることのできる学習内容とはなんだろうかと、学習内容を考えることにもとても苦労しました。

1．2　子どもの姿から考える活動内容

6月は、難しくて投げ出してしまうことがないように、学年別漢字配当表を参考に、各学年のレベルに合わせた漢字クイズの教材を用意しました。子どもたちの学習状況を考え、丁寧に準備したかいもあり、「熱中しやすい？」（桃澤佑子）という言葉にあるように、子どもたちが真剣に問題を解いている場面が見られました。しかし、小学校の教室ではなく、2年生から6年生までが集まっている XY であるからこそ、学年ごとに違うことを学習するのではなく、何か一つのことを一緒に取り組みながら協力し合って学習をしていけたら、という願いをなかなか実行に移せませんでした。

9月は、3年生の基礎実習中ということもあり、2年生中心に活動を進めてもらいました。「雨ニモマケズ」の暗唱カードを作り、自分がどれだけ覚えられているかをスタッフにチェックしてもらうという内容でした。子どもたちの中に国語が苦手なハーフの男の子が、「雨ニモマケズ」を暗唱できず、泣いてしまい、もうやりたくないと、壁によりかかってしまということがありました。新たな課題として、この男の子が「雨ニモマケズ」を投げ出さずに取り組むにはどうするべきなのかということもでてきました。

11 月は、一行一行にチェック欄を設け、暗記できたところまでをチェックし、あるところまでできたら、カードを渡していく。そして、カードが何枚か集まって一枚の絵を完成させていく、といった学習活動にし、子どもたちが何か一つのものを完成させるなかで、暗記をして

いくことができたらと考えました。「カードが増えるたびに喜んでいた。カードは効果的」(清水恵)、「暗唱ができていくうちに一枚の絵が完成するということで、低学年の子どもたちはとても喜んでいた。そして、『絵を完成させたい』という気持ちから、とても集中している様子が見られた」(宮下奈保子)。この言葉にあるように、子どもたちは「何かを完成させる」ということに興味を持って暗唱に取り組み、また絵を完成させる速さなどを競うことによって、集中力を持続させていました。

このときの様子を参考に 12 月の基礎学習は班対抗のゲームをするなかで、「雨ニモマケズ」を取り入れていこうと考えました。学年が異なる子どもたちが協力し合って答えを見つけることができる問題としてどんな問題が適当であるか、考えた結果、「木」偏と「イ」偏を使った漢字をどれだけ多く見つけられるのかを競うことにしました。3問目に一行一行書かれたばらばらになっている「雨ニモマケズ」を順番に並び替え、紙を見ずに班のみんなで声をそろえて正確に読み終わるまでにどれだけの時間がかかったかを競いあいました。クリスマス間近ということもあって、プレゼントとしてお菓子の袋を用意し、1番の班からお菓子の袋を選ばせていきました。「国語でクリスマスプレゼントをかけた班対抗のクイズをしていて、子どもがみんな必死に問題を考えている姿がとても印象的でした。その前の時間と比べてとても集中していて、子どもたちのやる気がすごかったと感じました」(宮下奈保子)、「みんなが集中していて、班対抗という意識の強まりも見られたのでよかった」(石井絵理子)、「ゲーム、競争となると集中度が全然違っていて、子どもたちの集中力がすばらしかったです」(吉田ちひろ)、「みんな集中しながら、班で教えあいながら協力してできていました。わたしも子どもたち以上に楽しんでやりました」(岩崎英里子)。

この時の子どもたちは、学生の言葉にあるように、真剣な表情で、班で一つのことを一生懸命考えていました。また、書いた漢字を確認しているときに、自分たちが気づかなかった漢字があると、「そんな漢字もあったな。忘れてた」、「あっちの班あんなにわかったんだぁ。すげぇ」と、他の班の結果に驚いていました。また、「雨ニモマケズ」も暗唱できる子を中心に、まだ暗記できていない子も一緒に声をだしていました。

1．3　基礎学習を通しての学生の学び

基礎学習を通して、子どもたちがどのような状況にあるのか、どのような個性をもっているのかを理解したうえで、授業内容を考えていくことが大切なのだと感じました。子どもたちが集中できない、歩き回る、といったことは、授業を考えるわたしたちの力のなさに原因があるのだと思います。子どもたちは何かに熱中すれば、驚くほどの集中力とやる気を見せて、物事に取り組んでくれます。教材の準備は手を抜くことは楽で、簡単です。しかし、それでは子どもたちは何ら興味を示してくれません。授業をやる側も、子どもたちに求める集中力とやる気と同じくらいの力を込めて授業内容を考えなければならないのだと学びました。そして、こちら側で無理に他学年の子と関わりをさせようとしなくても、子どもたちは自然に教えあい助け合っていくのだと感じました。

また、子どもたちとの関わりが深まっていくなかで学生は子どもたちへの対応の仕方を自ら気づき学んでいきました。活動を始めた当初は、集中しない子どもたちにどうすればよいか困惑していた学生も、「算数の時間『わからない』と言っているときに、『なんでそうなるの。ちがうでしょ』と言われてやる気を無くしている子に、『そこまでよくできたね。そこからもう一度一緒に考えてみようか』というと、その子はもう一度問題にとりかかりました。子どもた

ちができたところまで認め、褒めてあげることが子どもたちのやる気を損なわないための声がけとして大切だと感じました」(宮下奈保子)、「授業中、途中で投げ出し教室を出てしまった○○君に『教室に戻るよ』と言いましたが、『いやだ。やりたくない』と言ってなかなか言うことを聞きませんでした。わたしはどうしたらよいか分からず、時間通りに進められずに次第に焦りを感じていました。先輩は無理やり○○君を教室に戻そうとするのではなく、話しかけ『何をやろうか？』といった声かけをしながら、○○君と教室に戻っていきました。わたしは、一方的に押し付けてしまい○○君の思いや考えを無視していたのです。その子の行動をまず『認める』ことが大事なのだと分かりました。わたしは、どうしても上から目線で接してしまうことがありました。しかし、この学習を通して子どもたちの立場に立って考えることの大切さを学びました」(桃澤佑子)、「最初から、『～はだめだよ』というのでは、子どもたちの可能性を潰してしまうように思いました。お互い譲歩していくことも必要だと考え、わたしは実行するようこころがけています。また、同じ目線でいるだけではなく、身近な存在だけど、やるときはちゃんとやる人なんだ！と、感じさせることができるような存在になりたいと思いました」(清水恵)。

学生は、子どもたちと関わるなかで、子どもたちの真剣な表情と興味を示したものに取り組む集中力のすごさに驚きを感じたとともに、「褒めることの大切さ」と「子どもたちの行動を見つめ、ともに取り組むなかで認めていくことの大切さ」を学びました。見ているだけではなく、実際に子どもたちとともに動くことが大切なのだとあらためて感じました。

2．農作業体験

2．1　ともに活動する中で学ぶ農作業体験のすばらしさ

今年も農作業を通して、子どもたちだけではなく、学生も親御さんもまた一緒になって汗を流し、食物を育てることの大変さを実体験することができました。「屋外で一緒に汗を流すという活動は、学生にとっても子どもにとってもとても楽しいものだと感じました」(石井絵理子)、「たんぼの中に入るということは未知の世界だった」(納愛果) という学生の言葉にあるように、学生自身、農作業体験では「初めて」体験したことばかりだったのではないでしょうか。

XY の活動は月に２回あるといっても、農作業体験は月に１回だけです。しかし、農業は月１回だけでは作物は育ちません。日々の作業があって、わたしたちの食卓にならぶ食材となるのです。ジャガイモを植えるまでにも畑を耕さなくてはならない。収穫するためにも、草刈り、間引きなどの作業があります。田植えをするまでにも田おこし、苗作り等、子どもたちの活動の前までに色々な作業があり、それらをやっていてくれる人がいるからこそ、自分たちが今日、田植え等を体験できるのだということを伝えたいと考えました。ジャガイモを植えた後、学生だけで畑の草刈りをしたときの写真を基礎学習の際に子どもたちに見せて、草の成長の早さを知ってもらうとともに、なぜ草刈りが必要なのかを活動の際に絵などを使って説明することもしました。田植えの際も 18 年度の稲刈りの写真を提示しながら、目の前にある田んぼの変化に気づかせ、田植えをするだけで米が育つのではないということを伝えようとしました。

しかし、子どもたちにとっては説明を聞くよりも、やはり実際に体験してみることの方が楽しく、喜びや驚きが生き生きとした表情から伝わってきました。これはもちろん学生も同じです。「子どもはとにかくまとまってなくて自由で、農作業になると目を輝かせて活動する姿が

とてもいいなと思っています」(小林良太郎)、「米というものがどれほど大切で偉大なものかを JA の方も必死で伝えようとしているのが分かりました。実際、子どもたちの意識にどれだけ入ったかはわかりませんが、実際に体験することが大切なのだと思います。今はお米のすごさ、大切さをなかなか考えられないかもしれませんが、大人になったときに、米作りの大変さを思い出し、お米の大切さを自分たちの子どもに伝えてくれたらと思います」(青木智博)、「裸足で田んぼの中に入る瞬間……今でも忘れられません。子どもたちから『気持ち悪い』『変な感じ』という言葉……私もそう思いました。しかし、あの感触はとても気持ちの良いものでもあります」(桃澤佑子)、「田植えという作業の大変さを実感することができた。田んぼが果てしなく広いように感じられ、たった1時間ちょっとの作業ではあったが、腰は痛くなるし、苗一つひとつが小さいため、植えても植えてもなかなか進まない。わたしはすっかり疲れてしまいました」(納愛果)、「はじめは気持ち悪いといっていた子どもたちもいつの間にか、『こうやるとできるよ』『一緒にやろうよ』『わかる？』などと子どもたち同士で声を掛け合い、協力しあいながら作業ができるようになっていました」(浅川久美子)、「低学年の男の子が種芋の入った重いバケツを持ってくれたり、高学年の女の子が年下の子どもたちに、こうやるんだよとアドバイスしていたりと、楽しそうにしていました」(荒井麻理)。

言葉よりも実際にやってみることで、農作業の大変さを子どもたちも学生も感じていました。夏の暑さにも負けずに額に汗をびっしょりかきながら、真剣な目で力のかぎり畑に大きく成長した草を引き抜いていた子どもたちの姿はとても印象的で忘れることができません。そして、学習のときと同様に、子どもたちは自然にお互いを思いやり、教えあい、協力し合いながら感動や大変さなどの思いを共有していました。

2．2 「褒める」ことの大切さ

また、農作業の活動は子どもたちが自然に生きる生き物たちと触れ合う場でもありました。「時には泥まみれになりながら、カエルを追いかけるなど、子どもたちは全身で自然を感じています」(岩崎英里子)、「畑の近くの川で男の子も、女の子も、2年生も6年生も、学年に関係なく、楽しそうにカエルを追いかけていました。生き生きとしている子どもたちの姿をみて、子どもたちにもっと自然と触れ合う機会を作ってあげたいと思いました」(荒井麻理)。子どもたちはカエルなど、畑や田んぼに生きる生き物たちを実に楽しそうに追いかけていました。その表情は真剣で、学生の声も届かないほどでした。時には作業そっちのけで、カエルなどを追いかけている子もいましたが、興味を持ったものが自分の前で動き回っていたら作業をやるよりも、そちらの方向に意識が向いてしまうのもしかたのないことだと思っています。無理に止めさせ作業をさせるのではなく、頑張っている子たちが不快に感じないように隅っこによって、その子の欲求に答えてあげることも大事だと感じました。もちろん頑張って作業をしている子どもたちに対しては、その頑張っている姿を褒めてあげることも決して忘れてはいけません。「褒められる事は注意されることより効果的に子どもを成長させる」(土田恵久)。頑張っている子たちの中には自分たちの欲求を我慢し、作業に取り組んでいる子たちも少なくはないでしょう。参加してくれた学生は、子どもたちに寄り添い、ともに作業しながら子どもたちの頑張りを本当によく褒めてくれました。

これらのことから、のびのびとした子どもたちとともに体を動かすことで、今まで気づかなかった子どもたちの持っている別の一面をみることができたのではないでしょうか。そして、経験することによって、自分たちが普段何気なく食べているものを育てることの大変さ、自然

の大きさなどを子どもたちとともに感じとることができたのではないでしょうか。

３．バリアフリーキャンプ

３．１　興味が集中力を増す

今年度も 10 月 27 日、28 日の１泊２日で白馬岩岳に約 70 名でのキャンプが実施されました。ながの校から 16 名、グリーン長野校から４名、松本から４名の子どもたちが参加し、障害をもつ、年齢の離れた方と２日間活動をともにしました。今年のキャンプでは、フォトフレーム＆ウッドドール作り、キャンドルサービス（雨だったため）、大根掘り、とん汁つくり等を行い、18 年度以上に充実した、参加者の仲が深まる２日間になりました。

このキャンプが行われる前の 10 月 13 日の基礎学習で、ながの校ではバリアフリーについて学習しました。その中で、障害をもった人だけでなく、日本語を話さない人に自分を紹介するにはどうしたらいいのかを子どもたちに質問してみました。すると、「絵」「身振り手振り」と言った声があがったので、実際に「手話（ジェスチャー）」と「絵」を使って自己紹介をしてみることにしました。「自分たちがキャンプで関わる人のことを考え、こんなに真剣になれる子どもたちはすごいなぁと感心するとともに、自分もそうしていきたいと、子どもたちの姿から思わされました」（小平奈央）、「学びたいことを学んでいる子どもの集中力に感銘を受けた。自分が知りたい言葉の手話を教わるとすぐに自分に取り入れた。授業が終わったあとも質問を続けている姿が印象的だった」（丸山晃男）と、どうやったら、自分のことを相手に伝えられるかをキャンプに参加しない子どもたちも、みんな真剣に考え取り組んでいました。

３．２　障害をもつ方々との関わりから

キャンプ当日、「子どもたちと障害者の方たちとの間には、大きな壁があるように感じました」（布山奈津美）という言葉のとおり、オープニングセレモニーのときは障害をもつ方々の正面に座っていても下を向いて顔を合わせようとしない子どもたちも何人かいました。それが、レクレーションで手をつなぎ、肌と肌がぶつかり合いながら一緒に体を動かしているうちに、子どもたちは障害をもった方と顔を向け合い楽しさ、おもしろさを共有し、共に笑っていました。その笑顔をみているととても温かい気持ちになりました。「わたしが○○さんに付きっきりになってしまったことが、かえって子どもたちと○○さんとの関わりを減らしてしまったのかもしれません。○○さんが１人でもきちんとできるということに子どもたちが気づいたとき、障害をもっているといっても、何ら自分たちとは変わらないということを子どもたちは感じとったようでした。○○さんのにこにこした笑顔に応えるように笑った子どもたちを見たとき、心がとても温かくなりました。バリアフリーキャンプだからといって学生が無理に子どもたちと障害者の方を仲良くさせる必要はないのです。子どもたちは自然と何かをきっかけに仲が深まっていくのだと感じました」（布山奈津美）。

このキャンプでの２日間、子どもたちは学生が準備した企画に生き生きと楽しそうに取り組んでくれました。「フォトスタンドを作った時には子どもたちの豊かな想像性に感動しました。わたしでは思いつかないような独創的なデザインがたくさんあり、とても刺激を受けることができて良い体験になりました」（北澤百絵）、「朝露でぬかるむ畑に躊躇なく飛び込み、大きく実った大根を嬉しそうに引き抜く姿が見られました」（福澤愛海）、「とん汁を作っているときに、年上の子が年下の子を自然とフォローしてあげていて、見ていてすごく微笑ましかったです」（冨井希帆）。

また、障害のある方と活動をともにしたことで、「障害のある方からは自分で出来ること・難しいことを把握している人たちが多かったです。私が思っている以上に彼らに笑顔が溢れていて、とても幸せな気分を味わうことができました」(大家恵梨子)。ペアを組んだ学生は、活動をともにすることで身の回りのあらゆることすべてに手をだす必要がないことに気がつきました。彼らにも、自分でできるということにプライドがあり、他人からの助けを必要としないことの方が多いかもしれません。この点でもしかしたら、学生よりも子どもたちのほうが、そのことをよく理解していたのかもしれません。子どもたちはあまり障害者の方の隣にいくことはありませんでしたが、大根を抜こうとしたときにはさっと誰に言われるでもなく、彼らの手を握り、「せーの」と一緒に掛け声をかけながら抜いていました。活動中に、困った表情や、何かやりにくそうな表情をしているのに気づくと、そっとその人の近くに寄り添い、手伝いをしてあげた子どもたちの優しさを何度もわたしたちは目にすることができました。子どもたちはまわりの様子をみて、何をすべきか自分たちで判断し、動いていました。大人や学生が指示しなくても、自然と動ける力をもっているのだと感じました。

4．まとめ

3つの事柄から1年間を振り返りましたが、わたしたち学生はXYを通して多くの子どもたちや地域の方と関わる機会を与えていただき、そこで経験することによって学生一人ひとりが今までの自分自身の行動や今後とるべき行動などについて学ぶことができました。「子どもたちが日々新たな一面を見せてくれることに気づきました。そして、子どもたちの活動中の姿も、この子は今どうしてこんなことをするのかな、と少し間をおいて考えるようになりました。その子の様子を伺ってみるといった感じで、ちょっと待ってあげたり、距離をおいて見守ったりするようになりました。そうすることで、自分にも、子どもへの対応にも、余裕が持てるようになりました」(上田綾乃)、「経験することで初めてわかったこと、経験して初めて伝えられることがあるのではないでしょうか。頭の中で理解することと、体験して理解することとは天と地との差があるといっても過言ではないでしょう」(納愛果)、「子どもが持っている色々な側面を尊重しつつ、できることをもっと伸ばしてあげるようにしたいです」(大家恵梨子)、「子どもたちは日々成長している。この成長を教師であっても、大人であっても妨げてはいけない。子どもたちの好奇心を押さえつけないよう、子どもが耐えなければならない授業にならないように、このXYでの経験を活かし教壇に立ちたいと思う」(丸山晃男)、「この活動に参加するのも終わりかもしれませんが、また新たな始まりなんだと気づきました。今まで学んできたことを自分の宝にし、これからの生活に活かして生きたいと思います」(清水恵)。

振り返れば反省点や改善点は書き切れないほどたくさんあります。これらの反省が次に活かされるためにも、もう一度活動を振り返り、見つめ直していきたいと思います。

最後になりますが、この1年間活動ができたのは多くの人の協力があったからです。毎回の準備や活動に協力してくれた学生スタッフにはとても助けられました。ともに考え悩み、喜びを共有しあった仲間の存在は決して忘れることはありません。また、XYサタデースクールネットワークのスタッフの方々、JAの方々、地域の方々のご指導と支援があったからわたしたち学生が学び、経験を積むことができました。そして、なによりも、活動の場に子どもたちが参加してくれたからこそ、わたしたちは今まで知らなかったことに気づき、考えを深めることができました。XYの活動に関わってくださった多くの方に感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

活動に見る地域とのつながり

グリーン長野校　**滝沢典子**（障害児教育３年）

グリーン長野校は、篠ノ井にある JA グリーン長野で月２回、土曜日に活動を行ってきました。グリーン長野校の良い所は、活動に参加している子どもの人数がそれほど多くないので、全ての子どもに目が届くことです。子どももスタッフも、アットホームな雰囲気の中でゆったりと自由に活動を行うことができたと思います。月２回の活動のうち、１回は農作業、もう１回は学習です。農作業の活動場所は畑だったり、地域の施設だったりしました。活動内容も、昨年度は畑での種まきや収穫などが多かったのですが、今年度は少し遠い他の畑に出かけたり、ライスセンターや大岡の道の駅などの地域の施設で見学や体験を行ったりと、バラエティーに富んでいました。それらの活動の中には、子どもたちにとって家庭や学校では普段体験できないことも含まれていたのではないかと思います。

１．今年度の活動の反省

今年度の YOU 遊世間の全体目標は、「共鳴」でした。子どもたちと、連携先や地域と、学生スタッフとが互いに響きあって影響しあうことで、より楽しく、実りある活動ができると思います。特に、子どもたちが育つ場所としての地域の役割は、たいへん大きなものであると言われています。ということは、活動自体がどんなに楽しく活気あるものでも、スタッフや活動に地域とのつながりが感じられなければ、その活動の価値が十分に活かされなくなってしまうのではないでしょうか。そこで、グリーン長野校の活動に参加している学生スタッフに、「活動を通して、子ども・地域の方々とのつながりを感じたか」アンケートを取ってみました。アンケートの質問項目は、以下の４つです。

１．活動を通して、スタッフや活動と子ども・地域の方々とのつながりを感じましたか。それはどのような活動からですか。
２．今年度の活動の中でどんな活動が印象に残っていますか。それはなぜですか。
３．活動を通して何か学んだことはありますか。それは何ですか。
４．来年度以降、地域とのつながりをさらに深めるために、どんな活動があったらいいと思いますか。

２．スタッフや活動と子ども・地域の方々とのつながり

アンケートの１について、グリーン長野校の活動に参加した学生スタッフは、全員が子ども・地域の方々とのつながりを感じたことがわかりました。「農作業体験や、ふじまつりでの即売体験など、学習以外の課外活動でたくさんの保護者の方々にも参加していただいたり、お手伝いをしていただいたりしました。また、JA の方々にも野菜のことについてさまざまなことを教えていただいたりしました。そういった場面で地域の方々とのつながりを感じることができました」（酒井奈々）、「XY の活動があること自体に、地域とのつながりがあることを感じた」（青木綾子）、「農作業では JA の方や地域の方から多くのことを教えていただきました。地域に出て活動する機会が多く、そういった活動の場があるということは、活動に地域とのつ

ながりがあるということだと思います」(滝沢典子)。

3．印象に残った活動

アンケートの２では、学生スタッフによって印象に残った活動は異なりますが、一人ひとりが思い出に残る体験ができたことがわかりました。バリアフリーキャンプを挙げたスタッフは、「グリーン長野校以外の子どもたち、月影寮の方々とも交流できたこと、そして、食事係として大勢の子どもたちをまとめていくことの大変さを感じることができたからです。普段の活動からは得ることのできないたくさんのことを学べたと思います」(酒井奈々) と言っています。学習について挙げたスタッフは、「年間を通して一つの教材を扱うという事は、子どもたちの学びが深まり、知識の定着に繋がったのではないかと思います」(浅井美由紀) と振り返っています。また、休み時間に子どもたちと遊んだことを挙げたスタッフもいました。「子どもたちと鬼ごっこをしたこと。子どもたちは思っていた以上に体力があって驚いた」(青木綾子)。

このように保護者の方や地域の方に活動に関わっていただく機会も多く、学生スタッフにとっても、また子どもたちにとっても、印象的な活動が多かったのではないでしょうか。

4．活動を通して学んだこと

アンケートの３については、全てのスタッフが１と関わって振り返っていました。

「活動では本当にたくさんの保護者の方々に参加していただいて、お手伝いをしてもらったり、と助かることがとてもたくさんあり、保護者の方々との連携の大切さ、また、学生スタッフとの連携の大切さなどを学ぶことができました。何事においても、一人ではできないと感じました」(酒井奈々)。また、子どもたちの姿から学んだこともありました。「子どもたちは本当にそれぞれ多様な考え方を持っていて、どの子もどの個性も大切に伸ばしていってあげることの大切さも学ぶことができました」(酒井奈々)、「学習のとき、簡単すぎる内容だと子どもたちはすぐに終わらせてしまい、暇そうにしたり遊び始めたりしてしまいます。難しすぎる内容だと、つまらなそうでなかなか学習に参加しようとしません。子どもたちが興味を持って、楽しんで学習できるよう計画することの大切さも学びました」(滝沢典子)。

5．来年度以降の活動について

アンケートの４には、来年度の活動に活かせそうなことを書いてくれました。

「障害をもった方々との交流があったように、普段触れ合うことがあまりないような方との交流があるといいなと思います」(酒井奈々)、「地域の方にも参加してもらえる活動を取り入れる」(青木綾子)、「世間では総合学習について言われているので、本当の意味で子どもたちが本当に学びたいと思うことを、子どもたち自身が考え、学べるような時間も取り入れていけたら良いかなと思います」(浅井美由紀)。

今年度は学生スタッフがなかなか集まらず、大変なときもありました。しかし、子どもたちが楽しんでくれたこと、また、活動に地域とのつながりがあることもわかりました。これからも子どもたちが地域の中で成長していけるような活動を行っていきたいと思います。

◇地域協力者からの評価

XY サタデースクールの活動について

NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク常務理事・事務局長　**唐木忠重**

当スクールは、学校の完全週休二日制により休日となる土曜日に、子どもたちに居場所を提供しようという趣旨で、平成 14 年から活動している NPO 法人（XY サタデースクールネットワーク）が運営しているスクールです。

農作業は、JA（農業共同組合）の営農指導員の指導を受けて進めますが、学習の指導をしたり、農作業の手順について営農指導員と打ち合わせて、実際に子どもたちを指導するのは学生スタッフの皆さんにお願いしています。現在は、信州大学と清泉女学院大学と同短大の学生の皆さんです。

学生の皆さんは、学習のカリキュラム委員会に加わってもらい、年間のスケジュール設定から、農作業の企画について営農指導員と打ち合わせたり、それに沿った教材を用意したり、学生の皆さんにとっても、極めて実践的実習の場になっていることと思います。

どんな活動もそうですが、カリキュラム検討や農作業も、どう進めるか、自ら進んでその中に飛び込んでいかなければ、難しさもまた喜びも味わえないと思います。始めて６年目になりますが、毎年積極的に参加してくださる学生さんがいて、感謝もし、また頼もしくも感じています。

子どもたちは、社員スタッフより学生スタッフの方が、身近に感じているようです。逆に言うと、学生スタッフの皆さんが居るお陰で当スクールが成り立っているとも言えます。その点で、心からお礼申し上げます。実際にも、不登校気味の子どものお母さんが「XY にはどうしても行くんだ……」といって、他の行事があっても XY の方へ行くんですよ、と言ってくれる人がいます。学校より自由な行動を許しているということがあるのですが、それも子ども一人当たり一人～二人の学生スタッフがいてくださるからです。

子どもと接している学生さんの次のような感想も寄せられています。

田圃にいるカエルを捕らまえて遊んでいる友達に対して「家で飼おうとしたってカエルはすぐ死んじゃうよ。それより、居るべき場所に居させてあげよう」と声を掛けた小四の男の子。彼とは今年で三年目だが、今までは捕らまえる側にいた。たくさん捕らえてビニール袋に入れて持って帰っている子だった。しかし、XY の活動を通して「いのち」に対して考えることがあったのだと思います。それは、誰かが教えたことではなく、彼自身が体験を通して学んだことです。これが「体験学習なんだ」と実感しました。

また、参加している学生の皆さんは、XY の活動に参加して得るところがあったと、実感していらっしゃることと思います。特に実祭に身体を動かして作業をする時の子どもの生き生きした目の輝き、毎回成長して行く子どもたちの姿に接することは計り知れない体験となっていることでしょう。どうかその体験を今後に活かして欲しいと願っております。

「信大 YOU 遊世間」と連携して

NPO 法人 XY サタデースクール・JA グリーン長野校校長　**小濱政興**

私たち NPO 法人は、JA 長野中央会と提携し、さらに各単協の協力を得ながら、戸田忠雄代表を中心に XY サタデースクールを開設（今年度は長野・篠ノ井の２校）し、６年目になり

ました。年間 21 回の農作業体験と基礎学習の活動で、今年度も信州大学教育学部土井進研究室「YOU 遊世間」の学生が沢山活動に加わっていただき大変助かっています。

学生を含むカリキュラム検討会で、新しく追加した事業や学習内容に、簡単な感想を添えてあげてみます。①「バリアフリーキャンプ in 白馬・岩岳」を年間計画の中へ位置づける。②国語学習では宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の暗唱とその発表会をもつ。従来扱ってきた格言・ことわざのほか、論語より抜粋した文を加える。③英会話学習でも「雨ニモマケズ」英訳の暗唱とその発表会をもつ。④算数学習では直観力・思考力をつける教材を扱う。以上の４点。

①では、キャンプ中の活動のソフト面を学生が担当してくれました。緻密な準備から行き届いた実践まで無事故で元気な楽しい活動ができ、所期の目的を達成することができました。上田明照会の月影寮と高水福祉センターりんくの知的障害を持った方７名が参加して、付き添いの方々はたいへんよろこんでおられました。②の「雨ニモマケズ」は工夫した取り扱いによって、子どもたちの暗唱の出来の速さには驚きました。この詩の中で素直な疑問は「デクノボーといわれるような人にどうしてなりたいのだろう」と考える子がいると思います。どうしましょうか。論語は教材不徹底のため篠ノ井校のみでしたが一例をあげると「其れ恕か。己の欲せざる所を人に施すこと勿れ」。これは「思いやり」の意味で扱い、「雨ニモマケズ」の中の東・西・南への能動的な行い（ボランティア活動）まで触れてみました。③算数・数学学習の大切な一つは、基礎知識をもとにして考え解決する力をどこまで伸ばせるかが問われます。一例をあげます。

「１、２、３、４、５、６、７、の７この数を１つずつの中に入れて、２つの大きな◇の中の数の和が同じになるようにしましょう。」テキストをやり終えて遊びたがる子には効果的でした。

子どもたちは学習や体験活動の積みあげの中から、自然に感性もふくらみ育つものと思います。大自然の営みへの驚き、田畑でたわむれた生き物、手をかけるほど応えてくれる作物、感動する文章、周囲の人たちの暖かな言動などを通して豊かな感性を育む一助になることを願い、意図的に適宜ふれられる機会もとらえたいと考えます。特に感謝すること、思いやることに関わって。

年間を通して子どもたちに対して、常に目配り・気配り・心づかいを忘れない学生の姿を嬉しく感じています。スタッフ間の連携を密にして研究し合いながら、共に意欲的な活動ができるよう願ってやみません。

湯谷小子どもランド（6年目）

プラザ長　田村　将太（教育実践科学専攻３年）
副プラザ長　齋藤　有希（言語教育専攻３年）
副プラザ長　布山奈津美（言語教育専攻３年）
副プラザ長　野口　洋憲（社会科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

唐木　佑輔（実４）	清水　亜美（実４）	中村千恵美（実４）	堀端　優也（実４）
松橋　彰行（実４）	稲玉　恵美（言４）	永塚　達也（実４）	青木　智博（実３）
加藤　博美（実３）	五味　沙織（実３）	春原　圭佑（実３）	藤岡　泰裕（実３）
亦野　潤一（実３）	斉藤　健治（言３）	田村　弘樹（言３）	石井絵理子（社３）
納　　愛果（社３）	城井　稀人（社３）	須貝　和之（社３）	土田　恵久（実３）
一條　まな（言２）	市原　哲矢（社２）	伊藤　香澄（実２）	大川　雅也（実２）
大橋　正章（社２）	太田　まみ（言２）	笠井　悠太（理２）	菊池ゆかり（言２）
小西　　舞（実２）	坂本　英幸（数２）	高池　亮輔（保２）	中島　健雄（数２）
永谷　嘉浩（実２）	西澤　　遥（実２）	原　　耕平（理２）	松永みなみ（数２）
水崎　智也（理２）	山岸真梨子（実２）	山崎　美保（言２）	吉池　潤奈（実２）
伊藤　　綾（県短）	植田　末衣（県短）	植野　敦子（県短）	笠原　麻衣（県短）
金井　彩花（県短）	倉島　喜子（県短）	小林　友美（県短）	小林　円香（県短）
小見山育美（県短）	川上あづさ（県短）	北澤　詩織（県短）	菅原　千史（県短）
柴田知佳子（県短）	高橋　真依（県短）	武重　彩那（県短）	竹節由希子（県短）
竹松今日子（県短）	浜頭　一仁（県短）	堀内　綾花（県短）	前島　桃子（県短）
松本　奈央（県短）	百瀬　史麻（県短）	宮崎　れみ（県短）	柳町　裕美（県短）
若林ちひろ（県短）			

○参加者数

子ども　73名　　中学生４名　　保護者約40名

○プラザの概要

「湯谷小子どもランド」は、湯谷小学校の子どもたち（１～６年生）と、その保護者、信州大学の学生と長野県立短期大学の学生が提携して活動している団体です。今年からは卒業して中学生になった１年生４人も中学生スタッフとして迎えて１年間を活動してきました。

活動の回数は月に１、２回程度で、土曜日の午前中の時間を使い、主に地区の壇田地区センターを利用させてもらい様々な活動をしてきました。私は「湯谷小子どもランド」の特徴として、子どもと学生と保護者という三者どれもが主役である、みんなが楽しめる場であるという考えが挙げられると思います。

そこで今年度の目標というのが次にあげたものです。

子どもたちが異年齢集団の中で友達と関わりを持つことを通して、コミュニケーション能力や社会力の向上を目指すと共に、子ども・学生・保護者の三者間、または子ども・学生・保護者同士の交流を深め、質の良い活動を造り上げていくこと。

また、「湯谷小子どもランド」の設立当初の目的として「週５日制になったことによる、土曜日の午前の子どもの居場所を作る」というものがありました。このことを基として、子ども

たち、学生、保護者が互いに関わりあい、この場（湯谷小子どもランド）にいることが楽しくなる、行くことが楽しくなる場を作っていきたいということを私たち学生の願いとしてさまざまな活動をした１年でした。

○一年間の活動

日程	活動内容	場所
５月12日	名札作り＆アイスブレイク♪	壇田地区センター
６月２日	巨大パズルに挑戦！！	壇田地区センター
６月23日	キャンプに向けて	壇田地区センター
７月７日～８日	夏のキャンプ　～テーマはスマイル！	妙高少年自然の家
７月28日	マジックハンドを作ろう！　宿題をしよう！！	壇田地区センター
８月４日	つり＆BBQ	信濃町の釣堀
９月８日	野外炊飯	ハイウェイオアシス
10月20日	ぢつき山公園へハイキング！！	ぢつき山公園
11月３日	トリックオアトリートをしよう！！	壇田地区センター・公園
12月15日	オリジナルクリスマスケーキを作ろう	壇田地区センター
１月12日	やしょうまをみんなで作ろう（県短企画）	壇田地区センター
２月16日	雪遊び（未定）	壇田地区センター
３月１日	お楽しみ会	壇田地区センター

◇実践から得た「臨床の知」

湯谷小子どもランドのメインイベント！！
―湯谷キャンプで学んだこと―

田村将太（教育実践科学専攻３年）

１．はじめに

「湯谷小子どもランド」はほとんどの活動を学生が企画するプラザであり、その中でも７月上旬（今年度は７日～８日）に行われる、妙高少年自然の家での２日間のキャンプは学生にとって非常に大きな影響を持ったものではないのか、ということを私は考えている。

その理由として何点かあげることができるが、このキャンプの企画を２年生が企画運営することが一つの大きな理由として挙げられると考える。それは、信州大学の「信大 YOU 遊世間」への主な参加は、学部に移る２年次からということであり、このようなフレンドシップ事業に関わり始めて間もない２年生が、企画・運営することが極めて大きな感動や反省を２年生に与えるのではないかと思う。

また今年度の学生企画の活動をざっと見渡した限りでは、企画・運営のほとんどを四役で行ってしまうという反省もあり、スタッフからまたそれらの反省を聞くことは不可能であるとも感じた。そのような事情もあり、参加者全員が企画・運営にあたった「湯谷小子どもランド」でのキャンプ（以後、「湯谷キャンプ」と記載）に主に焦点を当てて、この実践記録を記していきたいと考えている。

その中で、05 年度の２年前から湯谷キャンプの企画・運営が学生に多く任せられた、とい

う点からも、今年で一度「湯谷キャンプ」の３年間を見直し、学生自身における「湯谷キャンプ」の意義、また「湯谷小子どもランド」における「湯谷キャンプ」の意義を問い直していきたいと考えている。

２．湯谷キャンプとは

さて、これから扱う「湯谷キャンプ」とは一体何なのであるか、という説明から入りたい。「湯谷キャンプ」は、前述の通りだが、７月の上旬に行われ、新潟県妙高市にある国立妙高少年自然の家を利用して、課題解決ハイキングやキャンプファイヤーなどを楽しむという企画である。野外宿泊や野外炊飯がない、という点では一般にイメージするところのキャンプというものからは多少遠ざかる気もするが、自然の多いところで行う活動であることなど、いつもとは違う特別な活動として子どもたちにとっても楽しい活動になっているようだ。

これも先ほど記述したが企画・運営を２年生が行う。それはなぜかというと、３年生はこの「湯谷キャンプ」の行われる時にちょうど教育実習があり企画・運営することが困難である、ということから２年生がこのキャンプを企画・運営するという運びになっている。

３．学生にとっての意義

学生にとってこの「湯谷キャンプ」は一体どのような意義があるのだろうか。この「湯谷キャンプ」では初めて一緒に作業をすることも多い。

３．１　湯谷キャンプの与えた個人への影響

「一番はフレンドシップ活動の楽しさを感じました。子どもたちの前に立つことの難しさ、ふれあい、自分に足りないものの数々が見えた気がします。また、夜の飲み会で見える保護者の子どもに対する思い。それに少しでも触れられたのが一番の収穫でした。子どもってすごいですね」（春原圭佑）、「今思うと自分が本部となって企画することの、体系や組み立て方の基本となっているのかなぁ、と思う」（土田恵久）、「初めて経験した“自分たちが中心になって作り上げたキャンプ”だったので、当然反省することもとても多くあったけれど、とにかく大きな感動がありました。“連携が大事”という言葉を切に実感することも出来ました。湯谷キャンプを通して「これ」というたしかなものを学び取ったというよりも、色んなことの基盤となる大切なものを感じ学んだように思います」（清水亜美）。

など、この「湯谷キャンプ」が、一つの大きな感動体験であり、また個人のフレンドシップ事業を行う際の基盤となっている面を多く見ることが出来る。

この「湯谷キャンプ」は、今年度の企画・運営は私の１学年下が行った訳だが、傍観している限りでは、やはり３年となった私から見るとまだまだ企画面では甘い面があったり、子ども理解（体力面・知識面）が浅いのではないか、という思いもあった。それはもちろん、子どもに触れ合うことをはじめたばかりの２年生がそのような面での深い洞察があることは、稀であると考えていた。

そして、当日にもそのような反省が出ることも承知していた。しかしそのような反省を経験的な知として獲得することによって、上記のような意見、例えば「基盤になっている」や「フレンドシップ活動の楽しさを知る」ということがでてくるのではないのか、と思った。またそれらの思いも「泣きそうだった」といえるくらい、「湯谷キャンプ」に対して思いが深くなければ抱くことも出来なかったであろう。

かくいう私自身も、この「湯谷キャンプ」を契機としてフレンドシップ活動へ楽しみを見出していった人間のうちの一人なので強くその思いを感じる。その反面、私たちのやった「湯谷キャンプ」では、閉会式に子どもが寝ていたりと、非常に疲れた面も見て取れたところから、子どもの立場になって考える活動という基盤を私自身が持った気がする。そのような反省を得ることが出来たのは、やはりそのことを経験したからなのではないだろうか、と思う。

３．２　子どもたちをみて感じたこと

また他にも、「私は力不足ながら班長をやらせていただきました。班には極度に人見知りの子がいて最初はどう対応すればいいのか分かりませんでした。話し掛けても黙り込んでしまったり逃げ出したりしてしまったり……正直、私は先生に向いてないのではないかと落ち込みました。でも根気よく声かけを続け、班のスタッフと協力してその子と関わっていきました。すると１日目の夜、初めてその子からそばに来て抱きついてきてくれたのです。今までの苦労や疲れが吹っ飛ぶくらい嬉しかったです。あぁ子どもと関わるってこういうことなんだ！私やっぱり子どもが好き！って思える瞬間でした。私は「湯谷キャンプ」をきっかけにいくつかの活動に参加して、実践的な活動が一番勉強になると思いました」(高橋真依)。

「バラバラだった子どもたちが課題解決を越えていく中で学年が一番上の子が下の子たちをまとめて先頭に立って進んでいった姿が印象的だった。下の子たちもそれについていったので驚いたが、しっかり下の子たちの意見を聞く年長の子がいたからだと思った」(藤岡泰裕)。

「班で活動して行く中で、最初は、１人で行動して、勝手に歩き回っていた子が年下の子の様子を気にかけるようになり、班全体のことを考えるようになった姿を近くで見て感動した。学生が何もしなくても、子どもたちで課題を解決していくことが出来て、その、少しのことでも子どもたちに影響し、また、子どもの力ってすごいなと思った。そういう成長を気づける人になりたいと思った」(伊藤香澄)。

など、子どもと関わってよかったことや、実際に子どもと関わって驚いた面などもあった。そんな中で、子どもへの愛情が深まったり、今後もこのような活動を続けていきたいと願ったり、自分の将来への願いが出来た学生が生まれた。

このように「湯谷キャンプ」がもたらした学生への影響というのは、良いことであれ、悪いことであれ、非常に大きいものであった、と考えることが出来る。

このように見てみると湯谷キャンプを経験することで、「信大 YOU 遊世間」では経験の少ない状況から試行錯誤をしながら、みんなで協力して作り上げていくことを通して大きな感動を得たり、反省をしたりして、その後の学生の活動への意欲につながったり、子どもへの関心につながっているのではないだろうか。

３．３　後の「YOU遊」への願い

「みんなと話して一人ひとりの思ってることを知れて、もっと、深くみんなと関わっていきたい、と思いました。「YOU 遊」に深くかかわりたいと思った次第です」(原耕平)。

「とても良いキャンプだった。キャンプの準備・当日ともに楽しくできたしみんなの笑顔をいっぱい見ることができた。このキャンプを通して１泊２日という短いキャンプを企画するのに、多くの人・時間を要することが実感できた。前からだったけど、子どもがもっともっと好きになったし、これからも「YOU 遊」の活動にいっぱい参加したいと思った」(小西舞) に、後の願いが表されているのではないか、と思った。

４．「YOU遊世間」における湯谷キャンプの意義

私はかねがねこの「湯谷キャンプ」が、「YOU 遊世間」に参加しようという意欲を強める一つの要因になっているのではないか、と感じている。もちろん、「湯谷キャンプ」に参加しておらずとも熱心に活動に参加している人もいるし、逆に「湯谷キャンプ」に参加したからといって必ずしもその後の活動に熱くなるというわけではないが、あくまでも要因の一つとしてあげてもよいのではないか、と感じている。

そう感じたきっかけは今年度のプラザ長・副プラザ長になっている学生の中に「湯谷キャンプ」に参加していた学生が多いと思ったからだ。スタッフ 18 人の内、13 人が今年度の「YOU 遊」に役員として参加している。これは私には無関係と思えない。

また、この実践記録を書く際にとったアンケートでも、

「湯谷キャンプに参加した後に YOU 遊世間への関心が高まりましたか？」という質問に対して、アンケートの回収数が 23 枚の中で、ハイと答えた人が 18 名いる。ということはやはり、この「湯谷キャンプ」の存在が「YOU 遊世間」への関心を深める契機となっているという思いを強くした。

今年度の立ち上げの時に、担当教員の土井進教授が「この「YOU 遊世間」は学生の意欲によってなりたっている、やらなくてはいけないことではないし、やる人がいないのならば今年でなくなってもいい」というような趣旨のことを話されていた。

この「YOU 遊世間」が続いているのはひとえに学生の熱意があったからなのではないだろうか、と思う。

「湯谷キャンプ」が学生の企画で始まって３年目であり、これが全くの理由であることとは絶対に言えないのだが、こうして「湯谷キャンプ」を経験して、「YOU 遊」への関心が高まったという意見が多いことは、「YOU 遊世間」を持続、またはより強いものにする要因の一つになっていると私は考える。理由は「３．学生にとっての意義」で述べたとおりである。

５．保護者の考える湯谷キャンプとは

２年前から企画・運営を学生側が任されることになったが、保護者の方々はこの「湯谷キャンプ」を一体どのように考えているのだろうか。「湯谷キャンプ」は「湯谷小子どもランド」の活動の中でもやはり特別な行事であり、この活動に期待する保護者も多いのではないか、と思う。

また活動の中で子どもに危険なのでは？　体力的にハードなのでは？　などという思いもあるのかもしれないが、実際のところはどんな思いだったのであろうか。

「一人一人の子どもたちに関わろうとする一生懸命な姿が見られました。学生さん達には毎年の事ながらこのキャンプに対する熱い思いが伝わってきて、私たち親も勉強させられたり、元気をもらったり感謝の気持ちでいっぱいです」、「学生さんが考えてくださったさまざまな企画がどれをとっても楽しく過ごせるもので子どもたちはもちろんのこと、親も童心に返って楽しめることができて本当に感謝の気持ちで一杯です。お忙しい中をさいて何週間も前から睡眠時間をけずってまで準備をして下さって、胸が一杯になりました。子どもたちのステキなスマイルが見れて子どもたちの生きる力が見れて一生の宝物になりました。ありがとうございました」、「子どもたちが安全に楽しめるように心を配っていただいて本当にありがたかったです。下の子も一緒にがんばれる様に手をつないでくれたり、はげましてくれたりもして、とても助

かりました。子どももすごくなついてました。ありがとうございました。お疲れ様でした」。

これらは今年度のキャンプが終わった時に保護者に書いてもらったリフレクションシートからの抜粋であるが、他にも「感動！感謝！」など学生への感謝を綴ったものがたくさんある。これを見る限りでは、やってよかったと思うだろう。

また普段の活動の中で、保護者の子どもへの思い、学生への思い、ということがこれ程までに分かることはそうそうないことだろうと思うし、またそれを実感できる場も非常に貴重であると感じる。これらをみても分かる通り、保護者は「湯谷キャンプ」に大変大きな期待を寄せていることが分かる。

私たち学生は、保護者の方々がこのような思いでいることに、そして、このような場を与えてくれていることに感謝をしなければならない、と感じた。さらにこれ以上に期待に応えたいという思いも出てくるであろう。このように保護者の思いや願いが分かるということは学生にとって非常に有意義なことであると感じた。

6．終わりに

今回「湯谷小子どもランド」の実践記録を、「湯谷キャンプ」のみに焦点をあてて考えてきたわけだが、こうして資料をまとめているだけでも、子どもにとっても、学生にとっても、保護者にとっても、「湯谷キャンプ」が特別なものであるということが分かった。学生のリフレクションシートをみるだけでも学生が活き活きしているように映った。

ここまで、こうして考察してきてみた結果、「湯谷キャンプ」には子どもの成長はもちろん、その成長にふれることで、また企画・運営を通して成長することのできる場なのではないのだろうか、と思う。そして、そのことが顕著にみることができるのではないのか、と思う。

そのことは、「学生も子どもも保護者さんも、色々な考えがあること。子どもの成長は、何らかのことで一気に伸びること。困った時“導いてあげよう”“やってあげよう”とかじゃなく、一緒にやってみることが大切だと感じた」(伊藤香澄)、「企画をすることで悩んだりぶつかりあったり、いろいろな考えを出し合ったりして最後の子どもたちの姿が楽しそうなのを見て凄い達成感があった」(高池亮輔)、というように自分たちの成長・子どもたちの成長などを糧にしていることがよく分かる。

キャンプだけに焦点をあてているので、「他の活動はどうなんだ」と気になる人もいるだろうが、キャンプをきっかけにして、「湯谷小子どもランド」に来てくれるようになった学生もいるし、またその学生の中でも子どもたちと多く関わっていくようになったり、子どもが学生の話をきくようになったりと、この１年を通して色々な成長・変化を見ることができた１年だった。

この度、なぜ「湯谷小子どもランド」の実践記録を「湯谷キャンプ」に焦点をあてたか、というと私自身が「湯谷キャンプ」を経験することによって「YOU 遊世間」への関心が深まり、子どもたちへの愛情が増した、と感じたためである。実際に私たちの企画した「湯谷キャンプ」では日程がハードだったためか、閉会式には寝ている子どもたちもいて子どもの実情にたつことの大切さ、というのを身にしみて感じた。ここで学んだことや、嬉しいと思ったことや喜び、というのはその後のフレンドシップ活動やまた、教育実習においても私自身に深い影響を残していたと思う。そしてそれは決して後悔のような感情ではなく、経験してよかった、と常に思うことができたからである。

このようなことを感じることができるのも、このような場を与えてくださっている保護者の方々のおかげであり、そのことに感謝を感じずにはいられない。また、年間を通じて出会っている子どもたちの中にはキャンプをきっかけとして、成長したなあと見られる部分もあったりして、学生にとって、「湯谷小子どもランド」という場は非常に恵まれた場であることを感じている。

今後もこのことに感謝しつつ、当初に挙げた目標のようによりよい活動になるように来期以降も頑張っていきたい。

◇地域の保護者からの評価

子どもたちの成長をともに感じる時、かけがえのない瞬間の連続

湯谷小学校子どもランド　保護者代表　**中谷隆秀**

1．湯谷小の子どもにとっても、親にとっても素敵な場

2007 年度の「湯谷小子どもランド」の活動は、月に1回、様々な体験やスポーツをするレクリエーションをするだけではなくて、学生スタッフ自身の手による運営を一歩前進させた1年でもありました。3年前から運営主体を学生スタッフ自身に移行させて任せてきましたが、今年度はニュースレターの印刷や配布、それから活動実施後の湯谷小への「報告活動書」の作成と報告も毎月行ってきました。もちろん、毎月、長野県短期大学の学生や保護者も協力して運営してきました。

2．継続して登録する子、高学年になっても続ける子が増えてきました

「湯谷小子どもランド」は、毎年春に参加募集の案内をして希望者が登録をします。今年度は春から約 70 名の子どもの登録があり、いつもよりも大勢でとっても驚きました。子どもたちにとっては友達作りの場でもあり、1年生から6年生までの異年齢の集団での活動や様々な体験ができる場でもあります。毎月の企画ではどの子も元気いっぱいに体を使って、学生スタッフのお兄さんやお姉さんたちにぶつかって行きます。いつも元気な湯谷っ子はみんな学生スタッフのお兄さん、お姉さんたちが大好きです。子どもたちにとっての学生のお兄さん、お姉さんは、身近な友達であり、信頼でき、甘えられる大人なのです。子どもたちは活動の中で、近い未来の自分の姿＝「夢」と学生スタッフのお兄さんお姉さんの姿を重ねているようにも感じています。学生スタッフは子ども達の憧れの的なのです。

3．保護者とのコラボレーションをもっと強化したいね

子どもランドの活動のもう一つの特徴は、いつも学生スタッフの活動を保護者がともに関わって支えていることです。年間数回の交流懇談会も行い、お互いの想いや悩みも交流しています。保護者のメンバーは、学生スタッフと交流し、活動に参加する中で、子どもたちに真剣に向き合ってくれるキラキラ輝いている学生スタッフの姿に感動します。子どもランドの場が保護者にとっても元気になれるし、楽しい素敵な時間になっているんだなぁと感じます。保護者にとっても貴重な時間なのです。最近は保護者が手伝う場も少なく参加する親も以前よりちょっと減っている時もあり、今後の課題でもあると感じています。しかし、保護者と学生スタッフが想いを交流することでお互いの信頼関係とパートナーシップはとても強いものになり、子ども達の活動を底辺で支えているのだと思います。子どもランドの保護者はみんな、学生スタッフのことが大好きです。

４．テーマは「スマイル！」、湯谷キャンプは夢の体験！感動の嵐！

子どもたちの１年間の活動の中でも一番の活動は「湯谷キャンプ」です。３年前からキャンプの内容がダイナミックにスケールアップしましたが、さらに今年は昨年よりもまた内容の濃い充実したキャンプを作り上げてくれました。子どもたちにとっては、１泊２日の「湯谷キャンプ」はまさに、夢の体験空間であったと思います。これ以上の素敵なキャンプはないんじゃないかと思えるほど、素敵なキャンプでしたね！

５．これからも共にもっともっと素敵な活動を作っていきましょう！

このような素敵な子どもランドの活動がこれからもずっとずっと続けていけるように、保護者としてもしっかり学生スタッフと協力をして、子どもたちがいつまでも「夢」を持って明るく元気に過ごせるように活動を続けて行きたいと思います。本年度は特にリーダーの田村将太君、副リーダーの野口洋憲君、齋藤有希さん、布山奈津美さん、多くの学生スタッフの皆さんには大変お世話になりありがとうございました。湯谷小の子どもたちは本当にこんなに素敵な学生スタッフにめぐり合えて、幸せだと思います。これからももっともっと素敵な子どもランドの活動を共に作っていきましょう。心から感謝を込めて、いつも子どもたちに「夢」をありがとう！

にこにこクラブ（6年目）

プラザ長　青木みなみ（障害児教育専攻３年）
副プラザ長　上田　綾乃（教育実践科学専攻３年）
落合　静香（社会科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

青木みなみ（障３）	上田　綾乃（実３）	落合　静香（社３）	小平　奈央（障４）
永塚　達也（障４）	木下　裕朗（障４）	足立　千明（障４）	柳沢　里美（障４）
倉橋　慶子（障４）	原　良平（障４）	春原　圭佑（実３）	加藤　博美（実３）
藤岡　泰裕（実３）	石井絵理子（社３）	土田　恵久（社３）	大家恵梨子（社３）
斉藤　健治（言３）	田村　弘樹（言３）	井出　竜也（保３）	赤羽　雄仁（地３）
細田　有希（生３）	北沢　俊樹（障３）	江里口紗矢（障３）	堂前　直人（障３）
小嶋さやか（障３）	柳沢　章仁（障３）	滝沢　典子（障３）	中川　茜（実２）
市原　哲也（社２）	大橋　正章（社２）	小林良太郎（理２）	原　耕平（理２）
笠井　悠太（理２）	長田　翔太（障２）	荒井　裕太（障２）	塩澤　茉季（障２）
長尾　麻菜（障２）	武重　由貴（障２）	伊藤　綾香（障２）	大竹由里子（障２）
尾島　美幸（障２）	計41名		

○参加者数

長野養護学校の児童・生徒17名　兄弟姉妹６名　保護者の方々約20名

○連携団体

にこにこクラブ参加の長野養護学校児童生徒の保護者の方々
西山昭美先生（音楽療法士・ふくろうの森の指揮者）

○プラザの概要

「にこにこクラブ」は、長野養護学校の子どもたちと保護者の方々が、休日の時間を一緒に楽しく過ごすことを目的とした活動です。にこにこクラブでは、子どもたちと学生が１対１のペアを組んで活動をします。ペアを組むことには、子どもたちの安全をしっかり守ったり、活動を行う中で心をかよい合わせることに喜びを感じたりといった良い点があるのではないかと思います。

今年度は、「出会い・笑顔・つながり」をスローガンに一年間活動を行ってきました。この一年、本当にたくさんの出会いがありました。多くの人が出会い、みんなの顔が笑顔になりました。最初のころはなかなか縮まらなかった子どもたちとの距離も少しずつ変化し、お互いの心がつながっていく様子がありました。今年一年の活動を通して、このスローガンはさまざまな形で達成されていたと思います。そうやってうまれたつながりをさらに大きく広げていけたらとても素敵だと思います。

○一年間の活動

今年度の活動が始まる前に、保護者の方々と連携をとりながら一年間の活動計画を立てました。月に一度活動を行うようにしました（８月・９月以外）。希望や改善案、昨年度の良かった点などを考慮し、今年度はなるべく新しい内容にチャレンジしていくことを心がけました。

次の表が、今年度の活動内容です。８月・９月はおやすみでした。

4月22日	城山公園へピクニック☆（雨天のため少年科学センターに変更）
5月27日	茶臼山動物園へ行こう！
6月24日	プールで遊ぼう♪（サンマリーン）
7月22日	ボーリングをしよう！！（ピカデリーボウル）
10月21日	バーベキュー＆アスレチック★（小布施ハイウェイオアシス）
11月18日	長野市内探検にでかけよう！
12月15日	クリスマス会☆（しなのき会館）
1月13日	西山昭美先生による音楽療法♪（しなのき会館）
2月10日	餅つきにチャレンジ！（しなのき会館）
3月16日	思い出の一品づくり☆（しなのき会館）

一年間の活動を通し、にこにこクラブは子どもたちや保護者の方々、たくさんの学生の協力によって支えられてきました。にこにこクラブに関わった学生や保護者の代表の方に今年度のにこにこクラブの活動を振り返っていただき、一つのテーマに沿って学んだことや感じたこと、今後の課題などをまとめました。

以下に記述したのは、学生と、保護者の代表の方の振り返りです。

◇実践から得た「臨床の知」

出会い＋笑顔＋つながり＝大きな成長

「にこにこクラブ」の活動を通し、子どもたちと関わる中で学んだこと

青木みなみ（障害児教育専攻３年）
上田　綾乃（教育実践科学専攻３年）

１．子どもたちとかかわる上での不安

「「にこにこクラブ」において子どもたちと関わる中で最初に感じることは、コミュニケーションの難しさだと思います。子どもたちが何を求めているのか、どのくらいの距離感を保てばいいのかなどがわからず、戸惑いや不安を感じることがあります。私自身初めての参加で、また、ペアの子が言葉が少ない子だったということもあり、どう関わったらいいのかわからず自分の接し方に対して不安がありました」（長尾麻菜）。

「私は障害を持っている子どものはずなのに、そう感じなく接する自分にとまどいを感じていた。今までは目を離さずに近くにいて、ペアの子のために楽しいこと、おもしろそうなこと、楽しんでくれそうなこと、好きなこと……をペア学生の私からアプローチして２人の距離も近い状態であった。しかし、そのときはほとんどこっちからのアプローチではなく、その子が行きたい所、したいことを自分でしっかり見つけてきて遊ぶし、兄弟の子どもと一緒に遊んだりし、２人の距離は前までとは違いずっと離れていた。このペアなのに２人の距離が離れているという感覚にすごく戸惑った。『ペアなのに少し離れた感じで見ていていいのか？』……と」（土田恵久）。

「にこにこで初めて子どもに会うときは、緊張して笑顔がなくなってしまいます」（江里口紗矢）、「子どもの声に対してしっかりとした受け答えができずにいた。そのために子どもを不安にさせてしまったのではないかと感じる」（細田有希）、「少ない障害児ボランティア経験から障害児に対して思うこと、それは反応がないということでした。どんなことをしてもそれに対

するレスポンスがなければ何をやっていても寂しい気持ちになってしまう。そんな風に感じていました。実際に子どもたちと活動していてもその感覚は変わりませんでした。自分の問いかけに対して答えてくれるわけでも、よろこんでくれるわけでもない。どんどんむなしい気持ちになっていきます」(春原圭佑)。

2．子どもたちと過ごす中で変わってきたこと、わかったこと

このように活動の初めの頃や、初めて子どもたちに会ったときにはそれぞれが不安や戸惑い、疑問を感じていました。しかし、活動をしていく中で、子どもたちのことが少しずつわかってくると同時に、信頼関係ができあがっていく様子もありました。

「戸惑いとは反対に、多くの同じ世代や学生と一緒になって遊ぶことに必要性も感じていた。多くの人と関わらなければ、人との距離関係もつかみとりにくい。そして実際に遊んで必死にビーチボールを追いかけたり、友達の後を追いかけたりして、とても楽しそうに笑っていた。このようにして他の子どもや学生と一緒に遊ぶことが今この子にとって一番いいのだと感じた。この経験をしたことで、その子その子によって必要な関わり方が違う、自分の得意な関わり方、いつもしている関わり方ばかりではいけないときもあると学んだ。必要なのはその子にとってためになる関わり方をすること。この違いを言葉で言うだけではなく、自分で感じられたことは、私の意識が変わる手助けをしてくれた。子どもの心や子どもとの関係は簡単にはいかず、とても深い。これからは、これらが少しでも分かるようなきっかけを見つけられたらと思う。そのためには私自身も多くの人と関わりを持っていけたらと思う」(土田恵久)。

2．1　子どもたちの反応

「子どもたちはとても敏感です。私たちにとってはほんの些細なことかもしれませんが、彼らにとっては、とても気になるということがあります。子どもによっては、ある特定のこだわりを持っていたり、自分の考えているようにいかないと機嫌を損ねてしまったりすることもあります。また、私たちの空気も敏感に感じ取ります。私たちが楽しんでいれば彼らも楽しい気分を味わいます。反対に私たちがつまらなそうにしていたら彼らをいやな気分にさせてしまうでしょう。このように子どもたちは敏感に様々なことを感じ取っています。また、子どもたちの反応はとても正直です。たとえ自分で自分を表現することが難しい子どもであっても、何らかの反応をしているのです。その反応は小さくて見落としてしまうくらいのものもあります。しかし、確実に彼らは刺激に対して反応しています」(長田翔太)。

「水遊びをしている場面で最初は、本当に楽しんでいるのだろうか？本当は嫌なんじゃないか？と疑問に感じました。顔に水がかかるようだし、あげたほうがいいのだろうかとも感じましたが、保護者さんからはすごく楽しんでるみたいといわれました。そのようにいわれたのでしばらく見ていると、だんだんとその子が笑顔になっていくのを感じました。最初はなれないものに緊張していたのかもしれません。またしばらくすると、唇の色を見て、子どもをプールからあげて体をあたためたり、あたたまったらまたプールにはいって泳いだりしていました。このようなできごとから、今まで自分は子どもたちの反応を一面的にしか見ていなかったということに気づかされました。わかりづらいですが、障害児の反応は確実に存在し、私がそれに気付けていないのだということがわかりました」(春原圭佑)。

「私たちが子どもたちの小さなしぐさに対しても敏感にならなくてはならないのです。私たちが些細な子どもの変化に対しても敏感だったら、彼らのいろいろなことに気づくことが出来

るでしょう。もしかしたらそのことがきっかけで子どもが心を開いてくれるかもしれません」(長田翔太)。

「活動中、上手なコミュニケーションのとり方を見つけることができず、一人遊びを見守ることしかできませんでした。しかし、遊んでいくうちにこちらが自然体で接すればペアの子もそれに応えてくれるのではないかと思うようになり、表情や行動から気持ちを推測して自分なりに接してみました」(長尾麻菜)。

「子どもたちは、興味を持ったことに対して一生懸命になります。秋の木の実を探し始めると、バーベキューのことやおなかがすいたことも忘れ、いつまでも歩き回り探していました。将来、どのような形であれ、子どもたちと関わるときには子どもたちのそういった感覚を大切にしなければならないと思いました」(赤羽雄仁)。

「12 月の活動では、クリスマスシーズンということもあり、サンドイッチやケーキ等を用意し、遊んだあと一緒に食べた。そのなかで、ある男の子が「おいしい？」と聞かれると、満面の笑顔で右頬をたたいていた。その笑顔がわたしは嬉しくて、何度も写真をとったり、「おいしい？」と聞いていた。「おいしい？」と尋ねる学生やお母さんの表情もとても明るく、幸せな気持ちで心が満たされていくような気分になった」(落合静香)。

「子どもたちが今何を望み、何を求めているのか、その欲求を読み取り、自分たちは何をすべきかを考え、行動する。時には、子どもたちが求めているものとはずれた行動をとってしまい、子どもたちがパニックになってしまうこともあった。しかし、パニックを起こしてしまった子に対して、身体を張って子どもと向き合ったり、落ち着くまでじっととなりによりそっていたりと状況に応じて、臨機応変に対応していた学生ばかりであった。子どもたちがパニックになってしまって、学生自身も不安や動揺を抱えつつも、自分が今、するべきこと、とるべき行動をとっていた。ただ呆然と立ちすくんでいるだけでは何にもできない。ペアの子、一人ひとりの性格やこだわりを事前に確認し、どう対応していくべきかを把握しておく。にこにこは他プラザ以上に、子どもたち一人ひとりのことをどんな子であるか把握しておく。その上で、自分たちはどうするべきかを考える」(落合静香)。

「活動中に『あ、この子はこんなこともできるのか』と驚くことが何度もあった。そのような中で私は、自分が子どもたちに対して勘違いしていたことに、２年目になってやっと気づいたのである。それは、子どもたちは私が考えている以上に周りをよく見ているということである。そして、私が思っている以上に、子どもたちは自分で色々と考えているし、色んなことができるということである。この『できる』というのは、子どもたちが自分のペースでその子なりにできるという意味である。私は、子どもたちの限界を自分で勝手に決め付けてしまっていたことを反省した。障害をもつ子どもと接するとき、どうしてもできないことのほうに目が向いてしまうものである。できないことをどうすればできるだろうかとか、どこまでならできるだろうかとかいうふうに考えていくことのほうが多い。しかし、そうではなく、『この子はこんなことができる』というように、初めからできることを強調して、それをもっとうまくできるように、伸ばしてあげられるようにと考えてその子と接するということが必要なのだということに気づいた。今後はもっと子どものできることを積極的に見つけていこうと思う。そして、『ボクはこんなことができるんだよ』という子どもの気持ちを大切にし、『すごいね！』と褒めてあげたい」(上田綾乃)。

２．２　子どもたちと寄り添うこと

子どもたちの様子がみえてくると、さらに子どもたちの立場になって考えることの大切さも学びました。「子どもの気持ちがわからず、パニックにさせてしまったり、いやな気分にさせてしまったりしたこともありました。にこにこでは、子どもとの活動の楽しさ、子どものことを知れる素晴らしさ・面白さと同時に子どもの気持ちになって考えることの難しさも学びました」(小平奈央)。

「にこにこの活動をとおして、コミュニケーションを図る上で笑顔の重要性と、一人ひとりの子の特徴等について知り、その子がどんな子であるかを理解しておくことの大切さをあらためて感じた。子どもたちは一人ひとり求めているものが違う。すべてのことに対応していくことは無理なことかもしれないが、多様な対応をしていくためにも、その子がどんな子であるのか理解しておくことからすべてが始まるのだと思う。そして、そこから笑顔など表情等を使って、自分たちの思いを学生も子どもたちも伝えていくのであろう。そこには、学生が子どもたちと向き合って、一人の子を見つめ、理解しようとする真剣な姿が見られる」(落合静香)。

２．３　子どもたちとともに楽しむ

また、子どもたちと寄り添い、共に過ごすことを学生自身も心から楽しんでいる姿が見られるようになりました。

「子どもとペアで行動することが多かったのですが、子どもによって反応も違います。話しかけても答えてくれない子もいれば、子どもの方から話しかけてくれる子もいます。私は、どのようなときも話しかけるようにしました。話しかけていることで、少しずつ子どもたちとの距離が縮むような気がします。自分から子どもたちに寄り添うことが大事だなと思いました」(江里口紗矢)、「子どもと活動するときは、口だけではなく自分が楽しむことで子どもたちにも楽しさが伝わり、一緒に楽しみながら活動する事ができると思う」(細田有希)、「今まで子どもたちと遊ぶといった活動はいろいろとしてきたけれど、いつもはじめはうまく接することができなくて不安のようなものがあります。一緒にたのしむのだという気持ちを持って自然体でいることが大切だと学びました」(長尾麻菜)。

このように、子どもたちと過ごす時間を重ねていくことによって、子どもたちと一緒に活動することが、本当に楽しいという気持ちがうまれてきました。活動中、子どもたちや学生の表情をたくさん見てきました。その中には、お互いが心から楽しんでいるのが感じられる笑顔が本当にたくさんありました。

「「にこにこクラブ」に参加して一番思ったのは『子どもと関わるって楽しい、子どものことを知るって面白い』ということです。「にこにこクラブ」では毎回子どもたちと一対一でペアを組んで活動するので、半日という短い時間でも子どもとじっくり関わることができます。じっくり関わると、その子が何を見て笑うのか、どんな時に楽しそうにするのか、どうしたらもっと仲良くなれるのかなど、少しずつ知ることができます。活動の中で、一緒に笑えたり、その子が楽しそうにしている様子を見ることができたりすると、本当にうれしくて子どもたちのことをもっと知りたいと思い、次の活動が楽しみになりました」(小平奈央)。

子どもたち、保護者の方々、学生、このにこにこクラブに参加した人みんなが「楽しい」と感じることができるということが、一番大切だと思います。コミュニケーションにおいて、最も重要なのは、お互いの楽しいという気持ちだと思います。

そのような「にこにこクラブ」での活動においては、障害児だけでなく、その保護者の方々

や兄弟の子どもたちとの関わりもあります。そういったかかわりの中から多くを学んでいる学生の姿がありました。

２．４　兄弟姉妹、保護者の方々から学んだこと

「私はにこにこクラブの活動に参加させてもらい、日常では体験できないことをいくつも学びました。私が活動を通して最も印象に残っているのは障害を持つ子どもとその兄弟の関わりです。にこにこ以外の活動でも兄弟の子どもたちと接する機会はありましたが、これほど近くで関わることはありませんでした。私がペアの子と接するとき、困ったことがあれば兄弟の子が、支援の手立てを教えてくれる場面が多かったように思います。また、兄弟の子どもたちに対する親御さんの愛情のかけ方にも独特なものがあるように思います。愛情のかけ方は非常に難しいということもお聞きしました」（北沢俊樹）。

「私がにこにこクラブの活動を通して学んだことの中に、保護者の気持ちがあります。今まで私は子どもの気持ちを捉えたい、子どもが悩んでいること、苦しいことを受け止めてあげたいと考えていました。しかし、障害を抱えている保護者の気持ちを考えると、私がもっと受け止めてあげなければならないのは両親の複雑な思いなのではと考えを改めるようになりました。例えば、お店に入って落ち着かず開けてはいけないお店の窓を触ったり、開けようとしたりしたためにお店の人から「もう出て行って下さい。うちも迷惑ですから」というキツイ一言が私たちに飛びました。それを聞いて、私は嫌な思いをしました。「好きで開けているわけじゃない、障害があるから仕方ないのに、なぜそのようなことを平気で言えるのだろうか」と言いたかったです。私よりもきっとお母さんの方が嫌だったのではないでしょうか。そのような気持ちをお母さんはずっと今まで抱えてきたのだろう、そしてこれからも抱えていくのだろうと考えると胸が痛み、その痛みを少しでも理解してあげられることができたらどんなに良いだろうかと思いました。それは、障害児を持つ母親だけでなく健常児の母親も事例は違っても似た経験をされたことがある方は多いと思います。ほんの少しの時間ではありましたが、子どもと過ごしその保護者の気持ちを考えることができただけでも私にとっては意義のある活動になったと思います」（大家恵梨子）。

「出会い・笑顔・つながり」をスローガンに一年間活動を行ってきました。多くの子どもたちとの出会いがありました。時にはうまくいかないこともありました。しかし、そんな経験も乗り越えて、いろいろな人たちのこころがつながっていきました。子どもたち、保護者の方々、学生、みんなの笑顔にあふれた一年間だったのではないかと思います。また、いま、その一年間参加してくれた学生の振り返りを読んでみて、本当に学びの多い活動になったとも感じました。子どもたちや保護者の方々は、私たちにとてもたくさんのことを教えてくれました。

すべての人にとって、「にこにこクラブ」が楽しいもので、いろいろな人たちの出会いが生まれる場だったらとてもすばらしいと思います。

３．今後の課題

「子どもとだけではなく、親御さんとも接してみたいと思いました。子どもの気持ちだけではなく、親御さんの気持ちにも答えられるようにしたいと思いました。安全な活動をするために、子どもに会う前から、どのような子なのか聞いておくことをもっとしないといけないなと思いました。活動の反省シートに書いた質問などの返事を聞くことができたら良いなと思いました。これからも多くの人の笑顔が見られるように、楽しい活動ができたら良いなと思います。

そのために、全体を把握してサポートしてくれている人たちと共に、自分も成長できたらいいなと思いました」(江里口紗矢)。

「自分の中の課題としては、もっと子どもの気持ちになって考えるようにしていくことが課題となりました。活動になかなか入って来られない子どもたちに対し、こちらの考えで対応していくのではなく、まずはその子がどんな風に感じたり思ったりしていくのかを考えて関わっていくことができるようにしていきたいです。活動全体では、楽しい活動だったので、来年度もより子どもたち、保護者の方々、そして学生がともに楽しんでいける活動にしていってほしいです」(小平奈央)。

「活動の幅をもう少し広げられたらと思います。具体的に言うと障害児専攻以外にももっと宣伝してこの活動に参加してもらってもよいのではないかということです。この活動を通して障害の分野に少しでも興味を持ってもらえるようにしていけたらいいのではないでしょうか。また、活動内容についてですが、とても充実していていいなと思いました。今後も続けていってほしいです」(北沢俊樹)。

「今後は障害児を持ち、悩みを抱えている保護者や健常児であっても壮絶な悩みや苦労している方々の意見を聞く機会を増やしていくことができたら良いと思いました。私ができることは気持ちを受け止め、共感してあげられることだけなので、そのことがごく当たり前にできるような人間になりたいと思います。表面的な部分でできることは多々ありますが、その裏にある内面的な問題を見つめ手助けしてあげたいと思います」(大家恵梨子)。

「遊具で遊んでいるときなど、先に並んでいる子どもの保護者の方ともっとコミュニケーションをして順番を正確に把握しておけばよかったと感じる。自分のペアの子どもだけでなく、周りにいる人とのコミュニケーションも大切にしたい」(細田有希)。

「今年度、私は副プラザ長として活動計画を立てる立場にあった。活動内容を考える中で、私はどうしても、「子どもたちにはここまではできないよね」と考えてしまうことが多かった。「こんなことできたら面白そう」、「こういうものもやってみたい」という案があっても、できなかったときのことを不安がって諦めることが多かった。しかし、「にこにこクラブ」の活動目的は「ふだん家族だけではできないようなことを学生が一緒になって活動することで、子どもも親も学生もにこにこ笑顔になる」である。この目的を振り返ってみると、もっとチャレンジしてもよかったのではないかと思う。前年度と同じ活動であっても、何かそこに1つ新たなものを付け加えていくということもできたと思う。子どもたちも日々成長しているのだから、子どもたちの成長に合わせて「にこにこクラブ」の活動も幅広くしていくことが必要であっただろう。そうすることで、「にこにこクラブ」という活動が、子どもたちの成長を感じる場にもなっていくだろう。また、子どもができることを発揮するような活動があれば、子どもの笑顔がもっと見られるのではないかと思う。そのためにも、今後は「こんなことがしてみたい」という保護者さんの願いも十分に取り入れ、子どもがどんなことができるのかということをしっかりと見つめ、子どもたちが「やってみる面白さ」や「できる喜び」を感じられる活動になっていけばいいと思う。そうすれば、もっともっとみんなの素敵な笑顔が見られる活動になっていくはずである」(上田綾乃)。

4．プラザ長として

私は、一年間「にこにこクラブ」の活動の全体を把握する立場で見てきました。ペアを組む

のではなく、その様子を見ている中で学んだことは本当にたくさんありました。

その中で私が最も強く感じたのは、子どもたちとペア学生の絆です。子どもたちと学生が初めて会ったときは不安や戸惑いがあり、お互いに緊張している様子がありました。しかし、一緒に過ごす時間が経てば経つほどその関係は変化していきます。最初のころは、ペア学生が一方的に子どもたちの後を追っているように感じることもありましたが、それは違いました。子どもたちのほうもペア学生のことを強く意識しています。目を合わせたり会話をしたりしなくても、絆はできあがっていると感じます。朝、活動に来てすぐペア学生の近くに走って行ったり、後ろを振り返ってペア学生が近くにいるか確認しながら遊んだりしている子どもたちの姿を見ているとそう思います。子どもたちとペア学生のそんな姿を見ていて、私は本当に感動させられました。1対1で子どもたちと絆をつくり上げていくことはとてもすばらしいことだと改めて感じました。

一年間、活動を行ってきて、一番感じているのは感謝の気持ちです。これまで「にこにこクラブ」に関わってきてくださった皆さんのおかげでたくさんの楽しそうな表情をたくさん見ることができました。それは本当にすばらしいことだと思います。

毎回の活動の中で、子どもたちからは素敵な笑顔をたくさんもらい、保護者の方々からはいろいろな新しいことを教えていただきました。これは、私にとって本当に大きな財産です。そしてこのことは、今まで参加してくれた学生の皆さんにとっても同じだと思います。

一年間を振り返ると、反省点や今後の課題はたくさんあると感じています。子どもたちの情報をもっと多くの人が共有したり、学生の側からの反省を次の活動へもっと生かしたりすることがあまりできなかったように思います。また、全体として把握することに集中しすぎて、子どもたち一人ひとり、ペア一組ずつにあまりよいサポートができませんでした。子どもたち全員が安全に、楽しく活動できる場を提供するということをまだまだこれからも勉強していかなければならないと感じました。今後は、学生の幅も広げていき、もっとたくさんの人たちが嬉しいにこにこ笑顔になって心がつながる、そんな活動にしていけたらと思います。一年間、「にこにこクラブ」を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。(青木みなみ)

◇保護者からの評価

笑顔で接して頂いて感謝しています

保護者代表　**西澤真由美**

今年度も内容の濃いにこにこの活動にしていただき学生の皆さんに感謝しています。ありがとうございました。春の城山公園のおでかけや茶臼山動物園はお天気にも恵まれ、子どもたちのたのしそうに走る姿が見られました。秋のバーベキューもなかなか家族だけで行こうと思っても子どもひとりに手がかかってしまい我が家では計画倒れ!でもそんな活動も子どもとマンツーマンで関わってもらえるので準備などもスムースにでき子どもたちも学生さんも保護者も美味しく食べて楽しい1日を過ごす事ができたと思います。

参加している子どもたちのほとんどが関わり方がわからなかったり予想のつかない行動を取ったりで学生さんたちも大変だったと思いますが毎回笑顔で接して頂いて感謝しています。来年度も子どもたちの笑顔の為に楽しい活動を学生さんたちと一緒に過ごせていけたらと思います。一年間ありがとうございました。

青木村えがおクラブ（3年目）

プラザ長　加藤　博美（教育実践科学専攻3年）
副プラザ長　青木　智博（教育実践科学専攻3年）
石井絵理子（社会科学教育専攻3年）
須貝　和之（社会科学教育専攻3年）
土田　恵久（社会科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

加藤　博美（実3）	青木　智博（実3）	石井絵理子（社3）	須貝　和之（社3）
土田　恵久（社3）	唐木　佑輔（実4）	清水　亜美（実4）	花形美奈子（実4）
川辺　裕作（実4）	本山　裕子（社4）	山田　桃子（実4）	仲吉　咲香（心4）
平林　照世（言4）	稲玉　恵美（言4）	永塚　達也（障4）	畑　さやか（野4）
春原　圭佑（実3）	上田　綾乃（実3）	五味　紗織（実3）	常盤　千明（実3）
福岡　恵美（実3）	田村　将太（実3）	齋藤　有希（言3）	布山奈津美（言3）
斉藤　健二（言3）	田村　弘樹（言3）	野口　洋憲（社3）	三枝　裕紀（社3）
城井　希人（社3）	若林　史也（社3）	肥留間淳也（理3）	寺島　薫（玉3）
高池　亮輔（保2）	永谷　嘉浩（実2）	宮川はるな（言2）	小西　舞（実2）
一條　まな（言2）	金子　寿予（実2）	原　耕平（理2）	田村　淳樹（美2）

○参加者数　子ども約50人

○連携団体　青木村教育委員会

○プラザの概要

青木村えがおクラブは、青木村教育委員会の方々のご協力をいただいて青木村で活動をしている。活動は、教育委員会が主催する事業に加わらせていただいたり、えがおクラブとして活動を提案してやらせていただいたりしている。活動に参加する子どもは毎回異なり、行きたい活動に子どもたちが応募して参加するという形式である。青木村は教育に力を入れており、「地域で子どもを育てる」をキャッチフレーズに、非常に魅力的な事業がたくさんある。その中で私たちも仲間に入れていただき、素晴らしい経験をたくさんさせていただいている。

○一年間の活動

5月27日～6月2日	あおきっ子通学合宿	10月12日～14日	あおきっ子村内ホームスティ
7月20日	通学合宿報告会	11月3日～4日	青木・松本ウォーク
7月21日	「本ってほんとにブックリするね！」	11月17日	青木村産業祭（木の実クラフト・射的）
8月7日～12日	あおきっ子川遊びキャンプ	3月11日～16日	冬の大三角

◇実践から得た「臨床の知」

地域の人たちによる地域づくり

加藤　博美（教育実践科学専攻３年）
土田　恵久（社会科学教育専攻３年）
須貝　和之（社会科学教育専攻３年）
石井絵理子（社会科学教育専攻３年）
青木　智博（教育実践科学専攻３年）

１年間の青木村えがおクラブでの活動を通して、参加した私たちは青木村という地域の素晴らしさを実感した。青木村の教育委員会は小岩井教育長先生をはじめとして、村の教育に非常に熱心である。小岩井教育長先生は、「村で子どもを育てる」、「子は村の宝」とおっしゃる。そのような先生のお考えがあってこそ、様々な活動が学生と子どものみならず、地域の方々の協力も加えられたものになったのである。もちろん、私たちえがおクラブが関わった活動のみならず、青木村では地域の大人と子どもが一緒になっての行事や活動が非常に大切にされている。青木村の地域づくりの実践は、とても人間らしく温かい印象を受けた。そして私たちはその温かな地域づくりを核に今回実践記録をまとめたいと考えた。青木村の子どもを取り巻く地域づくりに触れることのできた私たちの視点で、地域での学びの大切さを思考しながら、将来子どもを育てる者としての主体的な地域づくりをテーマに、記していきたい。

１．地域の中での学生の学び

私たち学生は、青木村えがおクラブとして青木村での行事や活動に参加させていただいたり、自ら企画を立てて活動させていただいたりした。その中で私たちはたくさんのことを学んだ。子どもたちと関わることで、子どもについて見えていなかったことが見えた学生がいる。

「……「どんな風に接したらいいのか」と、変に身構えている自分がいました。私はある日、ミーティング常連のわんぱく小僧たちがいるクラスの学習担当になりました。その子は憎らしいことを言ってきます。最初、私の心は身構えていました。でも、その子は生意気だったけど、友達が勉強とかで困っていると自分の勉強を差し置いて、友達を助けるのです。ドリルを忘れた子には、すぐに自分のドリルを貸してあげているのです。宿題で自分の名前をローマ字にできないで困っている友達に自分の宿題を差し置いて、スペルを教えてあげているのです。「この子は、こんなにすてきなところがあるのか！！」と思ったら、その子に対して身構える気持ちはどこかに吹き飛んでしまいました。どんなにわんぱく小僧でも、憎らしいことを言う子でも、絶対よいところや素敵な所はあります。それをたくさん見つけられる、心や感性をいつも持っていたいと思いました。その人の良いところをたくさん発見した分だけ、その人のことが大事に思えるような気がします。自分が身構えてしまったら、見えるものも見えなくなってしまうと思います。身構えずに、子どもを優しく見守る目をもっともっと育てていきたいと思いました」（本山裕子）、「私の班の子が一緒に夕食を作っているときに、たまねぎが目にしみてなかなか作業がすすまないという場面がありました。ちょっと切っては涙でたまねぎを直視できなくなってしまいます。なかなか思い通りに行かない作業にその子は少し元気をなくしたかのように見えました。しかしここでその子が「おかあさんはこれ毎日やってるんだね」とぼそっとつぶやきました。その言葉を聞いたとき、私はなんだか自分がそのことばから学んだよ

うな気がしました。親とはなれ、普段しない料理をする中から、その子は親のすごさを自分から理解したのです。こんな風に子どもが感じる事ができるのか。そこに感動を覚えました」(春原圭佑)、「平日に自分が子どもの帰りを待っているときには、「お母さんたちはこんな気持ちで待ってるんだな」と思った。そして子どもの宿題を見ていても、その子が基本の所とか分かっていなくて困っているのを見ると、「学校の先生しっかりみてくれてるのかしら」と思ってしまう。そう思ったときに、保護者さんが学校にクレームをつける気持ちが少しわかった気がした」(平林照世)。

以上の３人の記録は、５月に行われた「あおきっ子通学合宿」での経験をもとにしたものである。１週間子どもたちが親元を離れて文化会館で学生と一緒に協働作業をするという活動である。子どもたちはその間、朝は朝食の配膳・掃除から始まり、いつもどおり学校へ行き、夜は夕食作りをしたりみんなでお風呂に入ったりして過ごす。家族のありがたみや友達の大切さに気がついたり、子どもたちが大きく成長する合宿である。そのような活動なだけに、関わった学生としても得るものが大きかったに違いない。その他の活動でもこのように述べている学生がいる。

「青木村の魅力は、なんといっても「子どもたちがのびのびしている」ということだと思います！今年度、青木村の活動に参加してみて、子どもたちの、やりたいことを見つけてどんどん取り組んでいく姿には、驚きと同時にうらやむ気持ちすら生まれてきました」(宮川はるな)。

子どもたちと関わることで教えられたことや、得たものもあった。「子どもたちを見ていると、楽しそうに毎日を過ごしている様子などから、一日一日を大切に生きることを教えられているようにも思いました」(須貝和之)、「私は、青木村の子どもたちに人間を鍛えられています。私は青木村で、子どもに詰まった果てしない未来の偉大さに気付きました。そんな未来の詰まった子どもたちと向き合う事は、時に苦しく、しかしとても幸せな事です」(仲吉咲香)。

将来子どもと関わるであろう私たち教育学部の学生が、子どもたちと関わる経験を積むことの大切さと、そのような実践経験から得る学びを目的とした「YOU 遊世間」の活動の有用性を実感した。また、村という地域の中に入ってそこで色々な人たちと活動することで様々な価値観を得たり、新たな学びをした学生もいる。「合宿では子どもと食改の方との関わり、「青木―松本ウォーク」ではいろいろな経験を積んできた方たちと接することで、活動とは別にいろいろな知識が身に付けられました」(高池亮輔)、「教師を目指している私達教育学部の学生は、それぞれに理想をもって活動しています。しかしその理想は限られた自分の経験をもとにしているために独善的になりがちです。青木村の活動に参加すると子どもだけでなく多くの保護者の方とお話しする機会ができます。その中ではすごく学生に対して好意的である方もいれば必ずしもそうでないのだなと感じる方もおられます。また、お話しする中で具体的にどんな考えで活動を企画しているのかといったことをお聞きすることもあります。そのような経験の中で私達学生は意識せずとも影響を受け、自分の考えを相対化するきっかけを得ているのだと思います」(肥留間淳也)、「自分一人で何かに取り組んだときも、もちろん懸命に取り組めばそれ相応の学びは得られたかと思われますが、仲間たちと取り組めば、自分一人では到底気付けなかったり辿り着けなかったであろう結論や経験を得ることが出来ました。さらに、教育委員会の方々はもとより、様々な場面でお世話になった青木村の地域の方々からは、その活動を通して、単にその時扱っているものに対する学びだけでなく、その方々が長い人生経験の中で身に付けてきた、人としての学び、厚みを沢山教えていただくことができました」(清水亜美)。

地域全体で子どもを育てる環境がある青木村であるからこそ、その中で私たちは子ども以外にも多様な他者と関わることができ、その人たちから様々な影響を受けることができた。青木村での活動を通して、私たちは子どもたちの素の姿から学び、教えられた。また、保護者の方々、地域の方々、教育委員会の方々や他大学の学生と関わることができ、とても厚みのある経験をすることができた。

2．地域の中での人との関わりの大切さ

子どもを取り巻く地域づくりには必ずしも学生が関わっているわけではない。青木村にはお父さん・お母さん世代もおじいちゃん・おばあちゃん世代の人たちもみんなで子どもを育てようという理念がある。私たちはそのような地域づくりの大切さを学んだ。『地域にはいろいろな人がいます。職業一つとっても様々です。それぞれの人が異なる経験を積んできていろいろな考え方をしています。複数の考え方に触れる事で物事の捉え方がたくさんあることを知ることができるし、それらの異なる考え方はどういった背景をもとにしているのかということを考えていく客観的な見方を身に付けていくための大切な経験となると思います」（肥留間淳也）、「子どもたちも学生もお母さんお父さん、おっちゃんたちもみんなが同じ場を共有していることに意味があるのだと思います。たとえその活動を通して全く話さなかったとしても…。このような小さい小さい共有の場の積み重ねこそが、青木村の目指す社会力の育成につながるのではないかと感じます。今は目に見える変化はないかもしれないけれど、将来子どもたちの視界は全く違うものになる、そんな気がします。それは学生にとっても同じだと思います」（石井絵理子）。

私たち学生が青木村の人たちとお話したり一緒に活動をしたりした中で多様な価値観や考え方を学んだり、その人自身の経験を聞くことができたように、子どもたちも育っていく過程で様々な人に影響を受けながら成長していける可能性が、地域にはある。「地域は子どもたちの最も身近な規範である」（田村将太）ので、子どもたちにとってより学びやすい、成長しやすい場なのである。また、そのような多様な他者と関わる機会の多い地域づくりは、子どものコミュニケーション能力をも育成する。「私自身「青木一松本ウォーク」や通学合宿などに参加して人と交流したときは緊張した。特に「青木一松本ウォーク」で知らない大人の人に話かけるのはとても勇気を出した。【まず、近づく。そして、その人の名前を立ち聞きする。そして、その名を心の中で呼ぶ練習をし、声をかける話題を探す。見つけると話題を胸に閉まったまま自然に話しかけられるタイミングを探す。その間も心の中では話しかける練習。】これらを経て話しかけることができたときの達成感と満足感は他ではなかなか味わえないだろう。この人間らしい感情こそが、人との交流の意義、醍醐味の一つなのだろう」（土田恵久）。

「地域で子どもを育てる」、多様な他者が子どもを取り巻く環境であれば、土田君の言うように、人間らしい感情が子どもの他者とのコミュニケーションをより幅広く成長させていくのであろう。多様な他者と関わることの大切さ、そしてそれは「地域で子どもを育てる教育」に表れるということが言える。

3．地域づくり

それでは、このような温かい地域づくりはどのように構築されているのであろうか。誰が支えていっているのであろうか。私たち参加した学生は、青木村を支えている多くの人たちを見

ることができた。「大人から子どもまで、様々な年代の人たちが青木村という地域を生き生きと形成している姿が見て取れました」(若林史也)。これは、青木村の産業祭に参加したときの感想である。産業祭や村内運動会などで見かけた地域の人たちは本当に生き生きとしていた。そのような地域の人たちの子どもたちを見る目はとても温かい。「子どもたちがそのようにのびのびと活動できるのは、やはり子どもたちの保護者や、また、「青木村」という地域全体の支えがあってこそだと思います。青木村は、大人が子どもを信じている(=子どもの自主性に任せている)からこそ、子どもたちが活動に対してあれほど積極的に取り組むことができるのだと感じました。青木村の豊かな自然もまた、子どもたちの心を豊かにしていると思います」(宮川はるな)、「子どもたちが大好きで集まった人たちに対して、子どもたちもその人たちが大好きということです」(原耕平)、「小岩井教育長先生が、子ども一人ひとりの後ろには大勢の願いがあるとおっしゃるが、それを強く感じた。そして子ども自身も、どんなに強がっていても、結局は家族が大好きだということ。家庭は子どもの安定剤だと思った」(平林照世)。

子どもたちの周りにいる大人が子どもたちを大切に大切に感じている。次の記録は、通学合宿で夜に子どもたちとお風呂に入ったときの話である。「青木村のおじいちゃん達はみんな子ども達のことを気にかけてくれているようで、お風呂に入りながらも「家に帰れなくてさみしくないかい?」「合宿は楽しいかい?」とたくさん話しかけてきてくれた。青木村の教育委員会をはじめとして、お風呂で出会ったおじいちゃんたち、青木村の人達は地域で子どもを育てるという意識が非常に強いように感じる」(春原圭佑)。他人の子に対しても思いやりをもって接する人々がいるのである。私もそのことに、2年連続参加させていただいた「青木っ子村内ホームスティ」で実感することができた。村の子どもと私たち大学生が、村の人のお宅で2泊3日お世話になるという企画である。参加されるお宅の方は、初めて話すような子どもと大学生と食卓を共にし、その家々に合った生活をする。参加した子どもと学生は、新たな村の人との出会いに喜び、楽しい思い出とつながりを作って3日間を終える。受け入れて下さったご家庭の方々も、私たちと子どもとの出会いを喜び、そこにつながりが生まれる。青木村の人たちの温かさを感じた3日間であった。このような試みは実に素晴らしいが、家々の事情もあろうので、なかなか受け入れて下さるご家庭は少ないものである。青木村教育委員会の方々が企画をして下さったから、参加した人たち同士が良い出会いができ、良い経験をすることができたのであった。教育委員会の皆さんに日頃ご協力していただいているえがおクラブの学生としての視点からも、子どもを取り巻く地域づくりを考える視点からも、小岩井教育長先生をはじめとする青木村教育委員会の方々の働きが、村の子ども、そして子どもを取り巻く大人たちに大きく影響しているのだと考える。「地域を変えるには、役所の働きかけなどの公的なムーブメントの役割は大きい」(土田恵久)。公的な機関の働きかけはやはり信頼感が強い。その分影響力もある。公的機関が動けば、多くの人が動く。青木村教育委員会は、地域で子どもを育てる働きかけの担い手として、多くの機会を作り出している。そしてそこに人が集まる。人が集まれば、地域で子どもを育てる場が生まれる。また、副次的に新たな地域の人々とのつながりも生まれる。「人が集まれば何らかの関係が生まれ、築かれていく。それが回を重ねれば深くなる。例えば、あおきっこ合宿の説明会や報告会にはたくさんの保護者さんが集まってくれた。もちろん青木村のことだから多くの保護者さんは知り合いなのだろう。しかし、今まで仕事やなんやりで交流できていなかった保護者さんもいるだろう。そんな人たちが説明会の席で、または報告会の班ごとの話し合いの場で「子どもの合宿後の様子」や「合宿中の想い」の話を共

有することで、つながる。合宿や子どもを通して保護者さんのコミュニティーが広がり、その後の暮らしの中でのコミュニティーの広がりをみせる。これは、子どもにも同じで、よく「あの子合宿来てた」とか「川遊びキャンプ来てた」とかいう表現を聞く。こういうコミュニティーの広がりや活気から地域というものは生まれて行くのではないか」(土田恵久)。人が集まる機会があれば、おのずとそこにコミュニティーができ、人と人とのつながりが成立する。子どもが核となる機会を通じて大人が集まれば、そこにできたつながりの中には自然と子どもが存在する。このつながりが広まって、「地域で子どもを育てる」ことができるのである。青木村の住民ではない私たち学生が、青木村で「地域で子どもを育てる」仲間に加わらせていただくことができたことは、本当にありがたいことだと思う。しかしその際に気をつけておきたいことがある。以下は、夏に行った「川遊びキャンプ」に参加した学生の記録である。

「この「川遊びキャンプ」は地域とは離れた活動であったのではないかと思う。それはやはりほとんどが学生と子どもとの関わりで成り立っていたからである。……しかし、地域の役割を学生という存在が満足ではないにしろ補う事ができるのではと思う。それゆえにこのキャンプでは地域の入ってくる余地が必然的に少なかったのではないのか、と感じる。しかし学生はほとんどがキャンプの知識がない。これでは私が前述に挙げた条件を満たしていない。これではいけないと感じた。私がこのキャンプで学んだことは教材研究の大切さだ。学生が規範になれない場合はどうするのか。学生が学べばいいのだ。その方法を。それがまた学生の学びになるのではないかと思う」(田村将太)、「……私が教師になった時に、そういった地域の日常を知ることは大切だと思います。学校内から地域を見ているだけではなくて、お祭りの様な学校外の行事に参加していくことで地域の新しい一面を知り、子ども理解、ひいては地域の理解をしていく手がかりにしたいと感じました」(川辺裕作)。私たちが地域での教育に関わらせていただくときに、中途半端な気持ちではいけない。また、私たちが社会の一員になって、一人の大人として地域教育に関わるときにも、子どもの手本になるような姿勢でいたいものである。ましてや新たな地域で教師になったとしたら、その地域内での子どもの姿を見ようとすることは、子どもと地域、両方の理解のために重要なことであるのだ。子どもを育てるには責任を持たなくてはいけない。地域で子どもを育てるのであれば、地域は責任をしっかりもって子どもを育てるべきである。そうすれば、子どもは安心して自分たちの地域で成長していけるのではないか。私たち学生としても、諸地域で責任をもって活動していかなければならない。

「今、やはり社会とまで言わなくても、地域がもっと地域問題を共有すべきだし、地域で生活したら良いなと思うことがあります。そしたら地域で子どもを教育し、地域で社会教育し、地域の文化を作れるし、故郷としての温かさが生まれるじゃないですか。……それが青木村ではできてます。いやできようとしています。おそらく活動に参加している人たちは地域教育(地域づくりの一つ)をしようとしています。そのしようとする気持ちが今は必要です」(青木智博)、「「子は村の宝」「地域で育てる」……この言葉、想いには他人や他人の子という意識はなく、自分と『同じ地域の一員』という考えがにじみ出ている。こういう考えを地域の人たちが持つようになる、そのことを地域つくりというのかもしれない」(土田恵久)。

地域全体で子どもを育てる、地域づくりの大切さを私たちは青木村から学んだ。また、地域を作るのは地域の人たちだということを学んだ。まずはそのような気持ちを地域の人一人ひとりがもつことが、地域づくりの第一歩であり、はたまたそのことに尽きるのである。私たちも社会に出て、教育の仕事に就いても就かなくても、地域を作る一員として、このような姿勢を

大切にしていきたいと思う。

4．感　謝

私たち学生は青木村で様々な活動をさせていただき、その中で多くの人たちの温かさに触れ、青木村の人たちに対して大きな感謝の気持ちを抱いている。また、活動を通して先輩や後輩と関わる中でも感謝の気持ちが生まれた。この感謝の気持ちに、私たちの青木村での学びや成長がにじみ出ていると思い、最後に記録しておきたいと思う。

「〈小岩井教育長先生へ〉教育長は安心感をくれる人。はるか上の存在。それなのに私たちの近くにいてくれて、お酒まで一緒に飲んでくれて、温かい。青木村のことを大変よく思っていることが伝わってくる。

〈上原さんへ〉上原さんは私たちの兄貴的存在。心が許せるというか会いたくなる人。上原さんほど私たちに自分から近づいて来てくれる人はいない。私たちのことを本当に大切に思ってくれていると感じる。

〈4年生の先輩たちへ〉青木をフィールドに活動している先輩はすごい。きっちりしている。感じたのは農業産業祭の日。終わりに近づいた頃。私は車の鍵を上田駅まで取りに行かなければいけないハプニング。取りに飛び出したはいいけど、道が混んでいて遅れる遅れる。電話で片付けをお願いしようとしたら、もうやってくださっている。ちゃんと時間を読んでやってくださっていた。私にはなかなか真似できない所。また、その日の帰りには文化会館にあいさつに寄って帰った。教育委員会はやってない日だったのだが、先輩と相談して行くことに決めた。このあいさつ、礼儀、お酌というのは、私は青木村に来なければなかなか身についていないだろう。青木村に来ていた先輩のきちんとしたあいさつだとか、礼儀の姿を見てたから今私もできているのだろう、そう思う」(土田恵久)。

「青木村の方々は、自分の血縁の子たちのみならず、他の家の子たちにも、さらには私たちよそ者の学生たちにさえも、惜しみ無くその優しさと厳しさをぶつけてくださって、青木村一丸となって、これからの若い人たちを育てようという勢いを感じることができました。それはとてもありがたいことで、のびのびと活動でき、思う存分貪欲に挑戦をし、そこから色んな経験と学びを得ることができました。これをもって青木村の皆さまへの感謝に代えるとともに、これからもそういった機会を与えてもらえるよう、信頼を裏切らないような行いもこころがけていきたいと思います」(清水亜美)。

私たちは青木村の人たちから本当にたくさんのものを学びました。そしてたくさんの温かい気持ちをいただきました。ここでつながった「ご縁」を大切に、私たちはこれからも青木村で関わった人たちのことや思い出を忘れず、一人ひとりの道を歩んでいきたいと思います。青木村えがおクラブに関わっていただいた大勢の皆様、1年間ありがとうございました。

◇青木村教育委員会からの評価

「青木村えがおクラブ」の青木村での活動の意義

青木村教育委員会事務局　**上原博信**

早いものでえがおクラブのみなさんと出会ってから三年が経とうとしています。振り返ってみると改めてみなさんが青木村で活動してきたことは村に対して大きな影響を与えたと感じま

す。

一つ目は、青木村の教育目標である「子どもの社会力育成」の核としての役割を担っています。青木村の子どもたちが人とのつながりを自ら求め、築くために多様な他者との直接相互行為の機会を多く設定する上で、学生のみなさんは多様な他者として子どもたちにかかわっています。一村一校の同一集団で成長する青木村の子どもたちにとって、学生のみなさんは大きな存在であることが、みなさんと活動をともにした子どもたちの感想からわかっています。

二つ目は、青木村社会教育事業の協働者として多大な役割を担っています。職員５名の教育委員会事務局だけでは到底できないと思われる事業を、学生の皆さんと協働し、実施できていることはみなさんの力によるところがとても大きいと思います。青木村のために、青木村の子どもたちのために時間を費やし、通学合宿や川遊びキャンプについて話し合い、計画を提案し、何度も事務局と打ち合わせをし、子どもたちの前で PR をし、本番を迎え、体当たりで子どもたちに向かい、喜怒哀楽を共にし、涙の終わりの会となるのは、みなさんのおかげであると感じます。

三つ目は、地域の活性化に役立っていると思います。三年間の活動を通じて多くの青木村の人と出会い、時には共に活動をし、話をし、お互いに元気になっていると思います。青木村においても少子高齢化が進んでいるなかで、大学生と村民が接するというのは貴重な機会であると思います。ましてや村に大学はありません。長野市から大学生が青木村へ来て、さわやかな若者の風を吹かせ、親子や、家族のようにふれあい、お互いが元気になり、また会う日を楽しみにするという場面を何度も見ました。学生の皆さんは村の人から学び、村の人は学生から元気をもらいというよい関係が増えつつあります。

四つ目は、外部評価者としての役割が期待できると思います。村行政や保育園、小、中学校で学生のみなさんが活動することで、多くの様々なことを感じると思います。これから社会人になるみなさんが、教育委員会事務局や学校に対する率直な意見を提言してくれることが期待されます。保守的になる傾向にある行政事業について、学生の皆さんの新鮮な考えや計画を提案していただき、共によりよい関係を築いていきたいと思います。

最後に、さらなる自己研鑽を積み、今後もよき協働者として共に村の子どものためにがんばりましょう。

麻績村 dE 遊ぼう（3年目）

プラザ長　旗持貴優（理数科学教育専攻3年）
副プラザ長　小池真弓（生活科学教育専攻3年）
平野　結（障害児教育専攻3年）

○学生スタッフ名

旗持　貴優（理3）	小池　真弓（生3）	平野　結（障3）	永塚　達也（障4）
堀端　優也（実4）	名無恵美子（実4）	平林　照代（言4）	丸山　悟（地4）
稲玉　恵美（言4）	小平　奈央（障4）	高野大二郎（言3）	上田　雄介（理3）
肥留間淳也（理3）	大高　真理（実3）	納　愛果（社3）	押江　愛美（社3）
河名　智子（社3）	常盤　千明（実3）	落合　静香（社3）	川村　恒平（野3）
中沢加奈子（保3）	西野　康子（野3）	土田　恵久（社3）	高橋美由紀（生3）
林　佳代子（生3）	斎藤　健治（言3）	斎藤みなみ（芸3）	伊藤　香澄（実2）
小西　舞（実2）	吉池　潤奈（実2）	宮川はるな（言2）	高池　亮輔（保2）
中村　恵理（芸1）	大塚　一哉（OB）	鈴木　春菜（OG）	末松　辰規（OB）

○参加者数

子ども　約80名　　麻績図書館の先生と保護者の方々など　約20名

○連携団体

麻績村立麻績小学校　　おみ図書館　　Gキッズ

○プラザの概要

長野市と松本市のちょうど真ん中くらい、電車がバックすることで有名な姨捨駅から2駅、聖高原駅が麻績村の玄関口になります。このプラザは、人口約3,000人、小学校も中学校も村に1校だけ、高校・大学のない麻績村が舞台です。小学校は全校生徒150人弱。でも、そこは決して、ただの田舎なんかではありません。子どもたちの笑顔あふれる素晴らしい場所なのです。

前述しましたが、子どもたちの通う小学校は150人弱の小さめの学校です。しかし、活動によってはその半分以上もの子どもたちが参加してくれます。図書館と連携した活動が年5回、毎回3時間程あります。麻績小学校の体育館、校庭、おみ図書館内が活動場所になります。広い場所で多くの子どもたちと遊ぶので、シャボン玉や運動会などの躍動的な活動を行っています。活動は毎回土曜日ですが、日曜日も遊べるのかな？と心配するくらい子どもたちはお兄さんお姉さんたちと元気に遊んでいます。

さらに、Gキッズとの連携した活動が月に約1回あります。この活動では、企画にはあまり学生は参加せず、保護者の方々が運営してくださった活動に子どもたちと一緒に参加しています。Gキッズの活動では毎回大体15人程度の子どもたちと一緒に活動をします。比較的少人数であるため、料理や名札づくり、パーティーなどアットホームな雰囲気の活動です。何時から何時まではこれ、といった時間を区切ることはあまりせずに子どもたちと学生がのびのびと遊ぶのが、このGキッズでの活動です。

子どもたち、保護者の方々、おみ図書館の先生方、学生などの多くの参加者によって成り立つ、楽しく笑顔のあふれるプラザがこの「麻績村 dE 遊ぼう」です。

○一年間の活動

◇図書館との連携企画（学生企画）

活動日	活動内容	子ども	学生
5月26日	シャボン玉	69名	14名
6月23日	運動会	58名	9名
12月1日	クリスマス会	55名	10名
2月16日	冬の運動会	―	―

◇Gキッズとの連携企画

活動日	活動内容	子ども	学生
4月21日	名札づくり	13名	10名
4月29日	きのこの駒うち	10名	1名
6月3日	全国一斉水質調査	10名	3名
7月30日	花瓶づくり	13名	1名
8月16～18日	キャンプ	14名	4名
8月25日	研究発表会	12名	―
10月14日	月の里収穫祭	多数	2名
10月27日	ハロウィン	17名	10名
12月9日	ボーリング大会	13名	1名
12月23日	クリスマス会	16名	8名
1月19日	叩きごま	多数	8名
1月19日	新年会	14名	8名
3月8日	お別れ会	―	―
3月22日	卒業式＆映画鑑賞	―	―

◇実践から得た「臨床の知」

みんなの笑顔と「わ」の生まれる場所

旗持貴優（理数科学教育専攻3年）

1．はじめに

「YOU 遊」が麻續村でプラザを開いたのが3年前、1年目で種を蒔き、2年目は種に水をやり、そして今年3年目に花を咲かせる。

昨年、この麻續村の活動に参加し、麻續村のとりこになった旗持、小池、平野の3人が中心となり今年のプラザは始動しました。3人で決めた今年の目標は「わ」。これは、今年の「YOU 遊」の全体目標である「共鳴」という言葉を受けた上で、麻續村らしい活動目標を考えたものです。「わ」は、話・和・輪・羽・環・我など様々な漢字の読みです。それぞれに望む意味があり、例えば「話」は、子どもと学生はもちろん、普段学校であまり話すことのない他学年の子どもと子ども、そして学生と学生の考えの主張による共有、学生と保護者の交流、保護者どうしの交流、先生と学生など、多くの人たちが活動を通じてたくさんの話をすることで様々なことを知ったり、考えたりできたらいいなというものです。

麻績の子どもたちは初めて会った学生にも積極的に話しかけたり、ちょっかいを出したりします。それは、とても素晴らしいことであると思います。この麻績村には幼稚園から高校までの年齢の子どもと、その子どもたちの親、そして祖父母が住んでいます。しかし、ちょうど20 歳前後の学生、つまり大学生はほとんどおらず、あまり普通は接することがないのだそうです。あまり接することのない年代の人と接するのは勇気がいります。麻績村の子どもたちも最初はそうだったのかもしれません。しかし、少なくとも現在は多くの子どもたちが初めて会うお兄さんお姉さんにも自分から積極的に行動していけるのです。その素晴らしい子どもたちと楽しい時間を一緒に多くの人に共有して欲しいと思いました。

2．活動ごとの反省や感想

2．1　シャボン玉

全体でのアイスブレイクのあと、シャボン玉の講座を３つの班にわけて活動しました。

絵を描く講座の感想として（平野結）は以下のような感想を持ちました。「子どもたちは、まほうの水と名づけられたその毒々しい色からは想像できない世界を作り上げました。しゃぼんだまを膨らまして飛ばしたのを捕まえた跡、膨らまずに割れちゃってはじけた跡、そうーっと紙上でまるくした跡、ストローで作った跡など、いろとりどりのいろんな跡が重なって、子どもたち一人ひとり、それぞれの心や感性を映し出しました。また、麻績の子どもたちがもっている優しさと同じような優しい柔らかな色が重なって、それぞれのイロとなったのです。それは、麻績村が持つ優しいあったかい空気が子どもたちにも伝わっている証のような気がしました。」

子どもたちは、私たち学生が考えた方法を超えた全く新しい方法、視野でシャボン玉を見ていました。大学生が 10 人前後いて考えても出てこないようなユニークな方法をいとも簡単に見つけ、作り出していくのです。

フィナーレでは、子どもたちがすっぽりと入れるような大きさのシャボン玉を作りました。実際にシャボン玉の中に入った子どもたちの眼は、シャボン玉よりも輝いていました。この大きなシャボン玉の液を作るために非常に四苦八苦した分、子どもたちのこの表情を見てやって良かった。という思いがわいてきました。ただ、時間的なことと、コスト的な関係で数人の子どもしか体験させてあげられなかったこと、体験できなかった子どもの中にないてしまった子がいたことが残念でした。

この活動での反省点としては上記にあげたものの他にも、（大高真理）は以下のような反省点をあげています。「シャボン玉液が眼にはいることを恐れるあまりに、注意を何度もしてしまい、子どもが思いっきり楽しむことができなかったかもしれなかった。安全面にも注意しながら、子どもが思いっきり楽しむためにはどうしたらいいのか、より深く準備段階で考えていく必要があると感じた」。

2．2　運動会

普段学校でやらないような種目いっぱいの、麻績オリジナル運動会を目標にしました。

ビーチフラッグや、水風船割りなどの本当に特殊な種目がいっぱいで子どもたちは楽しみながら、作戦を考えたりして子どもたち同士、学生との交流を深めていました。種目ごとに責任者を決めたことで、各種目がとてもユニークで凝られたものになっていました。しかし、逆に全体での打ち合わせが少なかったことが原因となり、学生がルールなどを把握していない種目

があるまま当日をむかえてしまいました。当日はスタッフが臨機応変に動いてくれたおかげで、子どもたちから楽しかったという感想をもらえました。

反省点として、(河名智子) が以下にあげているような感想を持ったスタッフが多かったようです。

「運動会では、ビーチフラッグを担当させてもらいました。子どもたちは普段学校で行う運動会とは一味違う種目などがあったためか、ルールに困惑しながらも、新しいことにどんどん挑戦し、楽しんでいる姿が見られました。企画は難しく、戸惑う部分や準備が怠ってしまった部分などもありました。子どもたちが笑顔で、お互いにどうしたら勝てるかなどの作戦を立てている姿などをみると企画をして良かったと思いました。子どもたちがより熱中できる企画を考えたいとも感じることができました」。

このように、普段やっていないことを活動としてやる際には、子どもたちに分かりやすく、参加してみたいと思えるような見ていてやっていて楽しい活動をしていくことが大切だと改めて感じました。

2．3　クリスマス

外国のクリスマスを知るために、アメリカ・メキシコ・中国の３か国の方々にお話や劇をしていただきました。国際化が進む中、このような体験はきっと子どもたちに何かを与えてくれると思います。

リース作り、クリスマスカード作り、オーナメント作りの３つの講座を開き、自由に移動できる形にしました。一つの作品に凝る子ども、全部の講座に参加した子どもなど、その子どものやりたい！　作りたい！　という意欲を様々な形で見ることができました。リース作りでは、段ボールにマカロニを貼り、その上からスプレーをかけて作りました。私たち学生は平面的なものしか考えていませんでしたが、マカロニを立ててみたりする子も何人かいました。子どもたちの創造力の深さを改めて感じました。

この活動では、はさみを使用する部分が多々ありました。(高橋美由紀) も感想の中で述べていますが、子どもたちの安全性という面について配慮が足りなかった部分がありました。はさみの管理が不十分だったということです。怪我を注意するようにしかスタッフには言っておらず、管理の部分は完全に見落としていました。怪我などがなく本当によかったと思います。はさみなどの刃物はもちろんですが、細かい物品の管理を今一度見直す必要を感じました。

2．4　名札づくり

４月に入り、初めての活動ということでこの活動から参加した子どもたちもいました。

最初は緊張していたようですが、徐々に打ちとけ、最後の方では子どもの方から話しかけてきてくれました。子どもたちはそれぞれ思い思いの可愛い名札を作っていました。昨年同様、高学年の子どもが低学年の子どもをフォローする姿が見られました。この時作った名札を子どもたちは、その後の活動で毎回大事そうに服につけている姿が見られました。このような活動は、ただ手芸という意味の活動だけではなく、自分の名前について改めて考えるきっかけになるかもしれないと感じました。

2．5　きのこの駒うち

木の丸太に電動工具で穴をあけ、そこにキノコの菌のついた木片を入れ、かなづちで叩く。それを半年ほど放置しておくと、見事なキノコが収穫できます。子どもたちはこの活動に非常に興味を持って取り組んでいました。特に幼稚園児のある女の子は、小学生のお兄さんたちに

交じって、ずっと作業していました。さらに、重たい丸太を持つ時には、その女の子のお兄ちゃんや、まわりのお兄さんお姉さんがすぐに援助していました。自然とでるその行動に、麻績の子どもたちの優しさを感じることができました。また、初めて会ったおじさんやおばさんともすぐ打ち解けた姿が見られました。麻績村は、子どもだけでなく、子どもを取り巻く大人も優しく、子どもが好きな人が多いと感じます。子どもが育っていく上で、とても好ましい環境だと思います。

２．６　全国一斉水質調査

この活動は、村の数か所の地点（川、湖、ダムなど）の水を採取し、その PH などを測定し、水の汚れ具合を調べました。低学年の子どもたちには水遊びをしたような活動だったかもしれませんが、それでも身近な水について少しでも知る機会があることは大切だと思います。また、高学年の子どもたちの何人かは、この活動で水の汚さについて考えることができていた姿も見られました。このような活動を通じて、より麻績村の自然に興味を持ち、自分たちの住む環境の良さに気付いてくれると素晴らしいと思います。

２．７　キャンプ

高遠少年自然の家で２泊３日、キャンプをしました。この活動には、麻績小学校以外から来た子どもも数人参加していました。初めは少し壁があるように見えましたが、自然の中で様々な活動をしていくうちに、どんどん打ち解けていきました。いつもと違う環境でも子どもたちはすぐに順応し、高遠の自然を満喫していました。その麻績以外から来た男の子について担当した（落合静香）が以下のような姿を目にしました。「その男の子が突然、川の中で横になり浮かび始めた。彼は目をつぶり両手を広げ全身で水の流れや音、感触を感じ取っているようであった。自然の流れと一体になっていた。私も同じように水に浮かびたかったがさすがにできなかった。その時の写真をお母さんに見せると『水浴びとか好きなのよ。それにしても気持ちよさそうね』と嬉しそうな楽しそうな温かい目で写真を見ていた」。最近は農村部の川もあまり綺麗でないところが多く、さらにコンクリートなどで工事され、川に入ることもなかなかできなくなっている場所がよく見られます。このような体験ができた彼は幸せだと思いました。このキャンプでは、いつもの活動にもまして高学年の子どもたちが自分たちより小さな子どもたちの面倒を進んで見る姿がよくみられました。今年度の麻績の活動の中で子どもたちがもっとも成長した活動だったように感じます。普段はなかなか体験できない草木染めやキーホルダー作りなどの体験活動、キャンプファイヤーや飯盒炊爨など、とても充実した３日間でした。子どもたちは、自分の得意な部分をよく出し、出来ない人や困っている人がいたらすぐに助けるという優しい心を育むことができました。

２．８　月の里収穫祭

長野県内の町村で、町村ごとに特色を活かした収穫祭が行われます。麻績村でも行われ、子どもたちは、学校の友達や家族などと一緒に参加していました。普段の活動ではみることのできない表情や姿をみることができ、とても有意義な１日でした。友達と一緒にいても学生に気付くと、手を振ったり話しかけてきてくれたりするのが本当にうれしかったです。

２．９　ハロウィン

ハロウィンにちなんだジャックオーランタンの小物入れや、テーブルマットを作りました。様々な顔のジャックオーランタンはとっても可愛くできていました。そして子どもたちお待ちかねのハロウィンパーティーです。子どもたちや保護者の方々、学生がつくった料理を食べな

がら楽しいハロウィンパーティーをしました。

ハロウィンの一番の目玉はもちろん、仮装です。子どもたちがそれぞれ自分の好きなキャラクターなどの仮装をしてきます。保護者の方々は子どもの好きなキャラクターの衣装を必死に作りますが、非常に傑作ぞろいです。子どもたちは嬉しそうな、誇らしげな顔で登場します。学生も仮装をしますが、その仮装も実にユニークなものばかりで見ている人の目を楽しませてくれます。

麻績の子どもたちの特徴的なこととして、助け合いの心をしっかりと持っているということがあげられます。様々な活動の中で、その様子は見られますが、この活動では（宮川はるな）が以下のような姿を見ることができました。「ハロウィンでは自分の名札とランチョンマットを自分たちで手作りしたのですが、そこで遅れてきた子に、もう完成した子どもたちが作り方を教えていたのを目にしました。友達の分まで手伝ってあげるという子どもたちの思いに私は胸がいっぱいになりました」。

２．10　ボーリング大会

「YOU 遊フェスティバル」の終了後、講座に参加したＧキッズの子どもたちと保護者、そして学生、OB が参加しました。麻績の子どもたちはボーリングや映画をとても楽しみにしています。学生の参加が OB を含め３名だったのですが、高学年の子どもたちが低学年の子どもたちのフォローをしてくれ、とても楽しい時間を過ごしていました。麻績の子どもたちは自分の兄弟でなくても自然にフォローができるという素晴らしい姿を見ることができました。

２．11　クリスマス会

麻績村にあるシェーンガルデン麻績で活動しました。活動自体はバイキングとお風呂、クイズやミニゲームなどのイベントへの参加でしたが、近くにある広場でも遊びました。

兄弟以外の異学年の子どもとお風呂に入ったりすることはなかなかないと思うので、貴重な体験だったと思います。また、クイズやミニゲームに積極的に子どもたちも学生も参加し、楽しい笑顔いっぱいの活動になりました。

２．12　１年間を通しての感想

最初は、何ができるのだろうと思いました。活動に参加したすべての人のかけがえのない大切な時間を素晴らしい時間にするために自分たちは何ができるのだろう。何もできないのかもしれないとも思いました。１年企画する側になり思うことは、みんなの見せるあの笑顔があれば他にはなにも望まないということ。そして、そう思うたびに見えてくる笑顔がより輝いて見えてきました。麻績村では、とても星が綺麗に見えます。その星よりも綺麗に子どもたちの笑顔がきらめいて見えています。いつまでもその笑顔が輝いていて欲しい。麻績村が大好きだから１年間続けてこられた、１年前の自分には考えもつかないような夢のような大きな思い出が残った。何かにおびえるような１年前の自分に、何も心配いらない、麻績村に行けば。そう言えたら、もっと素直になれた部分もあったと思います。誰にも負けない麻績村への思いを誓い、忘れないために、いつも目にする携帯のアドレスも「綺麗な麻績の星の下で」に変えた。１年間やって、色々な自分の駄目な部分も見えてきました。参加してくれた学生の感想の中にも、自分のいろいろな部分が見えたという言葉がありました。活動は鏡のように自分を映し出します、細かく細部までこだわったり気をつけたりしたものとそうでなかったものでは、子どもの表情も、子どもたちの感想も違いました。私たち教育学部の学生は、将来先生として子どもたちに勉強などを教える人がとても多いと思います。しかし、人間は全能ではありません。誰か

らも学ぶことができます。活動を通して、子どもたちから多くのことを学びました。

１年前と比べ、子どもたちは精神的にも肉体的にも大きく成長しています。子どもたちにとって１日１日が、かけがえのない１日です。１年前に学生にいたずらばかりしていたある男の子は、いつの間にか子どもたちをまとめてくれるお兄さんになっていました。４月にはとても静かで、中々自分の思いを伝えることのできなかった子どもが今では他の子どもたちと楽しく遊んでいます。私たち学生も、回数を重ねるごとに子どもたちと自然にかかわれるようになってきた姿がみられました。この１年間の「麻績村 dE 遊ぼう」があったことで、その子どもたちや学生の変化につながった部分があったのだと思います。

３　今後の課題・反省

今後の課題・反省としては、大きく分けて２つの課題と反省点があります。

まず、慢性的なスタッフ数不足です。人数自体は昨年度とさほど変わりませんでした。しかし、昨年と比べ３年生の占める割合が非常に多く、２年生と４年生、特に２年生の参加が少なかったことが反省点です。２年生は、来年「YOU 遊」全体を引っ張っていく存在になります。その２年生の参加が少ないことは大変残念なことでした。これはリーダーの私の宣伝や声かけが足りなかったのが原因だと思います。ハロウィンやクリスマスではポスターも作り宣伝しましたが、あまり効果はなく、もっと効果的な方法を考えなければならないと感じました。学生が多いということは、単純に数学的に考えても、学生一人当たりの担当する子どもが減り、より子どもたちと深く遊べ、子どもたちも多くのお兄さんお姉さんと遊ぶことができます。さらに、スタッフの負担も減り、不測の事態にも対応することができます。子どもたちにとっても残念ですし、学生にとっても麻績の良さをもっと多くの人に伝えることができなかったのが申し訳ないです。

次に、準備を三役がやりすぎたことです。三役が準備に積極的に参加することはもちろん普通のことですが、三役以外のスタッフを上手くまとめたり、集めたりすることがなかなかできずに、準備はできているけど当日まで作り方を知らないというスタッフもいました。今年は３年生が多く、また仲の良い友達が多く参加してくれました。大変嬉しかったですが、それゆえになぁなぁになってしまった部分もあったと思います。子どもたちにとって、活動の時間はかけがえのない時間です。二度と返ってきません。それをよく考え、準備に参加していく雰囲気づくりをしていかなくてはいけないと感じました。準備に参加してくれたスタッフには本当に大きな負担をかけてしまったと思います。準備と計画が上手くかみ合わなかったのもこれが原因だと思います。子どもたちにも学生にも笑顔で楽しい時間を過ごして欲しいです。ただ、楽しいだけでは遊んでいるだけだということを肝に銘じておきたいと思います

◇連携団体からの評価

今年咲いた花が実をつけてくれるように

麻績村、G-kid's わくわくクラブ代表　**石田恵子**

今年で三年目を迎えた私たちの活動。その活動の中でいつの間にか、「YOU 遊」の学生さんたちとのかかわりは、切っても切れないものになっていました。種がまかれ、芽が出て、花が咲いた今年。そんな一年を振り返ってみて今思うことは、「今年もいっぱいお世話になりま

した」ということでしょうか……。

何といっても、片道一時間以上かかる道のりを時には毎週のように活動に参加してもらったり、夏休みの大切な時間を子どもたちのサマーキャンプに一緒に参加してもらったりと感謝しています。学生さんにとってはどうなんだろう？私たちとの活動が少しは役に立っているんだろうか？など、保護者の間でよく話をします。キッズに来ることが学生さんたちにとって「楽に息のできる場所」、「くつろげる場所」、そんな場所になって、子どもたちといっぱいいろんなことを経験しながら、何かを見つけてくれる場所になってくれるといいのですが。来年度に向けては、今年咲いた花が散ることなくしっかり『実』を付けてくれることを願いたいです。

おみ図書館に定着したYOU遊世間の活動 ―心待ちの子どもたち―

麻續小学校司書　橋渡久美子

1　はじめに

おみ図書館の活動を「YOU 遊世間」の皆様に支えていただき３年目になりました。感謝です。今ではおみ図書館にとって「YOU 遊世間」の活動はなくてはならない活動になっています。

2　子どもたちの姿と成果

きらきらした子どもたちの目、競技に夢中になっている姿。麻續っ子大運動会の様子です。これは、事前の準備の勝利といえるでしょう。早く会場に来てリハーサルを繰り返しながら工夫している姿を目にしました。出席した子がどの年齢の子でも楽しめるような内容の工夫もありました。また、グループも遊びながらのグループ分け、「うまいなぁ」と感心したことのひとつです。クリスマスの準備もさぞかし大変だったと思います。大勢の子どもたちが一堂に楽しめるための子どもたちにとって様々な企画をしていただける事は有り難いことです。しかも自分を受け入れてくれる暖かい様々な世代の人たちとふれあえることは、人生の土台を作っている子どもたちにとってなんと幸せなことでしょう。遠い麻續まで来てくださる皆様に感謝です。

3　お願い

おみ図書館では、学校と一般図書館と一緒になった特異な図書館です。地域の方や様々な方とふれ合いを通して子どもたちを育んでいきたいという願いがあります。今年は、図書館の理念をしっかりお伝えできないまま活動に入ってしまった感があり私の反省です。

また、地域の方々と一緒の活動がなかったことも反省です。おみ図書館を軸に子どもたちのために懸命に活動してくださる地域の方々と交流して共に運営していく事業を入れていくことで、子どもたちにとっても「YOU 遊世間」の皆様にとっても村の方々にとっても互いに得ることが多いと思います。

来年度は講座の運営だけでなく子どもたちを一緒に育てていく根っこの共通意識を持ち共に活動出来たら幸いです。

わらの会（2年目）

プラザ長　大家恵梨子（社会科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

花形美奈子（実４）　山田　桃子（実４）　名無絵美子（実４）　五味　沙織（実３）
河名　智子（社３）　坂口　香織（社３）　上條真友子（生３）　宮川はるな（言２）
宮下奈保子（生２）　山岸　亜矢（生２）

○参加者数　子ども４名　地域協力者２名　学生 10 名

○連携団体　NPO 法人「どれみクラブ」

地域協力者　セラピスト　島田友美子　ピアニスト　西沢泉

○プラザの概要

「わらの会」とは NPO 法人が行っている「どれみクラブ」の別名である。この会は障害を持つ子どもの母親が中心となって結成された。最初、私たち学生が関わり始めたのは今から約３年前のことであり、それ以前は「YOU 遊世間」の活動に組み込まれていなかった。昨年度の活動では主に３年生を中心に障害児に対しての音楽療法をサポートするという役割を担っていた。今年度は３年生だけでなく昨年度役員を務めていた花形さんを中心とする４年生の先輩方とともに、２年生の宮川さんと宮下さんと今年度の活動を進めていった。

今年度、発足式に当たり昨年度の目標に付加し「わらの会」のさらなる発展と飛躍の意味を持たせるために次のような目標を掲げることにした。それは「子どもたちが活動を通して自らを見つめ、喜びや驚きを共有することを目標に私たち学生も成長していける環境づくりに努めていく。保護者との連携強化、個々の性格に応じた支援を行っていく」というものだ。

月一回・第三土曜日を活動日に設定し、長野市にある障害者福祉センターで活動を行っている。普段は音楽療法を中心に島田先生と西沢先生に活動内容を決定していただき、学生は子どもたちのサポートをするという役割が決められている。毎回来る学生の人数や人が異なり、学生は毎回どの子どもをサポートするのかを決めて参加する。また、二か月に一回の程度で学生企画を行い、子どもに音楽鑑賞の場を提供した。以下の表に今年度の子どもの参加人数と学生参加人数及び活動内容を示すこととする。

○活動日、活動内容及び子ども・学生の参加人数

活動日	活動内容	子どもの人数	参加学生数
4月21日	音楽療法	4人	3人
5月19日	音楽療法＋学生企画	4人	4人
6月30日	音楽療法＋学生企画	4人	4人
7月21日	音楽療法	3人	3人
8月18日	音楽療法	4人	1人
9月15日	音楽療法	4人	1人
10月20日	音楽療法＋学生企画	1人	3人
11月10日	音楽療法	4人	4人
12月15日	音楽療法＋学生企画	4人	1人
1月19日	音楽療法	4人	4人

◇実践から得た「臨床の知」

音楽を通し他を認める子どもの姿を見つめて

大家恵梨子（社会科学教育専攻３年）

１．はじめに

私は、今年度の４月の活動から本格的にこの会に参加させていただいた。元来、音楽療法に興味があり花形さんから引き継いでこの会で障害児と接することの喜びや難しさを学ぶことになった。この会では音楽療法を通して子どもたちが日常生活の中に感じる障壁を少しでも和らげるという意図が組み込まれている。それは初めて音楽療法士の島田友美子先生、ピアノ伴奏を担当していただく西沢泉先生とお会いした時、２人ともとても心が広く音楽に対する情熱と同程度子どもを愛する情熱を持った方なのだということを感じたからである。この先生方の人柄や子どもたちの状況から判断して私は今年度、「子どもたちが発見し、喜びや驚きを共有すること」を目標に掲げた。昨年度の「わらの会」は「子ども同士が関わる場面を大切にし、増やしていくこと」を目標（目的）にしていたが、今年度はそれよりもレベルを上げ、子どもが自分の中にあるまだ見つけていない自分を発見してもらいたい、そして自分以外の友達という存在を認めてほしいという想いからである。私は彼ら自身障害というハンディを持っているが、それは決して不幸ではなくそれをも自分自身であることを認識し、自分以外の友達を大切にしてほしいという強い願いが大事だと感じているからだ。その上で子どもたちが音楽というものに触れる機会を多く提供したいという考えから学生企画を何度か取り入れることにした。先生たちからの活動をそのまま取り入れるだけでなく学生が主体となりこの「わらの会」に来て自分の考え方を変えることができたと思ってもらうために学生企画をより重視した。以下の３点から今年度の「わらの会」の活動を振り返り来年につなげていきたいと思う。

２．活動内容について

今年度は音楽療法と学生企画の二本柱として子どもにより幅広く内容の濃い音楽を届けたい、そして子どもたちが音楽を通して各々の存在価値や自己の価値を認識しさらに成長していくための場として「わらの会」を作っていきたいと考えていた。まず、５月に学生企画として行った「ドレミの歌」を楽器で演奏したが、子どもたちが見たことのない楽器や前から知っていて実は触ってみたかったという楽器が目の前に現れたことで興奮していたことを鮮明に記憶している。この企画は普段、触れたり見たりすることがないような楽器と子どもを対面させることで子どもが自分の興味や関心を引き出そうという意図があった。「ドレミの歌」は学生に対しての負担が少なく、子どもが知っている曲であろうという単純な理由により選曲した。しかし、思っている以上に子どもたちからの反応がよくとても驚いたのは普段あまり表情がなく、笑わない女児がとても素敵な笑顔を浮かべていたことだった。彼女は自分の表現したいことを自分なりの言葉で伝えてくれるとてもお茶目な子だった。そんな子が言葉でなく笑顔で自分の気持ちを私たちに伝えてくれた時は嬉しかったのと同時に彼女の中に拙い演奏でも何かを残せたのではないかと思った。また、演奏が終わってから全く別の女児が私の持っていた楽器に「触りたい、もっと見たい」と言って近寄ってきた。私は楽器に興味を示してくれたことに感動したがそれよりも自分から積極的に近寄ってくるとは思っていなかったのでとても驚いた。楽器に対しての興味や関心を得ることができるとは予想通りであったが、自分の意思で「これをした

い、あれが見たい」という意見が出てくるとは思わず、そこにこの企画の醍醐味があったのだと思った。残念ながら吹くことはできなかったが満足そうな顔をして帰っていったことがとても嬉しかった。このように子どもが自らの意思で興味を持つことができるような活動を次回にもつなげていくために10月の学生企画では「ハンドベル」を演奏することになった。この回は残念ながら子どもが一人であったが、その一人のためにも演奏したい、自分の中にある何かを発見してもらいたという願いだけであった。その子はとてもニコニコしながら私たちに何か伝えたいという気持ちなのかとても嬉しそうだった。そのような姿を見て言葉は上手く伝えられないかもしれないが笑顔を見せることで自分の意思を伝えてくれたように私は思っている。

学生企画を通して子どもに何らかの興味を与え、新たな自分を発見するということができた。上記では二回の学生企画の例しか取り上げなかったが全ての企画において子どもたちから私たち学生も学ばせていただいと思う。その中で障害児に対して興味を持たせることとは決して難しくはないということを学んだ。笑顔や自らの意思で近寄ってきた行為から心は健常児と変わらない、伝えたいという想いや解ってもらいたいという想いはきっと健常児以上なのだということを痛感した。企画に携わってくれた学生や先輩方にはとても感謝している。この企画を実行し、成功できたことはとても意義深く私自身が感じていた障害児に対しての考え方や捉え方を根本から覆すことができた。また、先生方も私たちの企画に対して反対することなく、温かく見守って下さったことに心からお礼を述べたい。

3．子どもの姿を通して

子どもの姿を捉えるということはとても難しい。3・4年生は教育実習に行ってその経験からこの気持ちを理解していただけると思う。子どもの意識に寄り添う、子どもとのコミュニケーションの図り方、子どもの目線に立つなど全てが難題であり、それは「わらの会」でも同様に考えられることだと感じている。特に障害児と接する場は介護体験以外で普通の学生であれば無に等しいと思う。そのような未経験の中で私が今年度最も重要としたことは「どのように子どもを捉えていくのか」ということである。目標の中にも「学生が成長していける環境づくり」と書いたがそれはどのような環境を学生に提供しどのような子どもの姿から学んでいけばよいのかと私自身が模索していた。しかし、この会に何度も参加していくことでそのような難しい言葉は一切要らないのではないかということに気づいた。成長していくとはこの会の中で自分が子どもと関わっていく中で得たことがそのまま成長や学びにつながっていくことであり、子どもの全ての姿において私たちは勉強させられ、自分を高めていこうとすることができるのだということを実感した。例えば、子どもの姿を追っていくといつも自分では感じないようなことを感じていることに気づく。それはある男児が「何でAちゃん、来ないの？」、「Aちゃんが来ないといやだ」と暴れ始めたことからだ。私は今まで○○ちゃんが来ないと嫌だと暴れた経験がなく、周りの学生もそのように感じ少し動揺していた。私は彼の行動からいつもと違うから嫌だという意味ではなくAちゃんがそこに居て当然だという認識が私たちより強いのだということを学んだ。私は男児が環境の変化に適応できないのではなく、周りの友達の存在を意識し始めたことにより、「居ない」ということを受け入れることができないで戸惑っていたと解釈している。このような姿は一例でしかない。私たちが見てサポートしている中で得られたこと全てが驚きと発見であり、学びにつながるのだということを認識させられた。私はこの後の活動では子どものこのような反応を見た場合、無理やりに会を始めるのではなく子ど

もの意識に沿ってあげるようにするべきだと思い、先生方もそれを汲み取って下さった。とても有り難く思う。

このように子どもと毎回の活動を終えていく中で子どもが考えていること発している言葉から何を伝えたいのだろうかという強い願いが学生の間に生まれ、言葉ではなく行動からコミュニケーションを行うという考えを重視するようにもなった。言葉では伝えきれないことを一緒に体を動かしながらその意識や動きに寄り添いながらコミュニケーションを取ることの重大さを実感することもできたのではないか。

4.「わらの会」の延長として「YOU遊フェスティバル」

私は昨年の 12 月に行われた「YOU 遊フェスティバル」で講座を開くことを決めた。それはこの「わらの会」でお世話になっている子どもたちに何か恩返しが出来たらいいと思ったからである。決して別のものとしてではなくこの会の延長線上にハンドベル講座が成立したわけでないということを理解していただきたく実践の例として記録に載せておきたいと考える。

ではなぜ、ハンドベルだったのか？　きっかけは、子どもたちが以前ハンドベルを見たことがあるという経験に基づいたものである。子どもたちに今度は触れることで楽器の面白さや奥深さを感じ取ってほしいと思い講座を企画した。また、ハンドベルだけでは４時間という活動時間では子どもの集中力を保てるかどうか不安だったので午前中はコラージュ（貼り絵）を取り入れた。どちらの活動もとにかく子どもが楽しいと感じてくれることを目的とした。子どもを募集した結果、子どもは障害児が一人、健常児が四人という参加で私が思っていた以上に厳しいものだった。しかし、人数が多い・少ないという問題ではなく参加を希望してくれた子ども一人ひとりが楽しんでもらえるような講座を提供したいという強い思いを持ちながら、当日は子どもを迎えることができたように思う。

このフェスティバルを迎えるに当たってわらの会の音楽療法士である島田友美子先生と西沢泉先生には本校に来校いただき、この「わらの会」で行っている音楽療法について、子どもとの接し方について、ハンドベルの演奏方法及びどのように子どもがハンドベルを練習することが効率的なのかという指導法についてもご指導いただいた。学生スタッフの中には音楽療法やハンドベルに初めて挑戦する人も居たので、事前のご指導によって当講座の活動内容を企画するにあたりとても意味のある時間となった。学生の顔はとても活き活きしており、普段の学校生活では決して見せることのないような興味深そうな顔をしていた。私は音楽や楽器には大人を子どもにさせる働きがあるのだと実感した。

事前に何度か集まり、どのような活動を行うのか企画を練った。私は、自分の力だけでこの講座を全て企画することはやはり無謀であり、それは私が掲げた「わらの会」の目標にそぐわないと思った。それにより学生スタッフにはそれぞれの企画を分担してもらい、各々の個性が発揮できる活動にすることでこの企画をより充実させることができると思った。

私は彼らが子どもを第一に考え、その上で学生は一体何ができるのかという姿勢を常に一貫しながら企画していたと見ている。コラージュでははさみやのりといった道具をどのように子どもに提示するのか、障害児にハンドベルをどのように教えるべきなのか。また保護者に対してはどのように接するべきなのかということを第一に考えながら活動してくれたように思う。当日の講座の活動では子どもだけでなく保護者の方がたにも喜んでいただき、コラージュでは子どもよりも大人の方が熱中していた。ここで学んだことは子どもと大人の明確な境界線は身

体的な問題だけであること。人間はいくら歳を重ねても夢中になれることがあれば、どんな時でも子どもに立ち返えることができるのだということを学んだ。そんな瞬間を私は大切にしたい、またそのような一瞬を子どもの前でも提供することで子どもとより近い存在になることができるように考える。

最後の発表ではハンドベルで一曲（きよしこの夜）を演奏したが、大勢の拍手をいただくことができ、私はこの講座を企画、運営して良かったと思えた。子どもにとってもこの貴重な一瞬はとても意義深いものとなったはずである。私は、この講座を通し子どもが輝く時や自分に自信を持てる時とは大人（教師）が精一杯準備をしてきた上で成り立つものだと考える。私自身がこの活動を終えて、子どもが眩しいくらいの素敵な笑顔は大人にとっても勇気となり力となるのだと実感している。

5．活動を通しての反省

「わらの会」では毎回約３人の学生が子どもの音楽療法をサポートする役割を引き受けてくれた。私は３月から加わったのでそれまで先輩方がどのように学生を集めてきたのかわからず、ましてや自分が本講座の長を務めることができるのか不安だった。私が初めて参加した３月の活動ではコラージュをやっていた。コラージュは貼り絵のことでピカソを思い出す人も多いはずだ。特に音楽療法をやるわけでもなく、子どもと一緒にチラシに描いてある絵を切り抜いて、画用紙に貼るだけの単純な作業だが、子どもは一生懸命自分の好きな作品を仕上げようとする姿を見た。私は、「なぜ、このような単純作業にも関わらず熱中できるのだろう」と感じた。健常児であれば、すぐに投げ出してしまうようなことを彼らは１時間でも２時間でも熱中してやろうとする姿がそこにあった。その姿から、この活動を企画しているのは島田先生や西沢先生であるが、それをサポートしているのは信大の学生なのだと、これは誰かが近くではさみやのりを思いっきり触らせてくれる人がいるからこの活動は成り立つのだということを強く感じた。そのような経緯から学生の姿を振り返るとこの「わらの会」での先生と子どもの両方へのサポートが十分とは言えない点が多々あったと思い反省している。先生が考えていらっしゃること、学生に願っていることがどの程度叶えることができたのか、行動することができたのか不明である。学生は考える視点や興味・関心という視点においてまだ配慮に欠ける部分があり、子どもが伝えたいと思っていること・受け止めてほしいことを受け止めてあげられるだけの容量がまだないために要求されていることに応じることができなかった部分が多々あった。それは来年の課題として取り組む必要性があると考える。

6．学生スタッフの姿から学んだこと

学生の意見から「コミュニケーションにおける行動の重要さ」（宮下奈保子）とあったが、「わらの会」では言葉を通して伝えるというよりも自分の動作や表情を用いて子どもと接することが重要である。一緒に歩くや体を動かすだけでも子どもの気持ちを共感することの近道なのだと考える。また「構えること無く、彼女のそのままを見つめれば良いのだ」（上條真友子）という意見もあったが、どのような子どもでもありのままを知ることが子どもを根本から理解すること、そしてそれを素直に受け止めてあげることが我々には必要なのだということを実感してくれた。

「子どもたちよりも私のほうが驚きの連続だった」（坂口香織）という意見を寄せてくれた。

この意見は私も同感である。私が思っている以上に子どもたちは明るく、自分の気持ちを一生懸命表現する姿を見せてくれている。「わらの会」では子どもたちが無邪気に笑い、歌い、泣くという全ての行動が「今ここに居るのだ」というメッセージを私たちに投げかけてくれていると感じている。辛いことがあれば泣けばいい・叫べばいい、嬉しかったら笑えばいいと素直に生きることを謳歌している子どもの姿は新鮮であり、教師になろうとしている学生にとって貴重な経験だったのではないかと考える。

7．2007年度「わらの会」及びハンドベル講座の全体を振り返って

今年度の目標である子どもたちが発見し喜びや驚きを共有することは子どもたちが周囲の子どもの存在を認識し、必要としていることからすでにできているのだと考える。しかし、子どもの個々の性格に応じた支援はまだ確立できていないのが現状である。この支援をどのように行っていくのか、子どもに一人ひとり付き添うことが個々の支援と言えるのかどうかを今後追求し、実践してもらいと思う。「わらの会」では常に子どもが学生を求めていることを忘れずに来年度の活動に引き継ぎたい。

私は、この企画に賛同し手伝ってくれたスタッフの方々、そして音楽療法や障害児への対応・ハンドベルについての基礎知識などを教えてくださった島田先生と西沢先生に深く感謝している。「わらの会」及びこのハンドベル講座に参加してくれた全ての人たちが私の考えに賛同し、各々の意見を持ち主体的に活動してくれたことをとても誇りに思う。このようなスタッフのサポートや先生方からの教えがなければ「わらの会」及びハンドベル講座は成立しなかったと考えている。来年度は今年度よりも中身の濃い活動を展開し、子どもの声に耳を傾けていけるような実践を行ってもらいたい。

◇連携団体からの評価

音楽療法を用いた「わらの会」での実践

長野音楽療法研究会　セラピスト　**島田友美子**
ピアニスト　**西沢　泉**

○長期目標：「音楽」の芸術性を媒介にして、発達を見つめ直し、次の成長につなげる。出来たことをみんなで「よろこび」、「うれしさをあらわし」、自信をつける。

○短期目標：寒い室内では、歩いたり簡単な体操をして身体を温めてから行動する。冬の遊びを知り、楽しい気持ちを持つ。(かるた、絵合わせなど)。「ありがとう」の表現、ハンドベルを色々経験し楽しく過ごす。こんにちは～の歌♪、新年の学校・家庭・親戚等での体験などを聞きあう。

○カリキュラム：①リズムにのり「身体」を動かす（さんぽ・大きな古時計・ビビディバビデデブー他)、②どれみふぁそらし、を楽しみましょう！　♪：ハンドベルを演奏してみましょう！、③「ドレミの歌」～チュウリップ・ちょうちょ・ふるさと、④鑑賞を楽しむ＝演奏を聴き、楽しむ＝大きな拍手で、気持ちを伝える、⑤ゴーゴー電車―おててつないで―バイバイバイ～、⑥諸連絡～来月の予定など、シールを貼る（２枚ずつ)。

上記のようなカリキュラムで、月１回のドレミクラブのセッションを行っています。対象児が、安全に楽しく過ごせるようにという目的のもとに、信州大学教育学部学生の皆さんにサ

ポートを頂き、大変有効に役立っております。養護学級小学部５年、６年生、中等部２年生の構成で学年の違いは気にならない様子です。この会が開講されてから６年目を迎えています。メンバーは発達障害のＡ１～Ｂ１程度を持ちます。発達の特性を持つ方々は、集団で身体を動かし、模倣や動きの補助をサポートして頂けると、よりはっきりと動きを認知できます。先生方の適切な声かけに意志がはっきりして動作も自然に出来るようになるのです。内容も毎日の生活とは少し違った内容を盛り込みます。例えば、楽器では、クワイヤーホーン、パドルドラム、ボンゴ、コンガ、ハンドベル、グロッケンなどを用いて合奏し、歌を唄います。また、遊びの要素を含んだダンスをしたり、しゃぼん玉飛ばしやバランスボール、ボールころがし等を行います。信大生の皆さんはいつも本気に相手をして下さり、対象児は本気で楽しみ良い体験を積む事ができました。今後も生演奏の鑑賞、コラージュ、箱庭など、心理療法を慎重に組み込み、一人ひとりの成長と自信につなげていきたいです。１年間配慮のある優秀なサポートをありがとうございました。今後も、引き続きご支援を宜しくお願いいたします。

信州すざか農業小学校豊丘校（２年目）

プラザ長　藤岡泰裕（教育実践３年）
副プラザ長　細田有希（生活科学３年）
山崎友美（生活科学３年）

○学生スタッフ名

松山　博一（実ＯＢ）	野田　和洋（言４）	稲玉　恵美（言４）	永塚　達也（障４）
青木　理絵（生３）	青木　智博（実３）	井頭　　瞳（野３）	加藤　悦子（生３）
五味　紗織（実３）	斎藤　健治（言３）	榊原　礼菜（生３）	鈴木　亮子（生３）
田村　弘樹（言３）	土田　恵久（社３）	常盤　千明（実３）	西野　康子（野３）
洞出　直美（実３）	一條　まな（言２）	太田　真美（言２）	中川　　茜（生２）
宮川はるな（言２）	見村　友里（言２）	我那覇菜見子（県１）	丸田かおり（清１）

○参加者数

子どもの参加人数は、各班に 11 人ずつの５班に分かれており、総人数は 55 人。毎回、55 人全員が参加することはないが、35 人前後の子供たちが活動に参加する。

学生の参加人数は、各活動とも７人前後の参加者がいる。多いときは 12 人ほどの学生に参加してもらった。

○連携団体

須坂市教育委員会子ども課

○プラザの概要

須坂農業小学校豊丘校の概要を「信州すざか農業小学校豊丘校入学式しおり」をもとに紹介する。

１．開設の趣旨

（１）子どもたちの健やかな成長に欠かせない自然体験活動不足の現状を考慮し、子どもたちがたくましい精神力・想像力等を身につけることを願い、総合的・自主的な体験活動の場として、年間を通した農業小学校を開設する。

（２）子どもたちが、異年齢の子どもたちや保護者、地域の大人（主に高齢者）と触れ合うことにより、相互の仲間作りや地域連帯感を養うとともに、地域の文化に触れることにより、ふるさと須坂のよさを再発見する手助けをする。

２．小学校の名称及び場所

（１）名称　信州すざか農業小学校豊丘校

（２）場所　校舎　須坂市豊丘「そのさとホール」及び豊丘地域公民館
　　農地　田及び畑併せて約 1,800 平方メートル借用

３．授業内容等

（１）農家先生等の指導により、畑や田んぼを耕し、野菜や稲を育てる。

（２）収穫した野菜等を調理（おやきづくり、そば打ち、もちつきなど）して食べることにより、労働の尊さと食の喜びや有難さを学ぶ。

（３）近隣の山歩き、川あそびなどを通して地域の自然に親しむとともに伝統文化を学ぶ。

４．対象者（児童）

市内の小学生およびその保護者（子ども 50 人程度とその保護者の規模とする。）を原則と

し、大人だけの申し込みは受け付けない。なお、豊丘地域の子どもたちだけでなく、広く市内から募集する。

○平成19年度信州すざか農業小学校豊丘校の年間活動

4月14日（土）	「農業小学校で友だちをいっぱいつくろう～これから1年よろしくね～」 入学式・オリエンテーション
5月12日（土）	「野菜を植えて育てよう！」 ジャガイモ・トウモロコシ、ネギなどの植え付け
5月26日（土）	「ドロンコになって田植えをしよう！」 田植え
6月9日（土）	「サツマイモは苗を植えてから根が出るんだ！」 サツマイモ苗の植え付け・畑の手入れ
6月30日（土）	「れんげつつじの五味池で、わらび狩りと焼肉パーティーをしよう」 夏の遠足（五味池探索）
7月21日（土）	「こんなにたくさん取れたよ。～ジャガイモ蒸かして食べてみよう～」 ジャガイモの収穫・ネギ畑の草取り・麦の刈り取り
8月4日（土）	「そばの実ってこんなかたちをしていたの？」 そばの種まき・トウモロコシの収穫
8月25日（土）	「おやき作りは楽しいよ！伝統行事を学ぼう！」 おやきづくり・大根の種まき・御射山祭りの伝統行事（小豆飯をカヤの箸で食べる）を学ぶ
9月8日（土）	「こんなに小さい種なの？」 秋の野菜（白菜や野沢菜など）の種まき
10月6日（土）	「こんなにお米が取れたよ！米もそばもでき具合はどうかな？」 稲の脱穀・そばの刈り取り
10月20日（土）	「収穫はたのしいな　これがそばになるんだネ」 サツマイモの収穫・そばの脱穀
11月3日（土）	「豊丘の地域を散策しよう　小麦はいつ収穫できるの？」 秋の遠足（豊丘離山等）・小麦の種まき
11月17日（土）	「おいしい焼きいもと『ひんのべ』で収穫祭だ！！」 野菜の収穫・焼きいも大会・ひんのべ交流会
12月1日（土）	「そば打ちをして食べよう！～そばを打つのは大変だ～」 そば打ち体験
12月15日（土）	「『ペッタン　ペッタン』もちをつこう！～収穫したお米でもちつきだ～」 もちつき大会
1月12日（土）	「米の粉でまゆだまを作ってみよう！～形もいろいろむずかしいよ～」 ものづくり
2月16日（土）	「もう卒業なの。さみしいネ！～ありがとうございました～」 卒業式

○授業スケジュール

8：45～9：00	農家先生・事務局・学生による当日の打ち合わせ
9：00	子ども・その保護者集合 朝礼・当日の授業説明（校長）
9：10～	作業開始（途中小休止あり→蒸かしたジャガイモやトウモロコシ、サツマイモやひんのべ、おやき等を食べる）
11：30～	学生によるリフレクションタイム
12：00	終わりの会・解散

◇実践から得た「臨床の知」

子どもとの活動を通しての内面理解

～実際に経験したからこそ見えてくるもの～

藤岡泰裕（教育実践科学専攻３年）
細田有希（生活科学教育専攻３年）
山崎友美（生活科学教育専攻３年）

１．はじめに

「信州すざか農業小学校豊丘校」は発足して２年目のプラザである。２年目ということもあり活動時間を 30 分延長してもらいリフレクションシートを書く時間を設けていただくことができた。また、朝礼の前に活動の事前打ち合わせを校長先生はじめ各班の農家先生、事務局、学生で行うことにより一日の活動の流れが把握しやすくなったり、活動中に学生が班の農家先生と話しを積極的にするようになったりしたことで、農家先生や事務局の方々との話し合いや連携が昨年よりとりやすくなった。さらに、昨年は御射山祭りの紹介しか学生が授業内容に関与することができなかったが、今年は、活動の中で収穫の方法や注意点を絵にして子どもたちに説明することや、どんど焼きという文化を説明する機会を得ることができた。しかし、活動回数を重ねるごとに今後改善していく必要がある問題もいくつか見つけた。私たちは、見つけた問題点を改善し今後活動するためにも、須坂の活動に参加して「子どもの姿から学んだこと」、「農家先生の姿から学んだこと」、「保護者の姿から学んだこと」、「他の学生の姿から学んだこと」の４つの観点から活動を振り返ってみようと思う。

２．実際に経験したからこそ見えてくるもの

２．１　子どもの姿から学んだこと

「(田植えの活動で）私の班の小学校１年生の女の子は、最初田んぼの中に入ることを恐れ、泣きじゃくっていた。他の子どもたちがはしゃぎながら田植えをしている姿を見ても、なかなか田んぼの中に入ることができなかった。なんとか説得し、だっこされながら田んぼに入った」（山崎友美)、「(餅つきの活動で）学生の『一緒にやろう』の声掛けで、しぶしぶ最後に餅つきをしていました。餅つきを嫌がる子どもがいるとは考えもしなかったので正直驚いた」(丸田かおり)、「(そばや小麦の種をまく作業で）畑に行ったときに、種をまきたいという子どもと、学校でやったことがあるからやらなくてもいいという子どもがいました」（太田真美)。

山崎友美、丸田かおり、太田真美の３名は、子どもたちのなかに農業やもちつきのような作

業に拒絶を示す子どもがいることに驚いている。

しかし、そのような驚きに直面した学生は、活動を通して、拒絶を示す子どもの真の内面をそれぞれ理解している。山崎友美は、「子どもは、未経験なことに対し恐れを感じてしまうものであるので、大人は上手に新しい世界へ導く手助けをしたり、興味を持たせるような工夫をしたりしなければならないことを学んだ。また、一度興味を持ってしまうと、その集中力はいつまでも続くのだなということを感じた」と言っている。また、丸田かおりは、「おそるおそる餅つきの様子を見ていたので、興味が全くなかったわけではないと感じました。子どもの様子をよく見て心境を読みとったり、その場に応じて子どもから興味を持って動き出せるような声掛けができるようになりたいと思いました」という考え方にたどりついた。そして、太田真美は「こちらがやろうよ、種をまこうよと無理に言わなくても、内心興味を持っている子どもが多い」ということに気づいている。他にも、「(作業を通して) 土に触れていくことにより、心を次第に開いていった子どもたち (中略) 土にしっかり根をはっている大根・さつまいもを抜く姿。ひんやりとした田の中に足を入れながら、田植えをする姿」(稲玉恵美) や「はじめはこちらから話しかけてもそっぽを向く子もいました。でも、それが活動になると大違い！！もくもくと作業に取り組み、口も開いてくれるようになりました」(宮川はるな) というように農作業を体験していくうちに、心を開き、活発になる子どもたちの姿を活動の中から見つけた学生もいた。

さらに、子どもとのふれあいを通して、「子どもの意識を変えるきっかけとなる万能な声かけや接し方はないので、すごく難しく感じます。(中略) 子どもたちから見れば年上のお兄さんお姉さんという面もありますが、スタッフである限り、責任のある態度・行動を心がけていかなければならないと感じました」(田村弘樹) のように自らの課題を見出した学生もたくさんいた。

農業という活動を子どもたちと一緒に行うことで、普段の授業等ではあまり見ることができない、興味や関心がやる気となり、目を輝かせて活動をする子どもたちの姿を一年間、間近で見ることができた。活動を行うことで、子どもたちの姿を見つめることができたし、学生自身がその姿についてそれぞれ考えたり悩んだりする契機となった。子どもたちの成長に合わせて、少しずつではあるが、学生も成長することができたのではないだろうか。

２．２　農家先生の姿から学んだこと

農家先生は、子どもたちや私たち学生に多くのことを教えてくださった。農家先生と一緒に活動をしていくなかで、加藤悦子は、「農家先生は子どもに何を聞かれても答えられている点がとても素晴らしいと思う。『これは何の草？』『これ何？』と子どもに聞かれたら、『これは……』とその特徴を簡単に言っていた。そんな知識豊富な点が毎回活動に参加すると、私も勉強になるし、自分も子どもに様々なことを教えてあげられるように、勉強しなければいけないと実感する」と感じている。

さらに、山崎友美は農家先生の姿を教師の姿と重ねながら、「ただ知識として知っているだけではなく、日頃から農業に携わり、身をもって経験したために身についている知識であるからこそ重みがあり、いつでもアウトプットできるのだなということを感じた。農家先生の姿をみて、教師も多くのことを身をもって経験していなければ、子どもたちに語れることはできないなということを学んだ」と述べている。

子どもたちに物事を教える立場である教師を目指す私たちにとって、このような農家先生の

姿はとても尊敬すべきものである。農家先生の農業や、自然に対する知識の豊富さには驚かされるばかりで、私たちもとても勉強になった。私たち学生もいつかそのように子どもたちに様々な学びを与えられるような存在になりたい。

また、農家先生は私たちの目には触れないところにおいても苦労があったり、配慮をしてくださったりしていた。

例えば、「作業のための道具の準備や畑作り、植えてから収穫までの手入れ、毎回出してくれるおやつなど」(田村弘樹)や、より具体的な例では「(おやきの活動では) 具のあんこはあらかじめ丸く整えられていたり、包みやすいナスを用意してあるなど、農家先生の配慮がうかがえました」(太田真美)などと、農家先生の細かい心配りを多くの学生が感じていた。職員会議に出席した宮川はるなは、「(職員会議では) 子どもたちの学びや安全を第一に考えて活動を企画している」と感じている。子どもが参加する企画を計画する時は、何よりも安全を考慮しなければならないということを改めて考えさせられた。このように活動の中の様々な場面で農家先生方の温かい配慮や支援を感じた。須坂の毎回の活動がスムーズにかつ安全に行えるのは、こうした農家先生方の見えないところでの努力があったからであると強く感じる。

２．３　保護者の姿から学んだこと

「(豊丘離山に登り、急な道を降りる場面で)『大丈夫、ズボン汚して泥だらけになっていいからお尻で滑り台みたいに降りてごらんなさい』。お母さんのとてもやさしい言葉がけにあたたかさを感じました。親子で協力したり、助け合ったりする活動は、こういう自然体験の中でもできるんだなということを学びました」(太田真美) という学びをした学生がいる。

一方、「大人は子どもの見本であり、間違ったことをした時は、正してやれる存在でなければならないということを学んだ」(山崎友美) というように親の子どもに対する愛情を感じるとともに、優しさという愛情だけでなく、ときには厳しい愛情も必要だということを感じている学生もいる。田村弘樹は、「普段の生活では触れ合うことのできない自然や人に積極的にかかわらせていくことはいいと思います。また、私自身も子どもの親としての大人と接する機会はあまりないので、そのような親たちと話したり姿を見たり良い機会になっています」と感じている。

このように、普段関わることが少ない保護者との関わりを経て、保護者から子どもたちと接するときの姿勢を学んでいる学生もいる。保護者の方が活動に参加し、一緒に子どもたちと活動したり、活動を見守ったりする姿を見ることで子どもたちはじめ学生も多くのことを保護者の方々から学んでいる。時には炎天下の中、汗をかきながら必死に作業をする子どもに優しい声をかけたり、子どもがいけないことをしていたら叱ったりすることで、子どもに対して真の愛情を注いでいる存在が保護者なのではないかと思う。子どもたちだけではなく、保護者の方々が積極的に活動に参加することが信州すざか農業小学校豊丘校の非常によいところだと思う。

２．４　他の学生の姿から学んだこと

須坂には毎回スタッフとして色々な専攻の学生や、他大学からの学生が参加してくれた。その中で他の人の活動の様子を見て学んだり、自分の行動について考えさせられたりする機会が多々あった。それは、例えば、学生が子どもたちと接する時注意している場面や工夫している場面などが挙げられる。

宮川はるなは、「年齢や性格など、本当にさまざまな子どもがいる中で、(多くの学生は)そ

れぞれの子どもに対するコミュニケーションのとり方が少しずつ違うように感じました。元気のいい子とはいっしょになって遊んだり、一方おとなしい子には寄り添っているだけであったり。学生がそのような接し方をしていたことが、子どもたちにとっても活動しやすい雰囲気をつくり出していたのだと思います」ということを他の学生を見て学んでいた。そういった子どもたちへの接し方をするとともに稲玉恵美は、「一人の子どもに寄り添うことと同時に、全体を見、その先のことを考えていくことが必要なのだ」と指摘している。

また、子どもの注意を引きつけるために様々な工夫をしていた学生も多かった。例えば、「子どもの目線になるためにしゃがんで話をしたり、子どもと同じように、または子ども以上に興味を持って率先して作業したり、子どもを集合させる時“５・４・３・２・１”などと数を数えながら喚起したりしていた」(山崎友美)。このように自分以外の他の学生の姿を見ることで、互いに多くのことを学び得ることができた。

須坂に初めて参加してくれた清泉女学院短期大学の丸田かおりは、須坂の活動に参加する信大の学生の姿を見て、「信大の学生さんは子どもたちからも役員の方々からも信頼されていて、子どもと大人をつなぐ橋渡しのような、大きな存在なんだなと感じました。子どもにとって年が近い学生は、遊び相手にもなってくれる頼もしい存在。大人の保護者や役員の方々にとっても、同じことがいえるのだと思います。(中略) この様な活動が身近な地域にもあれば、もっと多くの方々にも参加してもらえるし、地域が活性化することで子どもも大人も安心して暮らせる地域になるのではないかと思います」と述べている。

このような意見を聞き、私たち学生は、子どもと子ども、子どもと大人、子どもと自然が相互に関わりを持つことができるようなお手伝いやサポートがこれからもっと積極的にできるように心掛けていく必要があると強く感じた。

３．改善点

今年は、リフレクションシートの改善に取り組んだ。昨年は子どもたちのリフレクションシートを書く時間が設けられていなかったため、用紙の大きさをＢ５の半分だけにしたり絵だけを書かせるようなものにしたりしていたが、今年はリフレクションシートを書く時間を設けていただいたので、子どもたちが活動に参加してどんなことに興味を抱いたのか、どのようなところが大変だったのか、活動の中で何を学んだのかを知るために、楽しさを示す数値をあらわすような図や学んだことや大変だったことを書くスペースなどをたくさん作ることにした。しかし、書くカテゴリーが多すぎて子どもたちが何を書いてよいのかわからなくなってしまい最終的にはらくがきに終わってしまったり、ほとんど書かずに提出したりする子どもが出てきてしまった。そのため、本来の目的であった、「子どもたちが農業の活動に参加してどのようなところに興味・関心を示すのか」を知り得ることができなくなってしまった。なので、子どもたちが活動を振り返る際に、質問が理解できるように質問を簡略化し、質問事項も減らし、「今日の思いでシート」という名前にして、活動の思い出を文章と絵で表す様式に改善した。来年度は子どもたちにリフレクションを書いてもらう時に、質問をわかりやすいように簡略化したり、知りたいことを子どもが簡潔に書いたりできるような項目を設け、より子どもたちの思いを引き出せるようなリフレクションシートを作成してもらいたいと思う。

また、学生の活動への関わり方にも改善すべき点が多々あった。「他のプラザのように学生が企画するものではないので、かかわり度が低いことが気になっています。やはり農家先生や

市の方が主体で運営しているので、学生が下手にでしゃばったら逆に迷惑や面倒をかけてしまう」（田村弘樹）、「学生スタッフが『スタッフ』という形でしか関われていないので、もっと積極的に取り組んでいってもいいのかなと感じました」（宮川はるな）という意見からわかるように、学生の活動は農家先生の補助的な位置にあった。子どもと同じ位置にいて活動に参加して、必要に応じて仕事の補助として子どもの整列や作業への促し等があった。他のプラザと比べると、学生が主体となって活動内容を計画して、それを運営するといったことは全くといっていいほどない。そのような中で、唯一学生が自ら調べたことを発表する御射山祭りは「御射山祭りの紹介はささやかながら学生スタッフとして関われている感じがしました」（田村弘樹）、「（御射山祭りについての紹介をしてくれと依頼され調べていくうちに）農家先生が子どもたちに（御射山祭りを）伝えてほしいという気持ちを受け取ることができ、子どもたちのためになんとかわかりやすく、おもしろく、伝えたいと思い準備ができた」（太田真美）という意見があるように主体的に学生が活動を企画する主体にまわることで、いつも以上に主体的に活動に参加する意欲を高めることができた。そのため、今年度は御射山祭りの紹介だけではなく、活動中（収穫）の注意点や活動内容を絵にまとめ農家先生の説明とともに提示する機会をもらったり、どんど焼きの活動では、どんど焼きの由来を紹介する時間をもらったりと、昨年より主体的に関わることができるように取り組んできた。来年度はさらに今年度より主体的に関わることができるように、農家先生や事務局との事前連絡や職員会に参加してコミュニケーションを多くとり、より深い信頼関係を築けていけたらよいと思う。

4．感　想

昨年のプラザ長である稲玉恵美は、「今まで関わることがなかった人々が関係をもつことによって新しい何かが生まれた。発足２年目のこのプラザは、着実に前に進んでいる」と言っている。この発言の裏づけとして、今年度は活動の見える部分として農家先生や事務局とのコミュニケーションの充実や、活動に際して学生が説明する機会が増えたこと。また、活動の見えない部分（学生個人の学び）として子どもや農家先生、保護者、そして学生同士からの学びあいが学生用リフレクションシートから昨年にも増して見ることができた。このように何らかの学びあいが活動に関わる全ての人々にあると感じる。他者との関わりは人間の成長にとって一番大切なことだと思う。

私たちは１年間にわたって、信州すざか農業小学校豊丘校に参加させていただいた。あっという間の１年であった。今でも晴れたぽかぽか陽気の中、みんな泥だらけになって田植えをしていた姿を思い出す。田んぼに行くまでの笑顔とは違い、恐る恐る不安そうな顔をして一歩を踏み出す女の子。その横で寄り添っている学生。その様子を見守る保護者の方。田んぼの中では、農家先生がニコニコしながら待っている……。しばらくすれば、その子から笑顔がこぼれ、泥だらけになりながら苗を植えている。苗の植え方を農家先生に教えてもらいながら、かえるを見つけたり、足踏みしてみたり、自然を体で感じていた。子どもと学生だけではなく、農家先生や保護者の方々、須坂市教育委員会の方々が相互に関係を持ち、一つの活動を作り上げているのが、信州すざか農業小学校豊丘校の特徴だと思う。

そして、活動は必ずしも農家先生から子どもへの教授の場ではない。子どもが発すること一つ一つが学生を刺激するように、子どもは農家先生や保護者の方々、教育委員会の方々をも刺激しているはずである。「互いに学びあう場＝信州すざか農業小学校」といえる。

すざか農業小学校は、農業という活動を媒介にして、下は未就学児童から高齢者まで幅広い年齢層が集まり１つのことを行なう。その中で活動に関わる各個人が友達や周囲の大人と交流することで、お互いに学びあう場であると感じる。このような世代間交流ができる場がもっと身近な地域にも浸透してほしいと思う。

◇地域社会からの評価

農業を体験して、食べ物に感謝する気持ちを養う

信州すざか農業小学校豊丘校校長　**羽生田郁雄**

農業小学校は農業の大切さと、食べ物に感謝する気持ちを養う目的で、平成 17 年度に須坂市豊丘地区に開校し、今年で３年目を終了しました。この農業小学校のある豊丘地区は、須坂市の東部に位置し、東は上信国境の山々にくぎられ、北側山寄りの川に沿ってほぼ東西に集落が連なる農村地域です。水稲・野菜・酪農などの小規模農家が多いことが特徴でもあり、高齢化や後継者不足による遊休荒廃農地の解消が課題となっている地区でもあります。

そんな中、今年も卒業式を終え、改めて 19 年度を振り返って見ますと、農業小学校について、18 年度に新聞やテレビで報道されたため、定員数を超える入学申込みがありました。また、10 月には、村井仁長野県知事が授業に参加され、子どもたちと一緒にサツマイモ堀りを体験していただきました。このように「農業小学校」は、広く須坂市民に知れわたり、よりいっそう、関心が寄せられ活動が理解されたと自負しております。また、県内外まで話題を発信でき、注目と期待が寄せられました。

ところで、農業は、その時の気候に大きく左右され、たとえ肥料を多くやっても、消毒を一所懸命やっても、思うように収量は上がるものではありません。昨年の夏は、雨の降る日が続き、農作物の生育について心配されましたが、作物の生育もなんとか平年並みになり、収穫の秋には、一年間頑張ってやった成果が表れ、「どうしてこんなにでっかいの」、「どうしてこんなに重たいの」（大根の収穫）と、子どもたちの歓声があがり私たちも大変嬉しく思いました。子どもたちが引きずるほど野菜を袋に詰め、大切に大切に持ち帰る姿を見る時に歓喜が伝わって来ました。また、農産物の販売も子どもたちが２回ほど実施しましたが、自分たちが生産したものを販売することも勉強になったと思います。普段の学校や家庭で体験できない貴重な体験が大きな成果をあげ、子どもたちは「生きる力」を育むことができたことと思います。食に対する感謝と喜びを身につけ、この１年、自ら農作業を率先して頑張って来た子どもたちは、とても強くてたくましい、精神力と創造力を自分のものにしたに違いありません。また、家庭で見られる子どもの変化については、「農業小学校での授業内容を話してくれるようになり会話が増えた」、「嫌いだと言っていた野菜を食べるようになり、食事を残すことに対しても、もったいないという意識が出てきた」といった感想が、保護者からは、「自分自身も農作業が、初めてなので、とても参考になってよかった」との感想が聞かれました。

しかし、農家先生が授業以外の日も、農地や作物の管理をしたり、授業に備えて用意をする必要があり、かなりの負担となってしまったことは、これからの課題です。

信州大学の学生スタッフの皆様には、お兄さんお姉さんとなり、子どもたちをまとめていただきました。また、「御射山祭の伝統行事」や「まゆだまづくり」など子どもたちにわかりや

すく説明していただきました。子どもの目線で活動していただきましたので、農家先生の目の届かない部分も含めて協力をいただき大変助かりました。子どもたちも、学生スタッフの皆様と一緒に農作業をすることを楽しみにしているようでした。

今後の要望としましては、毎回授業に参加していただき、決まった学生さんが各班に数人ついていただければと考えております。そうすることによって、いっそう学生スタッフの皆様と子どもたちと農家先生の交流が進み、よりよい授業になると考えられます。子どもは遊びの中で育つことから、楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせてあげたいと思います。

この1年間、ご支援ご協力をいただいた農家先生、応援してくださった保護者の皆様方、土井先生（信州大学教育学部教授）をはじめとする学生スタッフの皆様方の今後の活動に期待し、御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

第6回 YOU 遊フェスティバル

実行委員長　常盤千明（教育実践科学専攻３年）
副実行委員長　大高真理（教育実践科学専攻３年）

○実行委員名（９名）

常盤　千明（実３）　大高　真理（実３）　春原　圭佑（実３）　江花　　悠（実３）
肥留間淳也（理３）　高池　亮輔（保２）　宮川はるな（言２）　中川　　茜（生２）
原　　耕平（理２）

○学生スタッフ名

常盤　千明（実３）　大高　真理（実３）　春原　圭佑（実３）　江花　　悠（実３）
肥留間淳也（理３）　高池　亮輔（保２）　宮川はるな（言２）　中川　　茜（生２）
原　　耕平（理２）　野口　洋憲（社３）　伊藤　香澄（実２）　笠井　悠太（理２）
大家恵梨子（社３）　青木　智博（実３）　齋藤　有希（言３）　宮澤　広樹（実２）
押江　愛実（社３）　河名　智子（社３）　田村　将太（実３）　藤岡　泰裕（実３）
石井絵理子（社３）　寺島　　薫（玉川大１）洞出　直美（実３）　一條　まな（言２）
細田　有希（生３）　鈴木　亮子（生３）　永塚　達也（障４）　清水　亜美（実４）
上田　雄介（理３）

○参加者数（総勢　約678名）

子ども　約280人　　保護者　約120名
学生スタッフ　約270名　　ＯＢ・ＯＧ　３人　　地域協力者　５人

○「YOU遊フェスティバル」の概要

「YOU 遊フェスティバル」とは、年に一度、教育学部のキャンパスに子どもたちを集めて講座を開き、子どもたちと共に活動するイベントである。しかし、その中でやる内容は自由。毎回、運営をする実行委員会の中で、今年の「YOU 遊フェスティバル」をどういうものにするかという話し合いから始まり、その中で決まっていくので、毎年やる内容は異なる。

さて、昨年大成功を収めた第５回「YOU 遊フェスティバル」に引き続き、今年も「YOU 遊フェスティバル」をやりたいという学生の願いから、５月に９名による本部会が発足した。本部会は発足してから、週に一回の話し合いの中で、第６回の「YOU 遊フェスティバル」をどういうものにしていきたいのか、どういうことを大切にしていきたいのかというフェスティバルの核となる願いの部分から考えていった。そして今年は、「多様な他者とのかかわり」を大切にしていきたいという願いを持った。子どもたちには、大学生のお兄さんやお姉さん、保護者の方に出会い、共に活動することを通して、人との関わりの楽しさや素晴らしさ、学んだり協力したりすることの楽しさや素晴らしさを感じてほしい。学生には、沢山の多様な他者が集まる機会であるので、沢山の方と意見交換をして、自分の視野を広げてほしい。また、保護者の方や地域の方には、「YOU 遊フェスティバル」を知ることが、「YOU 遊世間」の活動を広げるきっかけとなり、みんなで子どもたちを育てていくという意識を高めたい。以上のような願いをもとに、今年の「YOU 遊フェスティバル」の企画は構築されていった。

今年の「YOU 遊フェスティバル」で昨年と大きく違った点は、「YOU 遊フェスティバル」を二日間にした点である。毎年、「YOU 遊フェスティバル」は、12 月に一日だけ行っていた。しかし、それでは学生同士で話し合ったり、意見交換をする時間が十分になく、多様な他者との関わりの中でも、学生同士間の関わりがあまりないという意見から、今年は二日間にして、ディスカッションや講座の準備の時間・前夜祭や後夜祭を設け、学生同士での関わりも大切にしていこうということになった。そのため、今年は、初めて「YOU 遊フェスティバル」を二日行うことになり、12 月8日（土）と9日（日）に開催されることとなった。

また、「多様な他者との関わり」を重視することから、他大生にも声を積極的にかけようということになり、今年は多くの他大生が参加してくれた。信州大学の学生以外に、長野県短期大学（12 名）、清泉女学院短期大学（16 名）、茨城大学（12 名）、文教大学（13 名）、上越教育大学（4名）、熊本大学（2名）、玉川大学（1名）の学生が参加してくれた。このことから、「信大 YOU 遊世間」の活動を客観視して捉えることができたし、他大学での活動などを知るよい機会となった。また、他大生の他に、今年は保護者の方にも積極的に参加してほしいと思い、子ども募集をする際に、私たちの「多様な他者とのかかわり」を大切したいという願いを広報紙に載せたところ、その願いに共鳴してくれた多くの保護者の方々が参加してくれた。

さらに、今年は、一日目に信濃教育会教育研究所副所長である牛山栄世先生をお招きして、講演会を行った。これは、「「YOU 遊」の活動は、実践に偏りがちな面があるので、普段「YOU 遊世間」の活動をしている学生は理論の部分が足りない。だから、理論と実践を結びつけるという意味でも講演会をしていただき、教師・教育ということについて考えることは必要なのではないか」という意見があがり、講演会を行うこととなった。

こうした本部会の想いから、第6回「YOU 遊フェスティバル」は行われた。以下は当日の日程・内容の詳細である。

＜平成 19 年 12 月 8 日（土）＞

9：00～　学生集合
9：30～　あいさつ　　信州大学教育学部副学部長　糟谷英勝先生
10：00～　講演会　　講師　信濃教育会教育研究所副所長　牛山栄世先生
　　演題『学生時代に培うべき教師の専門性』
11：10～　学生同士のアイスブレイク
11：30～　ディスカッション（19分科会にわかれて行います。）

＜司会者一覧＞

第1分科会…中川　茜（生活2年）	第11分科会…布山奈津美（言語3年）
第2分科会…鈴木　亮子（生活3年）	第12分科会…齋藤　有希（言語3年）
第3分科会…藤岡　泰裕（実践3年）	第13分科会…上田　雄介（理数3年）
第4分科会…髙池　亮輔（保体2年）	第14分科会…野口　洋憲（社会3年）
第5分科会…宮川はるな（言語2年）	第15分科会…洞出　直美（実践3年）
第6分科会…江花　悠（実践3年）	第16分科会…太田　真実（言語2年）
第7分科会…大家恵梨子（社会3年）	第17分科会…石井絵理子（社会3年）
第8分科会…一條　まな（言語2年）	第18分科会…青木みなみ（障害3年）

第９分科会…原　　耕平（理数２年）　　第19分科会…肥留間淳也（理数３年）
第10分科会…春原　圭佑（実践３年）
12:45～　講座ごとにわかれて活動・準備
16:30～　前夜祭

＜平成 19 年 12 月９日（日）＞

7：30～　学生集合	13：45～　閉会式
8：30～　子どもたちの受付開始	14：45～　子どもたち解散
9：00～　開会式	15：00～　片付け・反省会
9：45～　講座ごとの活動	17：00～　後夜祭

○講座一覧

２日目に行われた講座は以下の 13 講座である。

番号	講　座　名	講 座 長 名
1	宝を見つけるのは君だ	野口洋憲（社会・３年） 伊藤香澄（実践・２年）
2	オリジナルボートを作ろう	笠井悠太（理数・２年）
3	レッツ　プレイ　ハンドベル	大家恵梨子（社会・３年）
4	ピタゴラそうちをつくっちゃおう	青木智博（実践・３年） 齋藤有希（言語・３年）
5	みんなで楽しくソーラン節をおどろう	宮澤広樹（実践・２年）
6	ぼく・わたしはケーキやさん	河名智子（社会・３年） 押江愛実（社会・３年）
7	かえってきた！！　ペーパーガン・シューティング	田村将太（実践・３年） 藤岡泰裕（実践・３年）
8	野外クッキング♪♪	石井絵理子（社会・３年） 寺島　薫（玉川大学１年）
9	きょうは、ぼく・わたしが HERO なりきり隊	洞出直美（実践・３年）
10	おやこでおやき	一條まな（言語・２年）
11	うどん名人になろう！！	細田有希（生活・３年） 鈴木亮子（生活・３年）
12	みんな集まれ　わんぱく運動会	永塚達也（障害・４年） 清水亜美（実践・４年）
13	第２弾　ロケット	上田雄介（理数・３年）

○講座内容

1　講座名　宝を見つけるのは君だ

講座長　野口洋憲（社会科学教育専攻３年）
講座長　伊藤香澄（教育実践科学専攻２年）

「宝を見つけるのは君だ！」の講座では、海賊団「チーム・ザビエール」が信州大学に隠した財宝を見つけだすという企画でした。場所は教育学部の敷地すべてを使い、財宝を手に入れるためには、教育学部のいたるところに隠された暗号や、財宝を守る「番人」が用意した課題を解決しなければなりません。子どもたちをあらかじめ３～４人のグループに分けて、そこに保護者と学生が一人付くというようにし、合計で８つの「探検隊」を結成しました。そして、８つの探検隊にそれぞれ暗号を用意し、それぞれが違うルートをたどってお宝に到達できるようにしました。

準備の段階では、暗号の難易度が子どもに適したものかなどいろいろと試行錯誤しましたが、当日は、簡単に暗号を解いていってしまうグループや、立ち往生してなかなか進めないグループがあり、グループごとでばらつきがありました。

感想では、子どもだけでなく一緒に参加した保護者からも「楽しかったよ。ありがとう。」という言葉をいただいた。宝探しを通して学生、保護者、子どもの三者の交流がしっかりとあったからの言葉だったのではないかと感じた。

2　講座名　オリジナルボートを作ろう

講座長　笠井悠太（理数科学教育専攻２年）

この講座では、簡単にいえば……一人ひとりに自分だけのオリジナルボートをつくってもらいました。

曲げてあるベニア板のパーツを一つひとつくっつけてボートの形を作ります。

できたら、ボンドが乾く間……W館を使い自分たちの船の飾りを手にいれるためにちょっとしたゲームに挑戦しました。

①パズルゲーム

ダンボールであるキャラクターをくりぬいてつくったパズルにぴったり合うキャラクターをはめていくゲーム

②ストローつなぎゲーム

上から石を落とし…ある決められたところまでストローをつないで石を運ぶゲーム

③はかりゲーム

いろんなものを使って重さをぴったり100グラム（プラスマイナス５ｇまで　なら可）というゲーム

④動物探しゲーム

W館４階に16種の動物たちを隠しました。それを10種見つけたら合格のゲーム

⑤一円落としゲーム

水槽の中に小さいビーカーを用意し上から落とした一円を上手にビーカーにいれたら飾りを

ゲットのゲーム

ゲームをやり、お昼を食べ、その後は、一人ひとりオリジナルの追求ということでボートに手に入れた飾りと自分たちでつくった飾りをつけていきました。

3　講座名　レッツ　プレイ　ハンドベル

講座長　大家恵梨子（社会科学教育専攻３年）

ハンドベルでは講座の４時間を午前と午後に区切ることで活動内容にメリハリを持たせ発表に臨もうと考え計画を練りました。

午前中は「コラージュ」という貼り絵を行いました。子どもも大人もそしてスタッフも全員が参加して時間をオーバーしてしまうくらいのめり込んでしまいました。特にお母さん方（二人）が作った作品は子どもの作品よりも時間をかけ丁寧に貼っていたのが印象的でした。スタッフで一人だけ障害児に付き添いながら「のり」や「ハサミ」の使用時に十分なサポートをしてもらいました。作品は発表で披露し、最後に持って帰ってもらいました。

午後はハンドベルを練習し発表に備えました。私は障害児があれだけ大勢の人たちの前で自分の役割を果たすことができるかとても不安でしたが、練習中は一生懸命ベルを鳴らそうとする姿を追うことができて演奏の中身よりも満足しています。ハンドベルの練習方法として和音とメロディにわけて練習し、和音は障害児と低学年の女児（一人）でメロディは他の参加者で行うことにしました。その合間に休憩を取り入れながら完成を目指すことができたと思います。

4　講座名　ピタゴラそうちをつくっちゃおう

講座長　青木智博（教育実践科学専攻３年）
講座長　齋藤有希（言語教育専攻３年）

ピタゴラ装置は、NHK 教育テレビで放映されている「ピタゴラスイッチ」という番組で見ることができます。ビー玉などが、様々な仕掛けの中を通り抜け、ゴールへと運ばれていきます。大人が見てもその魅力にとりつかれること間違いなしです。私たちもその魅力にとりつかれるかのようにピタゴラ装置を作ることに子どもたちと一緒に楽しみました。

当日は、学生が基本の装置を 10 個あらかじめ作っておき、子どもたちとその装置の間をつなぐ作業を行い、一つの教室全体を巡る、巨大なピタゴラ装置を作りました。子どもたちに家から使ってみたい道具を持ってきてもらいました。ビー玉の変わりに転がるものとなるタイヤの付いたおもちゃや、道になるプラスチックの板など、面白いものを持ってきてくれる子どもが多かったです。それらの道具とともに、学生が用意をしておいた色々な道具や材料を組み合わせながら、子どもたちの自由な発想で装置をつなげました。

装置をつなげるためには物理的な思考が必要であり、難しいと感じる子どもも多かったようです（なにせ、大人でも頭を抱えてしまうほどのものです）。それに、時間もかなりおしてしまい、最後に装置を一つにつなげるときにも、何度も途中で止まってしまいました。けれども、なんとか装置がゴールにたどり着いたとき、会場全体が歓喜の声に包まれ、子どもも学生も保護者さんも、みんなが一つになりました。みんなが笑顔でした。

5　講座名　みんなで楽しくソーラン節をおどろう

講座長　宮澤弘樹（教育実践科学専攻２年）

講座内容：ソーラン節を教えて子どもたちと踊る。
やったこと：アイスブレーク、ソーラン節の練習、発表の準備、発表。

6　講座名　ぼく・わたしはケーキやさん

講座長　河名智子（社会科学教育専攻３年）
講座長　押江愛実（社会科学教育専攻３年）

この講座では、子どもたちと一緒に『ケーキ』を作りました。子どもたちには、ケーキを作る過程で自分で生地からつくる楽しさを、そして、作る作業を通して学生・保護者の方々・他の同年代のお友だちとのコミュニケーションを取れることを狙いと定めました。

ケーキ作りは、あらかじめ分けられた材料を混ぜ合わせる作業から始まり、メレンゲを作る作業は大変なため協力作業が必要となりました。出来上がったものをロールケーキの型に厚めに流し込むことで厚さ３㎝ほどの生地を焼き上げます。そこから、子どもたちが好きな形にカットして、自分のオリジナルのケーキをくみたてました。固定の枠にとらわれないで子どもたちの好きな形を作ることができていました。お菓子の家、アンパンマンの顔、クリスマスツリー、雪だるま、キリン、たくさんの小さいケーキなど。

保護者の方々には、子どもたちが真剣に取り組む姿を見ていただくことができました。また、一緒に一つの作業に取り組むことでコミュニケーションがとれ、協力しあうことができました。

7　講座名　かえってきた！！　ペーパーガン・シューティング

講座長　田村将太（教育実践科学専攻３年）
講座長　藤岡泰裕（教育実践科学専攻３年）

「かえってきたペーパーガン・シューティング」は、去年に引き続き行った講座である。小学生全般を対象にして行った。ペーパーガン・シューティングとは文字通り、紙の弾を使った射的のことで、ゴム鉄砲の改良版のことである。

去年のペーパーガン・シューティングでは、割り箸を銃身として子どもたちに一から作ってもらう形式をとってもらったが、割り箸がすぐに曲がってしまう、弾がよく飛ばないという理由から今年はホームセンターに売っている木材を使い、製作の過程を楽しんでもらうというよりは、それを使ったゲームを楽しんでもらいたい、という趣旨で今年の「かえってきたペーパーガン・シューティング」を開いた。

かと言って子どもたちにも組み立ての過程を楽しんでもらいたかったので、当日は子どもたちを３～４人の班に分けて学生の付き添いのもと、トンカチなどを使って製作を楽しんでもらった。

ここまでの作業を午前中に行い、午後からは１～３年、４～６年に分かれて、ゲームを行った。両方とも基本的には射的をチームごとに競うということを行った。両方とも子どもたちが

熱中する姿をみることができた。

8　講座名　野外クッキング♪♪

講座長　石井絵理子（社会科学教育専攻３年）
講座長　寺島　　薫（玉川大学１年）

野外クッキングの活動では、半日の活動を通して、班ごとに自分たちの昼食を作りました。メニューは、バウムクーヘンとポトフでした。事前に学生スタッフが集めておいた木の葉、小枝、薪、新聞紙を使って、自分たちで火を起こし、それと同時に、ポトフとバウムクーヘンの調理を進めていかなくてはならないので、班のみんなで協力をしなければなりません。子どもたちだけでなく、保護者の方も火力を保ち続けるために、煙と格闘しながら活動していました。前日、当日と雨が降っていたので、小枝や薪が湿ってしまっていて、なかなか火がつかず、ポトフがなかなか煮えない班もありました。しかし、自分たちで調理したポトフが食べたいと、最後まで調理を続けていました。女の子が多かったので、火をつけたりするより調理に興味があるのかなぁと思っていましたが、煙いから嫌だといいながら、ずっと火の番をしている子もいて、とっても頼もしかったです。

普段用いない調理方法で料理をすることで、子どもたちも保護者も学生も悪戦苦闘しながらも、一つのものを作り上げることができたと思います。

9　講座名　きょうは、ぼく・わたしがHEROなりきり隊

講座長　洞出直美（教育実践科学専攻３年）

開会式が終わった時点からスタッフが図書館前で待機し、子どもたちが変身する（ペイントする）理由付けを行った。それは、子どもたちを誘導するピンクレンジャーが悪者に捕まって、その悪者にスタッフが戦いを挑むが、変身していないスタッフは悪者に倒されてしまうというものだ。そこで、子どもたちは、「変身していない人間は悪者に勝てないけど、変身すれば勝てるかも」という考えを持ち、変身しようという流れになる。また、一致団結すればパワーがたまるということを理由に、アイスブレイクでは、新聞を輪にして隣の友達と手をつないだままくぐるというゲームを実施した。そして、パワーをためて、いざ変身（ペイント）へ！！

ペイントは、机に子どもたちの分の絵の具、ペンを用意しておいた。そして、絵の具の使い方をスタッフが簡単に説明し、しばらく各自に任せた。そのあと、全体の前でスタッフが実際に顔にペイントをしてみせた。子どもたちは、鏡をみながら、自分の手で絵の具を塗ったり、早くできた子どもは画用紙で爪をつくったり、カツラをつくったりして変身。新聞紙で武器を作る子どももいた。

最後には、写真入りのヒーローメダルを首から下げて、体育館の全体会で発表を行った。

10　講座名　おやこでおやき

講座長　一條まな（言語教育専攻２年）

対象：３歳～小６の子どもと親。基本的に親子１組につき学生１人で活動
やったこと：
アイスブレイク（○○の命令、みんなでじゃんけん）
おやき作りの説明（紙芝居のようにしてひとつひとつの工程を説明）
おやき作り（生地つくり、具（なす・じゃがいも）作り、みその味付け、具を生地で包む）
おやきクイズ（いつからおやきが食べられているのか・おやきの由来・おやきトリビア）
おやき劇（紙芝居、劇、人形劇を通しおやきについて知ってもらう）
お昼ごはん（おやき・お味噌汁（スタッフが準備）・ナスとじゃがいもの味噌いため）
おやっ記作り（子ども一人ひとりに感想を絵日記にしてもらう）

11　講座名　うどん名人になろう！！

講座長　細田有希（生活科学教育専攻３年）
講座長　鈴木亮子（生活科学教育専攻３年）

ライフプランニング分野に所属していることもあり、実際に原材料から何かをつくる、という体験を子どもたちと一緒に味わいたいと考えた。そこで小麦粉の状態から“うどん”をつくるには、まぜて、こねて、踏んで、のばして、切って、ゆでて……という一連の作業が経験でき、とても楽しいのではないかと考えた。「子ども・学生・保護者が一緒になって楽しくうどんを作ろう！」という目的のもと、講座がスタートした。

準備段階では、講座長二人で、まずはうどん作りを何度も何度も行った。２週間は自分たちで作ったうどんを食べ続けたと思う。二人とも、この「うどん講座をよりよいものにしたい」との思いから何度も何度も企画を練り直し、夜遅くまで準備に励んだ。

そして迎えた当日では、朝、緊張した面持ちでやってくる子どもたちを迎え、子ども・保護者・学生スタッフの計70名弱での活動がスタートした。小麦粉に塩水を加え、混ぜ、「ウワーすごい！」と言っている姿。楽しそうにうどん生地を踏む姿、順番を決めてうどんを切る姿など、子どもたちの生き生きした姿を見ることができた。活動は子ども・保護者・そして学生スタッフのたくさんの笑顔の中に活動が進んでいったように思う。「楽しかった！」「家でもまた絶対作る！」との子どもの言葉。「準備お疲れ様でした。家でもまた作りたいからレシピがほしいんだけど……」との保護者さんからの言葉。「うどん講座で活動ができてよかった！」との学生スタッフからの言葉。子ども・保護者・学生スタッフが一つになった活動だったと心から思った。本当に一生、忘れることのできない講座になったと心から感じている。

12　講座名　みんな集まれ　わんぱく運動会

講座長　永塚達也（障害児教育専攻４年）
講座長　清水亜美（教育実践科学専攻４年）

子ども35名、保護者15名、そしてスタッフ26名の計76名が４つのチームに分かれ、運動会を行いました。種目は、普通の運動会では行われないようなものばかり。ヒモを腰につけ、相手のヒモを奪い合う「シッポサバイバル」や全員参加の「だるまさんが転んだ」、体育館という場所をいかした「雑巾がけレース」などがありました。

どの競技でも子どもたちの表情は真剣そのもの。競技に集中している目、初めて出会った友達を応援している目はとても印象的でした。また、子どもたちがスタッフや友達のお父さん・お母さんと笑顔で会話している姿、チームの友達と一緒に喜んだり、チームの友達をなぐさめたりしている姿に、純粋さを感じ、心が温かくなりました。

子どもたちにとって、いつもとは違った、ちょっと変だけど面白い、そんな運動会になっていたら嬉しいです。

13　講座名　第２弾　ロケット

講座長　上田雄介（理数科学教育専攻３年）

ペットボトルや牛乳パックなど身近にあるものからペットボトルロケットを子どもと参加した保護者一人ひとりが１機ずつ製作した。全体に作り方の流れを説明し、その後子ども２人にスタッフが一人というかたちで製作にはいっていった。作り方のポイントは製作を進めていく中で、その都度全体および各班に説明して回った。事前にスタッフ全員に作り方を教えておいたが、さらに各班にペットボトルロケットを実際に１度製作したスタッフを一人ずつ入れておいたので、去年に比べ比較的スムースに説明や製作を進めることができた。午前中にロケットの製作を終え、昼食をはさみ、事前に用意しておいた発射台で午後からは打ち上げを行った。発射台は６グループそれぞれに１台ずつ用意しておいたが、そのうち２台が途中で使えなくなってしまうというトラブルも重なり、何度もロケットを打ち上げるということができなかった。打ち上げ方法は、子どもが空気入れでロケットを打ち上げる準備を行い、学生スタッフがカウントとともにストッパーをはずすという形で行った。その後、教室に戻り感想を書いてもらい、打ち上げに使った発射台を王様ジャンケンをして、持ち帰る子どもを決め活動を終えた。

○講演会内容

学生時代に培うべき教師の専門性

講師　信濃教育会教育研究所副所長　牛山栄世先生
12月8日（土）10：00～11：00
信州大学教育学部西長野キャンパス
報告者　肥留間淳也（理数科学教育専攻3年）
宮川はるな（言語教育専攻2年）

30年以上もの教師生活と教育研究所における御自身の経験の中で感じたこと、考えさせられたことから「学生時代に培うべき教師の専門性」について講演をしてくださいました。教師にはどのくらいの思慮深さが求められるか、また、子どもやその親と向かい合う場面に突然立たされたとき、自分はどう対応するのか…。これらは「教師」という仕事と切り離して考えることのできない、永遠のテーマであるとも言えるでしょう。

1．教師による一言が持つ「重み」　～ハムスターの死から考える～

ある学校の二年生の教室でハムスターを飼っていました。そのハムスターは4月から教室で世話をしていましたが、夏休みになるということで、二日ごとに子どもの家をリレーして飼育することになりました。そして、子どもたちの中の一人M子ちゃんの家にやってきたハムスターは、不意のことからドアに挟まれて死んでしまいました。号泣するM子ちゃん、動転するお母さん。すぐに担任の先生に知らせ、ハムスターの亡骸と共に学校に行きました。M子ちゃんとお母さん、担任の先生は、そのハムスターを学校の敷地内に丁寧に埋葬しました。そのとき、別れ際に担任の先生が言ったこと。それは、「あとはお家の人とM子ちゃんでいろいろ相談してみてください」でした。

この後、M子ちゃんと家族は、先生が言った「いろいろ相談してみてください」ということをどう受け止めたらいいのか、ずっと悩み続けることになりました。そして、結果としては次のようにしたのでした。

夏休み明け、M子ちゃんのお母さんは学級に出向いて、事のてん末をクラスの子どもたちに話し、親子で謝りました。それだけでなく、「いなくなってしまったハムスターだと思ってかわいがってくれたらありがたい」ということで、死なせてしまったハムスターそっくりのハムスターをペット屋さんで買って、教室に届けたそうです。

牛山先生はこの話を知って、さまざまに思いをめぐらせたそうです。あるとき、この話を他の大学で話す機会があり、そこで学生に「どう思いますか」と聞かれたそうです。そこで返ってきた様々な反応の中で、「なるほど」と思ったのは、「ハムスターを各家庭に預ける時点で、何かが起きたときには全責任は私（担任）にあるという風に考えるべきではないか」、というものでした。この出来事は親子にとって消えない傷として残っていくことでしょう。即死させてしまったという出来事はその子の心を罪悪感でいっぱいにさせていたでしょう。もし担任の先生が、「そんなに落ち込まないでください。すべての責任は私にあるのですから」という言葉をかけていたら、M子さん親子の悩みを軽くすることができたかもしれません。親子にとってどうしてよいか分からぬまま悩んだ記憶は、そう簡単に消えるものではないはずです。

2．「専門性」とは何か

「専門性」と聞いて私たちが真っ先に思い浮かべるものは、学問性のようなものでしょう。教師たるもの、現場でさまざまな教科を教えるからには、教科に関わる専門性や技能というものを磨き上げることは基本であり、絶対に必要なことであると、牛山先生もおっしゃっていました。しかし実際の学校現場というのは、先に挙げたハムスター事件のように、その場で即どう向き合うかということが問われる場面の連続です。そういうのは好きじゃありませんとか考えたくありませんとか言っていられないのが教職であり、つまりは、その人自身の人間力や思慮深さが要求される職業なのです。そのような学問性だけでは済まない問題は年々増えてきており、牛山先生と一緒にやってこられた、すばらしい学問性を持った先生がドロップアウトされたこともあったそうです。

そこで、学生時代にはまじめに専門の科目を勉強していればそれで済むのか、ということは大いに考えてほしいとおっしゃいました。教師は、自分の体で学び取っていく活動の方が人間力を培うのではないだろうかともおっしゃいました。何が起こるかわからないようなことに飛び込んでいき、多くの人に出会い交わり、時には失敗し、そこから全身で掴み取っていく学びのようなものがどれほど大切であるかということを教えていただきました。そのような意味で、「YOU 遊世間」の活動の重要さにも、言及されておられました。

3．自分の体で「掴み取る」ことの重要さ　～子どもの言葉から①

諏訪のM小学校に勤めているときのことです。ある日の給食に、諏訪湖で取れたわかさぎを使ったわかさぎの甘辛煮が出ました。地域の子にとってそれが珍しくもないものだから、５年生のクラスでは半分以上が残ってしまい、そのまま調理室へ返すような状態になってしまったのです。そのとき担任の先生が、「調理室のおばさんがみんなのために作ってくれたのにこんなに残しちゃっていいのかな」と注意したそうです。一方で同じ状況を見た一人の男子児童が、「わかさぎがかわいそうだよ。捕ったからには食べなくっちゃ」と言ったそうです。その先生は、児童と自分の言っていることの次元の違いにショックを受けられたそうです。

この男子児童のお父さんは釣りが上手な人で、彼自身もわかさぎ釣りの名人だったそうです。幼い頃から諏訪湖に行ってはわかさぎを捕るコツを父から学び、ときには無駄死にさせたこともあったのでしょう。そのような経験が彼に「わかさぎがかわいそう」と思わせたのでしょう。牛山先生は、ここに、本当に染み込むように自分でつかんだ体験の重さを感じられたそうです。

4．自分の体で「掴み取る」ことの重要さ　～子どもの言葉から②

長野市の山間地にある小田切小学校に勤めていたときのことだそうです。そこでは４年間クラスを持っており、その子どもたちと毎年棚田で米作りをしていたそうです。その米作りは機械を一切使わず、田起しや苗作りから始まり、とにかく収穫し、精米に至るまで一切大人の手を借りずにやっていったそうです。米作りを終えて一息ついた時に、ある女子児童がこう言ったそうです。「私は稲を育てようとしていろいろなことをやってきたけど、収穫ができたっていうことを思うと、よく育ってくれたなあと思う。私たちがやったことと言えば育ちやすいように少しお手伝いをしたことくらいだけど、そのお手伝いと思ってやったことだって稲にとって本当に良かったかどうかは分からな

い。稲が自分の力で育ってくれた気がする」。

牛山先生は、これは先ほどのわかさぎがかわいそうだよと言った子どもの発言と同じで、経験がなければ出ない言葉だと感じられたそうです。自分の体を使って、田んぼの中をはいずりまわって、本気になって稲のためになる工夫を凝らして稲を育てた子どもだからこその言葉の重みを感じたとのことです。

5．自分の体で「掴み取る」ことの重要さ　～子どもの言葉から③

10 年ほど前、附属小学校でおこなわれた冬の公開研究会で見た児童集会での一コマです。それは、児童会で作った遊び場をめぐっていろいろ問題が出てきてしまったから、ルールをつくるかどうかという話し合いでした。それぞれの意見が対立し、どうなることかと思っていると、一年生のある子がぱっと手を挙げて、「あのさぁ、どっちだって分かんないでしょう、だったら少し決めてやってみたらいいんじゃない」と言ったそうです。結局、その集会では、ルールを決めてやってみてそれからまた考えよう、ということになりました。

この発言をした男の子のクラスでは春から羊を飼っていました。そのクラスでは、羊にとって楽しい遊び場は何だろうということを考えたそうです。しかし、羊がどんなことを喜ぶのか分からないものだから、「とにかく色々やって羊の様子を見ながら考えていこう」ということになったそうです。そのクラスの男の子が事も無げに「やってみればいいじゃん」という発想をぱっと出してきた。これは本当に体に刻まれているような生活づくり、それがなせる業なのだなと思われたそうです。

6．「体」で学ぶことの重要性

今回の講演では、「セールスは釣りである」と上司に言われて、営業成績を徐々に上げ始めた営業マンの話もしてくださいました。釣りとは、魚を釣るためにあらゆる工夫をしていき、それを実践の中で確かめながら腕をあげていくものです。釣りを趣味とする彼はそれをふっと思い出し、客をつかむためには単純なことの繰り返しではダメだということに気づき、いろんなことを工夫しながら営業成績を上げ始めたそうです。これも、自分が体でつかんでいる「釣り」がその世界だけで終わっているのではなく、そのことと結び付いて様々な問題の対処にも繋がっているということの一例です。

牛山先生が現在お勤めになっている信濃教育会教育研究所では、12～15 年間教師をしてきた先生方が現場の教職から一年間離れて、自分の教育実践を振り返るそうです。そして、今まで子どもたちとやってきた教育実践を振り返って、新たな課題を見定めてまた現場に帰っていくのだそうです。牛山先生は現場に戻られる先生を見ていて、自分の体でつかむことこそが学びであり、物事が本当に見えてくるのだと思うことがあるそうです。

総合学習の授業で取り上げた「落語」を、実は自分ではやったことがなかった先生が、落語の師匠に弟子入りした話。子どもとの本当の関係づくりについて考えるために、教師面が通用しない保育園に行って、ただの人になって子どもと向かい合ってみたという先生の話。泥団子をいっしょにつくることで生まれる子どもたちとの関係の話。楽器づくりの職人の工房に通い、実際に楽器をつくってみて「ものづくり」の本質を考えるようになった先生の話。老人ホームで一か月間介護の仕事を体験し、お年寄りと触れ合うということがどういうことかに気づいた

先生の話。子どもといっしょになって鯉つかみに熱中する先生の話。様々な例を挙げて、自分の体験を通して物事を理解することの大切さについて教えていただきました。

また、実際に体験するという事とともに、「自然体験の大切さ」も強調されました。「自然体験は不可欠なことだと思います。だって私たち生き物ですから。子どももまず人間である以上生き物です。私たちは自然と無縁に生きられない。だから私は、自然と関わる経験はまず基本だなと思います」。今の私たちの生活は自然離れしていますが、もともと私たちは自然の中で生きてきた生物なのです。にもかかわらず自然と触れ合う環境が少ない中で子どもたちが育っていくことの危険性を考えなければなりません。子どもというのは、自然のものに触れることで生き生きと感覚を発露するようになるのです。虫が怖いという教師がいますが、その教師といっしょに過ごすということは、その子の世界を狭めることであり、子どもたちは不幸せです。自然体験においても自分が全身を使って経験することによらなければ理解できない、という事を強調されました。そういった体験をとおした学びが、さまざまな問題と向かい合ったときに問題解決や対処の仕方の拠りどころとして働く。そういう自分のベースになるものを、学生時代に体に刻み込んでほしい。そういった自分の体で物事をつかむ経験を自分の中に豊かに持っている先生はぶれないし、教育実践にも積極的に取り組んでいけるそうです。逆にそういうものが乏しいとき、マニュアルに頼った実践しかできず、それは先生だけの問題ではなくて、その先生のもとにいる子どもたちの学びが浅くなることにも繋がります。

今回、牛山先生は、物事の内実や実体をつかんでいくという経験を持っている教師と、そういう子どもが共鳴しあうことは重要であるとおっしゃいました。教師が子どもたちの世界に飛び込んでいって、そしてやってみたときに、大事な事はこれか、子どもたちがあの時あんな風になったのはこういうことだったのかというところで子どもを理解する。あるいは学習の内実をつかむってことが始めて可能になる。子どもはそうやって物事を学んでいくのだから、教師もやはりそういう姿勢でいることがものすごく大切であるということを教えていただきました。

7．私が先生になったとき

最後に、牛山先生が講演会で私たちに贈ってくださった一編の詩をご紹介します。

宮沢賢治「私が先生になったとき」

私が先生になったとき
自分が真理から目をそむけて
本当のことが語れるか
私が先生になったとき
自分が未来から目をそむけて
子どもたちに明日のことが語れるか
私が先生になったとき
自分が理想を持たないで
子どもたちにどうして夢が語れるか
私が先生になったとき
自分に誇りを持たないで
子どもたちに胸をはれと言えるのか
私が先生になったとき
自分がスクラムの外にいて
子どもたちに仲良くしろと言えるのか
私が先生になったとき
自分の闘いから目をそむけて
どうして子どもたちに勇気を持てと言えるのか

◇実践から得た「臨床の知」

「YOU遊フェスティバル」を学生がやる意義とは

常盤千明（教育実践科学専攻３年）
大高真理（教育実践科学専攻３年）

「YOU 遊世間」の中の一つのプラザとして存在する「YOU 遊フェスティバル」。「YOU 遊フェスティバル」を通して、学生はどんなことに気づき、どんなことを学ぶのであろうか。それらのことを考察しながら、「多様な他者とのかかわり」・「学ぶこと、勉強することの大切さ」・「協力者の大切さ」という３つの観点から「YOU 遊フェスティバル」の意義について考えていく。

１　多様な他者とのかかわり

多様な他者との関わりの中で、子どもからの学び・協働することからの学び・自分を客観視することからの学びの３つから述べていく。それぞれの始めに、講座に参加した学生からの感想を述べる。

１．１　子どもからの学び

○トイレ移動のとき、子どもが「敵に見つかるから、早くいかないと！」と廊下を走っていったとき、まだまだ子どもになりきれていなかったと子どもから学んだ。また、子どもが、ペイントを指で少し取り、おそるおそるほっぺにおいた子どもが、次から次へとたっぷりつけていく様子や、やりたくないと逃げていた子どもが、お昼からバッチリペイントをした様子から、やってわかる楽しさを感じてくれたのではと考える。

（HERO なりきり隊に参加した学生の感想より）

○子どもがよい意味で単純で、発想が豊かということを実感した。

（ピタゴラそうちをつくっちゃおうに参加した学生の感想より）

子どもたちは、私たちが予想もしない反応や行動をとる。子どもたちと関わって初めて、その子どもたちの考え方の柔軟性に気づくことができる。私たちは、講座を企画する上で子どもたちの反応を考えながら企画していくが、その子どもたちの予想しない反応を目にしたとき、子どもたちの発想のすごさや素晴らしさを実感する。子どもたちと活動することを通して、学生は子どもたちとのギャップを感じる。このギャップこそが、教師を目指す学生を大きくさせる学びとなると私は思う。

１．２　協働することからの学び

○「YOU 遊フェスティバル」を通して、一緒に企画したスタッフから人のやさしさと共同・共働ということを学んだ。自分も仕事を持っているのに「手伝おうか？」と声をかけてくれたり、体調を気遣ってくれた。当たり前かもしれない。しかし、そんなみんなを見て、すごいと思い、忙しいときこそ思いやる気持ちを大切にしようと思った。

（わんぱく大運動会に参加した学生の感想より）

○スタッフの考え方の違いがあることを認めながらも歩み寄っていく過程の大切さを学んだ。

（わんぱく大運動会に参加した学生の感想より）

○今まであまり他大学の人と関わる機会がなかったのですが、一緒に何かしらの活動をすることで、うまくとけこめたように思う。共同作業の力ってすごい！

（ピタゴラそうちをつくっちゃおうに参加した学生より）

○一つのものを協力して作り上げ、できあがったときの喜びを共に味わうことで、自然と仲良しの輪ができあがっていた。感動が人と人とを結びつけるということを学んだ。冗談で、「つなごう！　装置と心」なんていっていたけど、冗談じゃなくて、本当に心もつながった気がする。（ピタゴラそうちをつくっちゃおうに参加した学生より）

○人と人とのつながりで、問題がいくらでも簡単になることを知った。

（宝を見つけるのは君だに参加した学生の感想より）

以上の感想から、学生は皆でつくりあげる活動をすることで、他者の大切さを学ぶ。一人ではできないことも、友達がいたら可能になる。一人ではつまずくことも、友達がいたら解決策を一緒に考えることができる。それゆえ、他者の存在は、自分自身の道を切り開いてくれる力となる。他者の存在は大切であり、必要だということを「YOU 遊フェスティバル」のような活動を通して、それぞれに実感し、学んでいく。

また、他者とのつながりによって、人の温かさを感じることができる。人の温かさを知ることは、人を思いやる気持ちを育むと私は考える。そのため、学生は他者との関わりから、人の温かさと人を思いやる気持ちを学んでいく。

１．３　自分自身を客観視する

○自分とは、違った考え方や感じ方を持っていることをすごく感じた。人の意見を受け入れること、自分の考えをしっかり持つことの必要性を学んだ気がする。

（ぼく・わたしはケーキやさんに参加した学生の感想より）

○他大生は、やはり遠くから来るということだけあって、子どもたちと積極的に触れ合っていたり、教育に関してちゃんと自分の考えを持って、それを口に出せていた。そんな姿を見て、私も頑張らなきゃいけないと思った。（おやこでおやきに参加した学生の感想より）

○みなさん、一人ひとりがとても前向きで、元気がよく、やる気はあるが、それを表現できない自分がいて、少し悔しかった。もっと自分から、積極的に色々な人と関わり、様々なことを学んでいけたらいいなと思った。（おやこでおやきに参加した学生の感想より）

○自分がいかに何も考えていなくて、無力なのかということを学んだ。

（HERO なりきり隊に参加した学生の感想より）

○他人を知るのは、自分を知ること。（HERO なりきり隊に参加した学生の感想より）

上に述べられた感想から、多様な他者と関わることで、学生は自分自身を見つめなおしている。つまり、他者を見ることで自分自身を見つめ、他者を知ることで、自分自身を知るのである。時には、悔しい思いや自分の無力さ、情けなさを感じるが、皆それを感じることで、自分を成長させるために次へとつなげようとしている。子どもたちと関わりが足りないと思った学生は、子どもたちともっとかかわりたいという意思を持ち、信州大学という枠の中に引きこもっている学生は、他大学の学生の活動にも参加してみたいという意思を持つ。他者とかかわり、自分自身を客観視することで、自分自身が成長できるために、具体的にどうしていきたいのかという目標を持つことができる。これは、学生にとって大きな変化である。このように他者とかかわり、自分自身について考えることで、学生は成長していく。

2　学ぶこと・勉強することの大切さ

今回の「YOU 遊フェスティバル」では、信濃教育会教育研究所副所長である牛山栄世先生をお招きして、『学生時代に培うべき教師の専門性』というテーマのもと講演会を行った。そして、講演会後には、『信頼される教師になるには』というテーマで、19 分科会に分かれてディスカッションを行った。講演会・ディスカッションを通して、学生は以下のような感想を書いている。

○今回のディスカッションでは、改めて勉強することの大切さに気づかされました。「YOU フェス」は子どもたちとの活動がメインのようにも思われがちですが、そこにはやはり、学生の持っている知識や体験などの「学び」があるのだと思います。講演会でも「体験すること」の大切さが言われていましたが、それはあくまで勉強という大前提の上にあることで、私たち大学生はそれをないがしろにしてはならないでしょう。教師の姿から子どもたちの学びが生まれてくると考えると、学生のうちから常に学び続けようとする姿勢を持っていなければならないと痛感しました。(宮川はるな)

○ディスカッションのテーマや方法を決める過程で実際に何度もプレのディスカッションをしました。その中で「勉強を教えること」の大切さという項目が何度も出てきました。「YOU 遊」の活動をしているとこの「勉強を教えること」の重要性はあまり重視されていない雰囲気があります。それどころかどちらかというとあまり重要と考えない雰囲気があります。しかし、プレの中では「専門性のある教師」、「理想の教師」、「信頼される教師」など試した全てのディスカッションで必ず重要なものとして挙げられました。つまり意識はしなくてもみんな「勉強を教えること」は大切だと考えているのだということが分かりました。この発見は特に「YOU 遊」で活動している学生にとって重要の発見だったのではないでしょうか。(肥留間淳也)

○「信頼される教師になるために」というテーマの中で、「授業がしっかりしている先生」という意見が出てきたのが新鮮だった。これは私にしてみれば考えもしなかったところである。私はどちらかと言えば教師にとって授業はある程度どうでもいいものではないだろうかということを感じていた。私自身小学校時代の授業でおぼえているものがないからだ。しかし、それは間違いなのだということに気付かされた。授業こそが唯一全員に共通の教育機会なのだ。例えば部活動に熱心な先生は部活動の子からは信頼されても、自分のクラスの子からは信頼されないのかもしれない。教える事こそが教師の職業なのであるから、そこをおざなりにやってしまう先生は専門性がないし、信頼などできないのだという風に感じた。優しい子を育てる、立派に育て上げると言うのははっきりいってお母さんにもできるのである。教師はそこにとどまってはいけないように感じた。＋αで出来る事、それは授業でしっかりと子ども達に力をつけてあげることではないだろうか。その技術は思っている以上に難しい。しかし大学の授業では専門家がそれを分析しているのである。信頼され、専門性のある教師になるためにも私たちは今の授業を大切にし勉強しなければならないと感じた。(春原圭佑)

○教育学部に身を置くと、社会的経験が大事であるということは、普段からよく言われることである。もちろん社会的経験は教師という枠にとどまらず、人間としての価値を高めるものである。だが、教科の知識を持つことは、やはり教師としての必須条件だということを、ディスカッションを通して、改めて確認することが出来た。そもそも、社会経験だけ豊富でも、教師になった時に子どもに教えることが出来なければ、意味が無い。「勉強をしろ」と

子どもに言うのに、教師が学生時代に勉強していなければ、その言葉には価値が無い。「勉強なんて、教師になった後でいくらでも出来る」と、よく言われるが、教師になったら、勉強する時間なんて無い。今しか出来ないこと、それが勉強することだと思う。(江花悠)

以上の感想から、教育学部の学生は、「自分が勉強し、専門的知識を身につけ、それを教師として子どもたちに教授していく」という勉強の重要さを根底には持っている。しかし、教育学部の中にいると、勉強という理論よりも、実際に子どもたちと接したり、活動したりという実践的な体験を重視する傾向にある。どうしてそのような傾向になるのか。それは、実際の教科指導法の授業を受けても、単位をとるための暗記勉強にしかなっていないからだと考える。そのような暗記勉強ばかりしても、実際子どもたちの前に立つと、何もできなくなる。そこで、私たちは、体験することの重要性や素晴らしさを知る。そのため、「学校の勉強なんて意味がない」とか「大学の勉強は使えない」という考えに至ってしまいがちである。

しかし、忘れてはいけない。私たちは、教師になったときに、子どもたち全員と向きあうのは、授業の中でしかありえないということを。その大切な貴重な時間の中で、私たちは自分の知識をもとに、授業を行っていかなければならないということを。それゆえに、実践的な体験も大切ではあるが、勉強をして、教科の幅広い専門的知識を培うことも必要なのである。

教育学部の学生は、勉強することの重要性や大切さを根底では理解しているものの、自分の言葉として理解している人は少ない。しかし、ディスカッションの中で、自分の言葉として発言する中で、勉強することの重要性や大切さに気づくのではないかと感じた。また、講演会やディスカッションを通して、教師としての職業を客観的に見ることもでき、改めて勉強することの重要性や大切さに気づくことができた。それゆえに、私たちは、教師になるために「YOU 遊世間」での実践的な活動の中で子どもたちから学ぶと共に、教師として自分が教える立場に立つために、専門的な知識を得る理論的な勉強もおろそかにしてはいけない。

3　協力者の大切さ

今回の「YOU 遊フェスティバル」は、初めての二日間実施ということで、準備段階で大学生協や学務係など多くの方に協力していただいた。また、「他者とのかかわり」を重視したことから、信州大学の学生の協力や他大学の方の協力が大きな力となり、「YOU 遊フェスティバル」を無事に終えることができた。このように多くの協力者とのかかわりの中で、普段は気がつかないことを知り、またそこから考えることができた。協力者の方とのかかわりから、学生は以下の感想を持っている。

○今回、実行委員として「YOU フェス」という企画に携わってみて、私たちの活動が本当に多くの人に支えられているのだということを強く感じました。講演会の講師の先生と連絡をとるときや、市内の小学校・施設にチラシを配って宣伝するときなどには土井先生に力を貸していただき、また、当日までの準備や当日の活動には大学側の協力がなければ、これほど規模の大きな「YOU フェス」を行うことはできませんでした。それに加えて、忘れてはならないのが大学生協のバックアップです。休みにもかかわらず朝早くから来ていただいた店長のご好意は、私たちの活動を力強く支えてくれたと感じています。そのほかにも多くの人の支えがあったからこそ、今回の「YOU フェス」が形となったと思います。今年の「YOU フェス」は、人とのつながりを強く感じさせてくれるものだった気がします。(宮川はるな)

○私たちは、今年も当たり前のように「YOU 遊フェスティバル」を開き、当たり前のように終えようとしている。しかし、その当たり前ができるのは、土井先生が一から創りあげてこられた過程があったからこそである。そのことを忘れてはいけない。

また、保護者さんたちの口コミで「YOU 遊フェスティバルはおもしろい」と広がっていったことも事実であるし、「うちのお兄ちゃんの小学生のときからずっと参加させてもらっています」という声も応募はがきに書いてあったりもした。私の通っている美容室の23 歳の方は「ユーユーサタデーまだやってるの？　あれおもしろかったんだよね」などとたくさんの温情あふれる言葉をいただいた。土井先生が学生と一緒に創り上げてこられたものは、本当に卓抜したものであり、そこに私が加われたということはとても幸せなことだなと実感した。(大高真理)

○茨城大学の学生さんとお話した時、「茨城大では活動のための準備をしても、まだ子どもたちを集められないでいる」という話があった。私たちは子どもが集まってくれることを当たり前のことのように考えがちであるが、それは土井先生がいろいろなところで私たちの活動を支えてくださっているお陰なのだということを強く感じました。このことは学生一同しっかりと心に留めておかなければならないことだと思いました。(肥留間淳也)

○茨城大学から参加していただいたことが勉強になったように感じる。茨城大学では現在「YOU 遊」の活動のようにさまざまなプラザが活動をおこなっているという。しかしそれはひとつひとつばらばらであるため、このように大きな活動にはならないという話を聞いた。「YOU 遊フェスティバル」にはその各ボランティア団体に声をかけ、興味を持った人が来るという形であったようだ。そこから、これは２つ目の学びであるが、地域や土井先生といった協力者の存在の大きさを感じる事ができた。普段なにげなくやっているが、協力なしに、私たちは様々な活動をすることはできない。今回のフェス一つとってもそれは私たちがやりたいという気持ち一つでできたわけではない。土井先生がつくりあげた「信大 YOU 遊世間」という母体があり、地域協力者のおかげでできている各プラザからたくさんの子どもたちが集まってくれたことで初めて成立しているのである。この気づきを私は忘れてはならないと感じた。(春原圭佑)

３．１　保護者の協力

以上の感想から、まず一つ目に保護者の方の協力がある。今年は多くの保護者の方々が参加してくださった。その中でも、「他者とのかかわりを大切にしたい」という学生の願いに共感し、参加してくださった保護者の方も多かった。保護者の方の参加が多いおかげで、子どもたちは、より大きな刺激を受けたことと思う。ピタゴラ装置をつくろうの講座では、あるお父さんが真剣に装置をつくっていた。その様子を子どもたちが見て、「もっとこうしたらいいんじゃない？」と話したり、それに対して「でも、そうすると……見てろ……ほら、うまくいかないだろ？」というようにやりとりが生まれ、子どもと保護者の方が共につくりあげようとしていた。このことからも、子どもと大人が共に学ぶことには、大きな意味があと感じる。そして、そのような活動ができるのが、「YOU 遊フェスティバル」なのだと思う。また、講座を運営する上でも、多くの保護者の方がスタッフのような役割をしていただき、大きなけがもなく、終えることができた。多くの参加していただいた保護者の方々に感謝である。しかし、参加しなかった保護者の方が何もしていないかというとそうではない。このような活動に自分の子どもたちを参加させるのは、勇気と信頼が必要だと私は感じる。なぜなら、私たちのように

「YOU 遊世間」の活動を知っている側の人間からしたら、「YOU 遊世間」の活動の素晴らしさをよく理解しているが、世間一般で見たら、あやしまれてもおかしくない活動である。それは、子ども集めをしているときにも感じたことだ。いくら私たちの活動の素晴らしさを語っても、私たちは学生で、安全の管理はしっかりできるという保障がないという理由で、断られたことが何回かあった。そんな中でも、私たちの声に耳を傾け、「YOU 遊フェスティバル」のような活動に参加させようと信頼をおいてくださった保護者の方々に本当に私は感謝したいと思う。

３．２　学部会計係、学務係、大学生協の協力

二つ目に、「YOU 遊フェスティバル」を通して、大学生協の方々や学務係、会計係の方々の協力に気づく。これは、実際に企画している中でも感じることであった。必要な物品や食事のことについて相談に応じてくださり、私たちの希望により近くなるように手配や準備などをしてくださった。また、当日使用したい教室の確保、ストーブの確保、講座で使うものの確保など、講座で必要なものは、学務係の方々のお力がなければできないものであった。

三つ目に、今年は他大学からの学生も多く参加し、協力してくれた。上の感想にもあるが、茨城大学では、「YOU 遊フェスティバル」のような活動ができないということも初めて知った。このように他大学の学生が参加し、お互いの活動について話し合う中で、自分たちの活動が客観視できる。客観視できることによって、自分たちの活動で恵まれている点や自分たちには足りない点も見えてくる。例えば、茨城大学の方のお話を聞いて、「YOU 遊フェスティバル」のような活動をできる喜びやありがたさを感じることができたし、また一方、「YOU 遊世間」のような活動では、毎回の活動にしっかりとしたねらいを持つことはあまりないが、他大学の学生は、しっかりと教育的意義をはっきりとさせて活動している。このように、他大学の学生との触れ合いは、私たちに大きな刺激を与えてくれた。

３．３　大学教員の協力

最後に、「YOU 遊フェスティバル」を通して、土井先生のお力の大きさ・温かさを学んだ。子ども集めをする中で、応募する子どもたちの大半が、普段の「YOU 遊世間」の活動に参加している子どもたちである。そのことからも、普段の「YOU 遊世間」の活動がもとになって、「YOU 遊フェスティバル」が盛大に行われていることがわかる。ゆえに、今まで「YOU 遊世間」の活動を続けてきたことが、今年の「YOU 遊フェスティバル」につながっているのである。周りの人たちは、「学生がこんな活動をしているのはすごい」、「熱意がある学生だ」と活動している学生の力に目がいきがちであるが、学生が活動を行えているのは、土井先生のバックアップがあるからなのである。土井先生は、私たちがやりたいことを実現するために、様々な方法を共に考えてくださった。食事のことや、講演会のこと、前夜祭や後夜祭のことなど、学生も子どもたちも危険がないように、いつも考えておられ、温かい目で見守ってくださっていた。また、土井先生は「目的や目標をしっかり持てば、あとはそれに向かって進むだけ。方法は、あとから考えたらいいんだよ」という言葉をかけてくださった。その言葉には、沢山の希望がつまっていると私は感じた。このように「YOU 遊フェスティバル」を通して、土井先生の存在の大きさや温かさを感じるとともに、先生がつくりあげてこられた「YOU 遊世間」の活動の大きさや素晴らしさを学んだ。これからも土井先生のもとで続けていきたいと強く感じる。

このように「YOU 遊フェスティバル」は、沢山の協力者がいてこそ成り立っている活動で

ある。「YOU 遊フェスティバル」を通して、沢山の協力者への感謝の気持ちを感じるとともに、その人たちとのやりとりで、上に述べたような普段は目が行かない多くのことを学び取っている。

4　最後に

このような活動の企画・運営をしていると、子どもたちとかかわることは決して当たり前のことではなく、貴重な活動なのだということを感じる。教育学部に身を置くと、子どもたちとかかわる機会は、他学部と比較したら、多いほうである。そのため、子どもという存在が身近すぎて、一番大切なことを忘れがちになっているように思う。私たちが子どもたちと関わることができるのは、本当に貴重な機会であり、経験であり、子どもたちと共に活動できることは、とても幸せなことなのだということを感じた。

上の三つの観点から、「YOU 遊フェスティバル」で学生が感じることや学ぶことを述べた。これは、参加してくれた学生のほんの一部の感想や意見をまとめたものだ。学生たちは、「YOU 遊フェスティバル」に参加して、それぞれに感じ取り、自分の課題をみつけている。多様な他者とふれあい、他者に感謝し、自分自身を見つめなおし、自分自身の課題を明確にする。これが、「YOU 遊フェスティバル」を通して、学生が学んでいることであり、この過程が学生を大きくしていくのだと私は考える。ゆえに、「YOU 遊フェスティバル」の活動は、学生にとって、とても有意義なものであり、実践的な力へとつなげる経験となるのである。

「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介

「信大 YOU 遊」の取組は、平成６（1994）年６月６日の実行委員会開催から始まり、その10年目（平成15年度）から「信大 YOU 遊世間」と改称し、以来、地域社会のさまざまな団体・個人と連携させていただいています。その際、大学側からお願いしていることは、次の４点です。

① 子どもの育成や世代間交流などのふれあい体験ができること。
② 学生も企画段階から参画できること。
③ １年間単位での継続的な自然体験や社会体験ができること。
④ 子どもの安全等の責任は、その団体において受け持っていただくこと。

これらの条件を規準として両者の間で協議し、合意を形成しながら活動を進めてきています。学生は地域社会のご期待に応えられるよう汗と知恵を発揮することに努めています。

「YOU 遊」の取組をまとめた「報告書」も、本書で第14集となりました。この間、学生は陰に陽に地域社会からご厚誼をいただいてまいりました。それらのことは、いづれの「報告書」にも感動を持って記述されております。次に、これまで長年にわたって大変お世話になっている団体・個人の方々をご紹介し、感謝の意を捧げたいと思います。

1．JA 長野中央会・JA ながの・JA グリーン長野
「人づくり」の智慧を「土づくり」の体験学習を通して学ばせていただいています。
学生はその豊かな感性で、農作業体験から実に多くのことを吸収しています。

2．長野市茂菅地区農家
「信大茂菅ふるさと農場」の水利用にあたっては、４軒の農家の輪のなかに入れていただき、水管理のお世話になっています。特に地元農家の林部信造氏ご夫妻には、農場と地域社会の調整役としてお世話になっています。

3．長野県長野養護学校保護者の会
お母さん方がお子さんに接しておられる姿を通して、学生は一歩一歩障害児との関わりを学ばせていただいています。

4．長野市立湯谷小学校保護者の会
子どもの活動のために保護者と学生がどのように連携すればよいのかを試行錯誤しながら学ばせていただいています。

5．青木村教育委員会・麻績村教育委員会・須坂市教育委員会
村や市をあげて学生を受け入れ、伝統文化が息づく環境の中で学生を育てて下さっています。

このほかにも多くの団体・個人の皆様のご協力をいただいています。どうぞ、今後ともよろしくお願い申しあげます。

（土井　進 記）

編集委員会規程

平成18年3月16日制定

第1条　編集委員会の設置

「信大 YOU 遊世間」の実践記録を、学術的価値のある教師教育学研究として高めていくために編集委員会を設置する。

第2条　編集委員会の構成

「信大 YOU 遊世間」の運営委員（運営委員長、副運営委員長、各プラザ長）と「YOU 遊フェスティバル」の実行委員、その他編集委員会において必要と認めた者が編集委員となり、編集委員会を構成する。

第3条　編集委員長

編集委員長、副委員長は委員の互選によって決める。

第4条　編集方針

(1)　各プラザの実状に即した編集を工夫する。

(2)　学生の視点だけでなく、必要に応じて広く地域社会の協力者や専門家の意見も取り入れる。

(3)　第1次原稿の提出は12月25日、第2次原稿の提出は1月20日。発行は3月末日とする。

第5条　執筆要項

(1)　執筆する際は、「信大 YOU 遊世間」の実践と「YOU 遊フェスティバル」の実行を通して、実践的指導力のどのような側面を養成することができたのかが明らかになるように、具体的に記述する。

(2)　実践的指導力養成の側面は、以下のとおりである。

A：子どもへの興味･関心

B：子どもが秘めているパワーへの共感的理解

C：子どもとのコミュニケーション

D：広く豊かな人間力・社会力

E：大学における学問力

F：広場（プラザ）や講座の企画力

G：わかりやすい授業力、楽しくなる実践力

H：学生どうしの協働力

I：保護者、地域社会の人々との人間関係構築力

J：その他

第6条　この規程は、平成18年3月16日より施行する。

おわりに

土井　進（教育科学講座　教授）

今年度も信州大学本部並びに教育学部からフレンドシップ事業経費を充てていただき、本報告書を発行することができました。温かいご理解とご協力に対しまして衷心より御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。お陰さまで平成６年度の第１集以来 14 冊目となり、内容面においても充実を図ることが出来ました。

特に今年度は学生一人ひとりの感想を並列的に配置した従来の報告書という形態から脱皮するために、各プラザ長が自分のプラザに関わってくれた学生の原稿をとりまとめて、どのような学びがあったのかを分類、整理して、プラザごとに１本の論文として執筆することにしました。地域社会の子どもたちや保護者の皆様との１年間にわたる活動を通してどのような学びを得たのか、しっかりと省察して記録に残し、次へのステップとしていきたいと思います。

「信大 YOU 遊世間」の実践はフレンドシップ事業と名付けられているように、活動を通して学生同士が切磋琢磨し、肝胆相照らす仲へと友情を深めていくことが大きな目標の一つとなっています。この点においては、学生は苦労を共にすることによってお互いに「善き友」となり、強い絆を結んでいます。「YOU 遊世間」の全体会に見られる明るさ、元気良さ、積極性は、この強い絆の現れと言えましょう。

「善き友」を得ることの大切さを説いた釈尊の次のような話があります。ある時、釈尊に、弟子の阿難が尋ねた。「善き友を持てば、仏道を半ば成就したことになると思いますが、いかがでしょうか？」。すると釈尊は答えた。「それは違う。善き友を持つことは、仏道の半ばではなく、仏道のすべてなのだ」と。

１年間にわたる「YOU 遊」の活動を通して尊い友情の絆を結ばれた皆さんに心からの祝福を贈りたいと思います。

【編集後記】

今年の実践記録は、今までとは異なり活動に参加してくれたみなさんからアンケートをとり、それをもとに各プラザ長が編集するという形をとりました。これはより一貫性のある文章にすることにより、活動を通して学生が得たものをより明確にしたい、という気持ちのあらわれであります。なれない文章の構成に、プラザ長も相当苦労したようですが、みなさんのがんばりで一冊の本ができたことをうれしく思います。

私自身読んでいて、プラザ長のプラザに対する想い、そして地域協力者の皆様の存在の大きさを感じました。あらためて活動を振り返り、さらなる発見をすることもできました。自分が行ったことのないプラザの魅力も文章の中から伝わってきます。このような形として自分たちが運営してきた一年間が、記録としてずっと残り続け、また「YOU 遊」のこれからの発展に貢献できればこれ以上にうれしいことはありません。

最後にアンケートに協力してくださった学生のみなさんをはじめとして、忙しい中文章を書き上げてくれたプラザ長のみなさん、地域協力者の方々、土井先生をはじめとし、ご協力いただいた先生方に心より感謝いたします。また暖かく対応してくださった春日さん、その他この実践記録にかかわってくれたすべての人に心から感謝いたします。ありがとうございました。

2008（平成 20）年２月 20 日

編集委員長　春原圭佑

表紙解説

“おはなちゃん”というキャラクターが、正直、「共鳴」というテーマに沿ったものであったのか・・・謎のままです。自信がありません。けれども、私は、“おはなちゃん”の力を信じます。周りへと「共鳴」を伝えようとする私たちの、今年の「YOU遊世間」の中心となって活躍してくれたはずですから。“おはなちゃん”を見たら笑顔になってくださいね。

斎藤有希（言語教育専攻3年）

＜第14集編集委員会＞（◎委員長　○副委員長）

◎春原　圭佑（実3）　○須貝　和之（社3）
○石井絵理子（社3）　落合　静香（社3）
滝沢　典子（障3）　田村　将太（実3）
齊藤　有希（言3）　野口　洋憲（社3）
布山奈津美（言3）　洞出　直美（実3）
上田　雄介（理3）　加藤　博美（実3）
土田　恵久（社3）　青木　智博（実3）
旗持　貴優（理3）　小池　真弓（生3）
平野　結（障3）　大家恵梨子（社3）
青木みなみ（障3）　上田　綾乃（実3）
藤岡　泰裕（実3）　細田　有希（生3）
山崎　友美（生3）　常盤　千明（実3）
大高　真理（実3）　土井　進（教員）

平成19年度　教員養成学部フレンドシップ事業報告書
授業科目名「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大YOU遊世間（ワールド）」の教師教育学研究　第14集

—地域貢献の「体験」に観る「臨床の知」の「省察」—

2008（平成20）年3月27日印刷 ©
2008（平成20）年3月31日発行

編　集　第14集編集委員会
発行人　土井　進
E-Mail : doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp
発　行　信州大学　教育学部　教師教育学研究室
〒380－8544　長野県長野市西長野6－ロ
TEL 026－238－4260　FAX 026－238－4260
制　作　オフィス春日
E-Mail : xmbxp 210@ybb.ne.jp

みんなの勇気が
元気になる

「臨床の知」

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、
他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした
新しい教育体制に生まれ変わりました。